

靖國神社年越し詣で

回を重ねて今年連続5回目となる靖國神社年越し詣である。八十路を越えて早2年、靖國神社への思いは年毎に高まる。そして、年越し詣での人波も回を重ねる毎に増えてきたように思



元旦午前零時の靖國神社拜殿前



年越し詣での人波（神門開扉直後）



奉納大絵馬

われる。若者が圧倒的に多く、外国人の姿も実には多い。

靖國神社ほど参詣者を手厚く遇して下さる神社はないのではないか。特に年越し詣でに当たっては、寒さを凌ぐための種々の配慮がなされている。境内各所での、ボイスカウト東京連盟

の大勢の少年・少女達による庭燎（かがり火）奉仕、遊就館前における熱い甘酒の接待、終夜開館されている遊就館、参集殿内でのお茶の接待等々。勿論、外苑参道の両側には沢山の屋台が立ち並び、参詣者が一時の暖を取り腹

寄せをするには事欠かない。若者や家

例年のとおり我が家では、大晦日の年越しそばは、自家製の手打ちと決めている。自家製といっても、我が陸士の山林を開墾して栽培した、純粹の信州そばである。何と言っても流した汗

族連れにとっては楽しい年越し詣である。日本人の古里がそこにはある。そして、内苑に進み身を清めて神前に頭を垂れば、我々の先祖や先輩、同僚の御霊が手厚く祀られている。国のため命を捧げた人々の英魂が、身分の如何を問わず鄭重に祀られているのである。

報 特 攻
平成22年2月

第 82 号

財団法人 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

〒105-0014 東京都港区芝 2-5-19TAビル

電話 03 (5730) 1016
FAX 03 (5730) 1017

http://www.tokkotai.or.jp
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 羽淵徹也
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

靖國神社年越し詣で……………	1
平成22年 年頭のご挨拶……………	3
皇居参賀二題……………	4
回天の追憶と祈り(抄その二)……………	7
特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の戦後の歩み(その五・その六)……………	12
第42回豫科練戦没者慰霊祭……………	16
大阪護國神社「特攻勇士之像」奉納除幕式に参列して……………	18

平成21年度フィリピン慰霊巡拝旅行に参加して……………	20
川南護國神社例祭に奉る歌……………	22
碑は語る特攻隊番外・碑は語る歴史……………	23
秋山好古顕彰碑建立……………	23
陸軍挺進部隊銘々伝⑥……………	26
稲本 宏少佐……………	28
落下傘の開発・製造・使用……………	31
大いなる暗……………	31
洋の東西に見る……………	31
古色蒼然たる特攻……………	33
海軍飛行機整備予備学生の会(相模野会)に思う……………	36
特集・特攻ライブラリー……………	36
特攻インタビュー(第1回)……………	44
新刊図書紹介……………	54
平成21年度第2回理事会……………	55
評議員会報告……………	55
事務局からの報告等……………	55



靖國神社大鳥居と中天に懸かる満月



靖國神社の中天に懸かる満月



拝殿の臺と中天に懸かる満月



ボーイスカウト東京連盟の少年・少女による庭燎奉仕

の量だけ美味しさもまた格別である。大晦日の夜食は、家族一同揃って今年一年の無病息災を感謝し、そば焼酎で乾杯、香り立つそばの味を堪能し、身も心も程よく暖まったところ得意よいよ出発。外はさすがに冷気深々として身に沁みる。

地下鉄九段下駅を出て坂を登れば、やがて大鳥居が漆黒の空に、ライトを受けて巨人の如く聳え立ち、更にその上の中天には、満月が煌々と輝く。こ

れより第二鳥居までの参道両側には、沢山の屋台が並び、食べ物の臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、いずこも同じ年越し詣での景観である。だが、

ここまでは外苑、下乗札の立つ内苑神域に入れば、凜とした空気に包まれ、数百の参詣者が静かに開門を待つ。圧倒的に若者が多く、筆者のような高齢者の姿はほとんど見当たらない。外国人の姿もかなり多い。歴史と伝統のある日本人の風習が、そして日本人の美しい心が、外国人の目にはどのようなように映っているのだろうか。

閉ざされた神門中央扉の十六重弁菊の大御紋章がライトを受けて金色に輝き、大風と大羽子板が左右の柱に飾られて、新しい年への門出を祝するかのようである。平成21〜22年の靖國神社御創立百四十年記念事業の一つとして

既に改修成った大手水舎の銅板屋根もライトを受けて輝き、その前で庭燎(かがり火)奉仕をするボーイスカウトの少年達の姿も凜々しく映える。

やがて零時30分前、一斉に開扉されると、ライトアップされた正面の拝殿が神々しく目に飛び込んでくる。一同肅々と拝殿前の鳥居付近まで進む。この日、大晦日の夜は風も凜いで絶好の日和、漆黒の空を背景に拝殿の臺が聳え立ち、金色の御紋章がライトに映えて輝き、見事なコントラストをなしている。更に仰ぎ見れば中天、拝殿の真上に煌々と光り輝く満月あり、更にまた今日の拝殿は特別に紫の幔幕を廻ら

し、白く染め抜かれた十六重弁菊の大御紋章が目に見え、鮮やかである。正零時、暗夜の静寂を破って拝殿の大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとうございませう」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、拍手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達を中心ではあるが、真摯な参詣者の姿がそこにある。

新年拝殿掲示の明治天皇御製は「五十鈴川」としたつ波にみそぎしに「ごりなき世をまづ祈るかな」(明治三十九年)である。真に清々しい心洗われる御製である。

拝殿の右横には、例年の如く伊勢絵馬協賛会の安田織人氏から献上された大絵馬が掲げられている。今年も庚寅年、干支の寅に因んでじっと前を睨む大きな虎の絵が描かれている。また、参集殿の前には、全国約三百三十社から奉納された絵馬が美しく飾られており、その中に懐かしい郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。靖國神社に寄せる、護國神社を始めとする全国の神社及び善良な国民の崇敬心の篤さを思わせる。

更に、境内各所で、庭燎奉仕をするボーイスカウト東京連盟の大勢の少年少女達や受付案内の事務奉仕をする崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者、

平成22年 年頭のご挨拶

会長 山本 卓眞



皆様、よい正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

天皇陛下には昨年、御即位20年を迎えられ、政官民挙げての盛大な祝賀式が行われましたが、天皇、皇后両陛下は、寒い中長時間、二重橋上にお立ちになり、数万の国民の万歳にお答えになり、お言葉を述べられました。日本の国柄を象徴する美しい一時でした。

今年の正月は、戦後65回目となります。昭和の初期20年に比べ、平和の続く中での正月は洵に有り難いことです。65回目ということは、第一次特別攻撃隊の出撃からも65年経過

の健気な姿に感動。このような日

本人の心を受け継ぐ青少年のいる限り、未来への展望が開けるような気が

したことを意味します。現在の世界では、地域紛争や小規模戦争は無くありませんが、大規模戦争の起こる確率は極小となりました。そしてこの平和は、特別攻撃隊はじめ多数の英霊や戦火に倒れた方々の礎の上に築かれたものであることを深く熟考し、感謝したいと思います。

一方、日本の周辺は、北方領土を不法占拠したままの国、竹島を不法占拠する国、邦人を拉致し、核を開発し、ミサイルで恫喝する国、周辺に資源があることが判明するや尖閣諸島を自国領土と主張し始め、経済水域も身勝手な自己主張をする国と、油断も隙もな

らぬ国に囲まれています。しかし、従来の政府は相手の主張のみを考慮して国益を損なっています。特に中国は毎年軍事力増強に励み、このままでは、抑止力に大差がつき、日本は相手の恫喝に屈服せざるを得ない方向に向かっています。それにも拘わらず、日本の国防費/GDPは0.9%で、ドイツ1.5%、フランス2.5%、イタリア1.9%などに比べて異常に低くなっ

ています。その上周辺環境は、日本の方が前述の3カ国に比べて遙かに厳しいこと、しかも中国は4.8%であることを考えれば、正に平和ボケとしか言いようがありません。「迫り来る国の家の危機を真剣に考えないのが日本文化の弱点―留守晴夫教授」が明白に現れています。本協会も特攻隊慰霊と並んで平和祈念を掲げていますが、祈念だけでなく、現実的な平和のための「抑止力の強化」を本誌などを通じて、政府、国民に訴えるべき段階になったと思われまふ。会員諸兄の寄稿を歓迎いたします。

参拝を終え、神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている

要請し、代替慰霊施設には断固として反対する運動を展開すべきだと思います。有効な結果を得るために、何時、如何なる方法で、何処に訴えるか、どのマスコミと連携するか、が当面の課題です。

民主党政府については、外交・安全保障、近現代史の認識、外国人参政権、教育問題等今後取り上げるべき多くの課題がありますが、暫く靖國の問題に集中したいと思えます。

昨年、民主党政権が発足し、政府首脳は靖國神社参拝に否定的であるばかりでなく、靖國神社に代わる慰霊施設を造るといふ発言もあります。「靖國で会おう」と言い交わして身を捧げられた英霊に対する背信であるばかりでなく、遺族、戦友、多くの国民への無理解、歴史への不勉強、東京裁判史観の汚染そのものであり、嘆きを通り越して怒りを覚えます。協会は、慰霊諸団体と共に首相以下の靖國神社参拝を

世界経済は依然として不況で、経済活動で現役の方々は特にご苦労が多いことと存じますが、先ずは健康で困難を乗り切っていただくよう念願し、新年のご挨拶いたします。

遊就館で「奉納新春刀剣展」を拝観する。昨年この欄に記載させていただいたが、この刀剣展に関連して再度掲

載させていただくことにする。刀剣、なかんずく日本刀は、古来武士の魂とされ、武器としては勿論であ

るが、破邪の利剣とも言われて、正義、

顕正の象徴とされ、神器としても尊崇

されてきた。三種の神器の一つである

天叢雲劍あめのむらくものつぎ(後に草薙劍くさなぎのつぎ)は、その

最たるものであろう。また、鎌倉時代

の初め、後鳥羽院(上皇)(天皇御在

位第82代一一八三―一一九八年、上皇

御院政一一九八―一二二一年)が各地

の刀鍛冶の名工25名を召されて仙洞御

所で太刀を打たせられ、御自らも埴刃

(刀身に刀紋を付ける工程)を試みら

れ、完成した太刀の茎なかばに十六重弁菊花

紋を銘に代えて刻まれたこと、そして

後に、この菊花紋が皇室(天皇家)の

御紋章となったこと、また、後鳥羽院

の作刀は「菊の御作」として今に伝え

られていることは、周知のとおりであ

皇居参賀二題

暮れと正月二度の参賀に皇居を訪れ

た。12月23日の天皇誕生日と1月2日

の一般参賀である。いずれも好天に恵

まれて前年よりも多くの人々が訪れた。

天皇陛下は昨年こぞの12月23日、76歳の

誕生日を迎えられた。昭和64年1月7

日、昭和天皇の御崩御直後に踐祚して

第一二五代の皇位を継がれ、平成と年

号が改まり、翌平成2年11月12日、皇

居において即位の大礼が行われてから

らう。

ところで、靖國神社の境内にも、か

つては多くの刀匠を抱え、「靖國刀」

と呼ばれる日本刀を鍛造する日本刀鍛

錬會の鍛錬場があったことは余り知ら

れていないので、境内奥の相撲場の南

にある「行雲亭」(今は茶室に改造さ

れている)の銘板からその由来を抜粋

すると、次のとおりである。

「行雲亭は、陸軍省の建築課技師内

藤太郎と柳井平八の設計により、昭和

八年六月二十五日(財)日本刀鍛錬會

の鍛錬所として竣工された建物であ

る。昭和六十二年九月に五つの鍛冶場

の全てが茶室に改装されたが、外観は

当時のままの優美な姿を残しており、

特に屋根上の吹抜けは、鍛錬場にみら

20年を、また、4月10日には、御成婚

(昭和34年4月10日)から50年の、い

わゆる金婚式を迎えられるという節目

の年となった。慶賀の重なる年として

国民挙つて御祝福申し上げたところ

ある。

天皇陛下は、平成21年12月23日、宮

内庁を通じて今年一年の御感想を発表

されたが、その中で陛下は、阪神・淡

路大震災に関連して、この震災を機に

人々の間に、災害に対する協力の輪が

広がったとして、「今日、日本では高

れる様式で、行雲亭本来の姿を物語つ

ている。(財)日本刀鍛錬會は、明治

維新とともに衰退の途をたどった鍛

刀界の復興、国民の愛刀心の向上、そ

して有事に際した軍刀の整備などを目

的に発会。理事長には歴代の陸軍次官

があたり、延べ十一名の刀匠と二十一

名の先手まきでからなる刀工集団を中心に組

織され、終戦までの間、八一〇〇振に

及ぶ良質な日本刀を製作し続けた。そ

こで製作された日本刀は「靖國刀」、

刀匠達は「靖國刀匠」と呼ばれ、当初

の靖廣・靖徳・靖光をはじめ、陸軍大

臣より「靖」の字を冠する匠銘を授与

された。また、大正十五年頃には、日

本古来のたたら製鉄は途絶え、日本刀

の材料となる高品質の玉鋼たまはがねの入手は困

難な状態にあった。そこで、日本刀鍛

錬會は、古代から良質の砂鉄を産出す

る島根県仁多郡横田町に「靖國鑪たたら」を

開設し、そこで生産された玉鋼は五十

数トンに及んだ。

終戦を迎え、日本刀の製作は一時禁

止されたが、昭和二十八年には再開。

また、中断していた鑪操業も、昭和

五十二年には、靖國鑪の技術を継承し

作刀技術の保存を目的とする(財)日

本美術刀剣保存協会が「日刀保たたら」

として復活させた。そこで生産された

良質な玉鋼は、日本刀の材料としてだ

けでなく、茶の湯の釜や東大寺仁王像

修復などにも広く用いられている。」

(飯田正能記)

戦に至るまでの道のりが始まりまし

た。昭和天皇にとつて誠に不本意な歴

史であったのではないかと察しており

ます。昭和の六十有余年は私どもに

様々な教訓を与えてくれます。過去の

歴史的事実を十分に知って未来に備え

ることが大切だと思います」と述べられ

て、歴史認識の重要性と過去の歴史的

事実を踏まえた上での、未来への準備

が大切であることを説かれた。誠に適

切な御立派な御見識に感銘を受けた。

如何なる政・官・財・学各界代表者



皇居・二重橋から国民の提灯の奉祝におこたえになる
天皇・皇后両陛下 (11月12日国民祭典)



皇居前広場を埋め尽くした3万人が提灯と日の丸の
小旗を手に聖寿万歳 (11月12日国民祭典)

の言よりも、陛下のお言葉は誠実味と
恩愛の情に溢れ、有り難く身に沁みる
思いがする。

天皇・皇后両陛下が平成21年にお
詠みになられた御歌(宮内庁発表)
天皇陛下御製(5首)

〈結婚五十年に当たり皇宮警察音楽
隊の演奏を聞く〉

我が妹と過ごせし日々を顧みて
うれしくも聞く祝典の曲

〈カナダ訪問〉
若き日に旅せしカナダ此度来て
新しき国の姿感じぬ

〈即位二十年の国民祭典にて〉
日の暮れし広場に集ふ人と聞く
心に染むる「太陽の国」

〈御所の庭にて〉

取り木して土に植ゑたるやまざくら
生くる冬芽の姿うれしき

〈即位の頃をしのびて〉
父在さば如何におぼさむベルリンの
壁崩されし後の世界を

皇后陛下御歌(3首)
〈カナダ訪問〉

始まらむ旅思ひつつ地を踏めば
ハリントン・レイクに大き虹立つ

〈宇宙飛行士帰還〉
夏草の茂れる星に帰り来て
まづその草の香を云ひし人

〈即位の日 回想〉
人びとに見守られつつ御列の
君は光の中にいましき

○天皇誕生日参賀

今日は12月23日、天皇誕生日の佳き日である。冬至(昨22日)の頃としては珍しく温暖な陽気に恵まれ、空には一点の雲もなく、正に天皇日和と言ふべきか。毎年の嘉例により皇居参賀と記帳に出掛けた。今年は、11月12日の

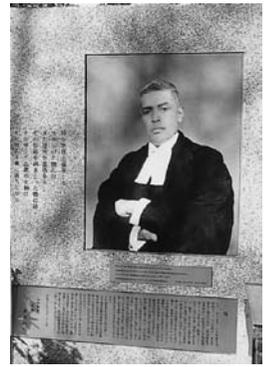
天皇陛下御即位20年の祝賀式典並びに国民祭典の感動未だ冷めやらす、天皇誕生日参賀の人波は平成に入つて最高の3万人を超えたという。日本晴れの青い空と皇居の緑、それに参賀の人々が手にする日の丸の小旗が映えて美しい。やがて天皇・皇后両陛下を始め皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下が長和殿ペランダにお出ましになると、宮殿前を埋める参賀の人々から一斉に万歳の声が上がリ、日の丸の小旗が打ち振られる。これに添えて両陛下並びに皇族方が御手を振られ、にこやかに会釈をされる。皇室と国民を結び付ける最も美しい光景である。その後天皇陛下は、短い御言葉を賜るが、決まって国民の幸せを第一に祈念される。

真に真摯で崇高な御姿である。午前の参賀は長蛇の列で、皇居前広場から検問所を通過、お出ましまでに1時間余を要したが、午後の宮内庁庁舎前における記帳は、所要時間20〜30分で極めてスムーズに終えることができた。

参賀並びに記帳を終え、北の丸公園を経て靖國神社へ向かう。この日は、極東国際軍事裁判(いわゆる東京裁判)で、いわゆるA級戦犯として絞首刑を言い渡された(昭和23年11月12日)七士の方々(土肥原賢二、松井石根、東條英機、武藤章、板垣征四郎、廣田弘毅、木村兵太郎)が、巣鴨拘置所において処刑された日(昭和23年12月23日午前0時1分と0時20分)から61年(62回忌)の命日でもある。

靖國神社参拝を終えて、遊就館前の「ラダ・ビノード・パール博士顕彰碑」に参拝する。この日の顕彰碑には生花が供えられ、大勢の人々、特に若者達が碑前に佇んで熱心に碑文と靖國神社前官司故南部利昭氏が捧げた建立の「頌」に見入っていた。この碑文と「頌」は、極東国際軍事裁判の不当性と同裁判所判事としてただ一人、全員無罪を主張したインド代表判事パール博士の崇高な使命感を端的に表していると思われるので、再度掲示する。

国民と国家の象徴として努められる、



パール博士 顕彰碑

「碑文(意見書の結語)」

時が熱狂と偏見とを
やわらげた暁には
また理性が虚偽から
その仮面を剥ぎとった暁には
その時こそ正義の女神は
その秤を平衡に保ちながら
過去の賞罰の多くに
そのところを変ええることを
要求するであろう

「頌

ラダ・ビノード・パール」

ラダ・ビノード・パール博士は、昭和二十一年(一九四六)年五月東京に開設された『極東国際軍事裁判所』法廷のインド代表判事として着任され、昭和二十三年十一月の結審・判決に至るまで、他事一切を顧みる事なく専心この裁判に關する膨大な史料の調査と分析に没頭されました。
博士はこの裁判を擔當した連合國十一箇國の裁判官の中で唯一人の國際法専門の判事であると同時に、法の正義を

守らんとした熱烈な使命感と、高度の文
明史の見識の持主でありました。

博士はこの通称『東京裁判』が、勝利に
ける連合國の、今や無力となった敗
戦國日本に對する野蛮な復讐の儀式に
過ぎない事を看破し、事實誤認に満ち
た連合國の訴追には法的根據が全く缺
けている事を論証し、被告團に對し全
員無罪と判決する浩瀚な意見書を公に
されたのであります。

その意見書の結語にある如く、大多数
連合國の復讐熱と史的偏見が漸く収ま
りつつある現在、博士の裁定は今や文
明世界の國際法學界に於ける定説と認
められたのです。

私共は茲に法の正義と歴史の道理とを
守り抜いたパール博士の勇氣と情熱を
顕彰し、その言葉を日本國民に向けら
れた貴重な遺訓として銘記するために
この碑を建立し、博士の偉業を千古に
傳へんとするものであります。
平成十七年六月二十五日

靖國神社 宮司 南部利昭」

○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、一点の
雲もない日本晴れ、正に参賀日和であ
る。1月2日は筆者の誕生日でもあつ
て、家族共々朝早めの祝い膳を頂いて
家を出た。



新年一般参賀でお言葉を賜る天皇陛下と皇族方

新年参賀はさすがに規模が大きい、
皇居外苑では、馬場先門、和田倉門、
桜田門の三方向から進んできた参賀の
人波を各検問所で検査をした後、警官
の誘導に従い石橋を渡って正門から入
り、鉄橋(二重橋)を渡って宮殿長和
殿前の広場に至る。いずれも長蛇の列
である。早めにと家を出たが、
地下鉄駅から検問所まで約30分、検問
所から正門石橋前まで約30分、そこか
ら更に広場まで約30分と約1時間半を
要したため、第2回の御出御に合
わず、11時50分頃の第3回の御出御を
待つこと約30分、辛抱の2時間であつ
た。およそ2万人を収容できるという
長和殿前の広場は、手に手に日の丸の
小旗を持った参賀の人々に忽ち一杯に
なった。やはり若者が圧倒的に多く、
華やかな気分満ちている。外国人も
非常に多い。觀光ツアーと思われる団
体も多い。喜ばしいことである。参賀
は日本の伝統文化でもあるからだ。

やがて11時、天皇・皇后両陛下を先
頭に、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・
同妃両殿下が御出御になられると、一
斉に日の丸の小旗が打ち振られ、天皇
陛下万歳の歓声が上ががり、両陛下と皇
族方が手を振ってこれに応えられた。

天皇陛下からは「本年が皆さんそれ
ぞれにとり、良い年となるよう願って
います。年頭に当たり人々の幸せと世
界の平安を祈ります」とのお言葉を賜つ
た。過重な御公務の中にあつて絶えず
國民の上に思いを致される誠実で優し
い陛下の大御心に感動させられた。

今年の一一般参賀での両陛下と皇族方
の御出御は、天皇陛下の御体調に配慮
し、一昨年までの7回から午前3回、
午後2回の計5回に減らされたが、そ
れでも参賀者は昨年よりも35000人
多い7万9290人に達したという。

身も心も清められ、晴れ晴れとした
思いで広場を去り、富士見櫓、旧百人
番所を経て本丸入口から東御苑に入れ
ば、ここも塵一つ、落ち葉一つ無く綺
麗に掃き清められ、一層清々しい気持
ちにさせられた。
(飯田正能記)

回天の追憶と祈り

(抄その二)

鳥巢 建之助

「編注・本稿は、前号(81号)で紹介したように、大東亜戦争末期、第六艦隊(潜水艦隊)参謀(水雷主務・回天担当)であった鳥巢中佐(海兵58期)が平寿を迎えた平成10年に書かれた遺文とも言うべき小冊子(A5判58頁・私家版)であるが、回天の誕生から回天勇士の慰霊顕彰に至るまで、18項目にわたる貴重な史実を書き留めておられるので、その一部を紹介させていただきます。

「この回天碑の題字は何としても高松宮殿下にお願いすべきである」とのことであった。

十 高松宮殿下と回天碑題字

回天基地大津島の地元徳山市の郷友会では昭和30年頃から回天に対する認識が始まり、会長梅田利一氏を中心に33年2月5日、回天碑再建が発表された。そして、その碑文の起草を福井県の平泉澄博士に依頼してきた。

回天に深い関心のある平泉博士は心を動かされたが、旧海軍がこの事業に関係ありや否やを知りたいと松平永芳氏を通じ、私に照会があった。うすうすは徳山の動きは知っていたので、海

軍関係者も承知のむねを答え、ご支援を頼んだ。そのとき「回天碑の題字はどうなっているのか」との問いがあり、「この回天碑の題字は何としても高松宮殿下にお願いすべきである」とのことであった。

私は早速、殿下の海兵同期(52期)で潜水艦乗りであり、戦争中、私の前任者(第六艦隊水雷参謀職)であった渋谷竜庵を訪ね相談した。すると「それは不可能である」と一言ではねつけられた。私は平泉氏を訪ね、報告すると、「それでは私が直接御殿へ参上してくる」と言って行かれた。その後の経緯は次のとおりであった。

平泉氏の依頼に、殿下は「自分には書く資格はない」と固辞され、「貴下得するはずはなく、ご両人は、さてどうしたらよいかと思案された。ところが殿下は、一案を出された。「貴下のところに黒木少佐の遺文があるであろう。その中に『回天』という文字があるのではないか。それを題字にしては」とのお言葉であった。

平泉氏は早速帰国、黒木少佐の遺文を調べ、三箇所『回天』の文字を発見、私の処へ送られてきた。

こうなった以上、一刻の猶予も許さなかつた。私は梅田氏と連絡を取り、

徳山へ行き、松政に梅田氏以下関係者の参集をお願いし、東京でのいきさつを説明し、ご賛同を得た。当時、すでに碑は完成に近かつたらしいが、梅田氏は快く了解され、黒木少佐の遺文の中の『回天』の文字が題字となつた。

十二 回天顕彰会発足

回天碑再建後、大津島への参拝者がふえ、徳山在住の毛利勝郎さんから何とかしなければとの意見がよくあつた。毛利さんは、戦争中、呉工廠に勤め、後半は大津島の魚雷調整所、引き続き回天基地で働いていた人で、回天搭乗員とも仲良く話をしてきた人であるが、私は彼や松政のおしげさんから回天に関するもろもろのことをよく耳にしていた。

ここまでくれば何とかせねばと、かつての第二特攻戦隊司令官(回天部隊の司令官)長井満さんなども話をしたこともあつた。しかし私は「回天作戦」には関係はあつたが、回天部隊とは直接縁はなく、協力はするが、立ち入って口を出す立場にはないと考えていた。

昭和三十七年三月二十一日、横田寛君の肝煎りで、中野区高円寺の根津会館で回天関係者の会合が催された。横田寛君は、回天搭乗員として数回出撃

し、奇しくもその都度、故障のため帰還した経験を持ち、丁度一年前の回天碑除幕式以後仲良くなつていた人物である。

参集した主な人々は、平泉澄先生、長井満元特攻部隊司令官、頼悳吾元技術少将、竹大孝志元大佐、田辺弥八元中佐、鳥巢建之助元中佐、堀夷元技術中佐、特攻隊員故塚本太郎大尉の母堂はじめ二十数名であつた。この席で、回天顕彰会の発足が決議され、長井さんは私(鳥巢)にその世話役を頼まれた。

当時私は自分で細々と仕事をしており、勤めの身ではなかつたので、ある程度自由はきいた。しかし経済的には全く無力に近かつたが、戦争の後半第六艦隊水雷参謀として終始回天作戦に関係しており、回天の創始者黒木博司、仁科関夫両君とも、回天採用の以前から知っていた関係もあり、微力であつたが、引き受けた次第である。

さて、回天顕彰会を発足するとすると、会則も必要だし、趣意書も書かねばならない。また、会長、副会長なども頼まなければならぬ。忙しくはなつたが、生き甲斐も出た。

会則案の作成では、松平永芳氏にご助力をお願いした。松平氏は、最後の第六艦隊司令長官醍醐忠重中将の女聲

であり、かつ平泉先生の弟子で、黒木少佐の兄弟子という関係もあった。

さて、会長、副会長であるが、当時の水交會理事長福留繁元中將(海兵40期)に相談し、開戦時の第六艦隊長官、次いで第一艦隊長官を歴任の清水光美元中將(海兵36期)が最適と推薦され、三十七年四月十五日に目黒のお宅を訪ね、回天顕彰会会長をお願いしたところ、副会長の一人に開戦時の第六艦隊參謀長三戸寿元中將(42期)を加えるようにとの希望を付されて受諾を得た。

こうして、会長清水光美、副会長梅田利一、三戸寿、長井満の各氏という陣容で、回天顕彰会が三十七年七月二十日に発足した。

しかし、金には全く縁がなかった。多少の淨財で印刷費、通信費、奉告祭費などの費用をまかなったが、三十九年十一月には二十千円を余すのみとなった。そこで、出光興産(株)の専務石田正美氏(後社長)を訪ね、十萬円の寄付を頂き、顕彰会を続けた。

十三 回天記念館建設に関する経緯

戦後約半世紀、私は『回天』とともに生きてきたとさえ思っている。その中でも最も忘れたいことは回天記念館建設に関するもろもろの思い出であ

る。

回天顕彰会会則の中で、顕彰の目的を達成する事業五ヶ条が掲げられているが、その(三)と(四)に次のように書かれている。

- (三) 回天関係遺品の収集、保管
- (四) 回天記念館の建設、維持

これらの事業をいかに達成するかが、昭和三十七年三月、顕彰会を発足したときの最大の課題であった。会則を作成する中心にいた私にとってそれは重大な責任でもあった。

私は何か重大問題に直面したと思つた際は、伊勢神宮にお参りするのを例にしているが、三十八年秋、内宮にある常宿(すし久)に泊り、早朝誰一人いない五十鈴川の神橋を渡り、皇大神宮に詣で「ご覧あれ」と額ずいた。

さて、第一の問題は、回天記念館をどの場所に建設するかであった。私は独り善がりの考えだったか知れぬが、必然的に、回天碑の側にある馬島小学校を岡の下の旧回天調整場跡地に移し、小学校の跡地に記念館を建設することを熱望しており、徳山市長や教育長などを訪問し、お願いしていた。しかし、徳山市側では徳山市内の兎玉神社、遠石八幡宮、または計画中の森林公園内などのいろいろの案が出されているようであった。だが私は回天碑と

関係のない場所に記念館を建てることには絶対反対であった。したがって、市長や教育長への私の希望は真剣であった。

ところが三十八年十二月中旬、徳山市議会で結論が出され、岩本教育長からの電話で私に引導が下された。それは次の通りであった。

「旧回天調整場跡の広大な荒地を整地するには一千万以上の経費がかかり、徳山市の会計予算では到底まかなえない。しかも馬島小学校の老朽化はげしく、いつ事故が起こるかかわからぬので、早急に現在地に建て替えることに決定した。したがって貴殿の要望は残念ながらいられない」というのであった。

たまたま徳山にいた私の落胆は深刻であった。しかし何か打開策はないかと考え、一縷のぞみを思いついた。そしてすぐ江田島へ急いだ。

当時、江田島の海上自衛隊幹部候補生学校校長は同期(海兵58期)の市来崎秀丸君であった。後に、彼は二十六年も前の日記をしらべ、その日は昭和三十八年十二月十七日であることを知った。

古鷹山の山麓につながる将校宿舍に一泊させてもらい、一杯やりながら懇談したが、彼はよいことを話してくれ

た。

「現在、防衛庁の事務次官は加藤陽三氏であるが、彼は広島一中出身で、清水鶴造君は級友である。中々話のわかる人であるから清水君を紹介してもどうか」というのであった。

清水君は海兵五八期の同期であり、また八名の潜水艦乗りの一人であった。その八名は戦争中全部潜水艦長として働き、六名戦死し、生き残ったのは彼と私だけであった。

次の朝、なつかしい赤煉瓦の生徒館前で市来崎校長の後方に立ち、午前八時の軍艦旗掲揚を拝し、彼の厚意を謝し、広島へ向かった。

広島駅で清水君とおち合い歓談し、加藤次官への紹介状をもらい、帰京した。

帰京翌日、防衛庁に電話し、加藤次官を訪ね、回天記念館建設に関するわれわれの願いを説明し防衛庁の助力を懇願した。

次の年、彼は勇退し、衆議院議員になるのであるが、彼は後任の三輪良雄次官に申し継ぎをやってくれており、昭和四十年春、四国の陸上自衛隊施設部隊が海上自衛隊の協力のもと、大津島への上陸演習を実施し、またたく間に旧回天調整場跡地の整地を完成して

くれた。

この結果、わずかの経費で待望の整地ができ、徳山市としては、相当の経費節減が可能になった。そこで馬島民の長年の願望もかない、旧回天調整場の広い土地に二階建ての立派な鉄筋コンクリートの小学校、修練道場も建設され、広い運動場にも恵まれた。

したがって、回天碑傍らの小学校校舎は取り壊され、われわれの念願通り、回天記念館が建設可能となった。

ここまでくれば回天記念館建設に邁進する以外なかった。四十年春から夏、そして秋にかけて回天記念館建設趣意書や募金成功の武器ともいべき小冊子「回天」の準備、さらには記念館設計の依頼検討などに忙殺された。

だがその当時は、まだ組織も固まらず一人芝居の域を脱しえない状況であった。

四十年十月一日、趣意書、小冊子ができ、これまでの経緯も多少わかるので趣意書を見ていただくこととする。

回天記念館建設趣意書

回天の碑が、その発祥の地、徳山湾大津島の丘の上に再建されて四年有半になります、この間、回天に関する世の認識は次第に高まり、無慮五万余

人に及ぶ人々が大津島を訪れ、又英、米、伊、タイ等諸外国の青年が碑前に

ぬかずく姿が見られたのであります。特に、アメリカ海軍の艦艇がわざわざ徳山湾に入港し、その将兵が回天碑に花をたむけ、敬虔な祈りを捧げて回天勇士の武勲をたたえたことは、忘れ難いことであります。一方ラジオ・テレビ、新聞、雑誌、映画などにも度々とりあげられてまいり、更に又、三十九

年秋には、オリンピック東京大会と時を同じくして靖國神社で、夫々回天遺品展が開催され、更に四十年には、東京、名古屋、奈良、姫路、九州などの各地で回天の展覧会が行なわれ、回天は同胞の胸に強い感銘を与えて参ったのであります。

このように戦後二十年、回天勇士を追慕する情は次第に高まりつつあります。これは、回天が神風と共に空前絶後とも言うべき必死必殺の特攻兵器であった故だけでなく、彼等若人たちの至純至高の祖国愛が万人を感動せしむるからに外ならぬと信ずる次第であります。

想起致しますと、昭和十九年十一月、回天特別攻撃隊の第一陣が大津島を攻撃してから翌二十年八月に至る間、祖国に殉じた英霊は一三七柱、そしてこれらの勇士が基地を出撃するに当り、

あるいはいよいよ回天に乗って発進するに際して心に念じたことは、実に祖国の必勝発展であり、「あとこのことは頼む」という切実な願いでありました。しかし事は志と違い、回天の念願は果たされず、戦後の混乱の中に、その遺跡すら荒廢のまま放置されていたのであります。

昭和三十四年、有志相諮って回天碑の建設を志し、全国一般の方々の協力を得て、三十六年三月、ようやく除幕式の運びとなり、ついで三十七年初夏、回天顕彰会の発足を見ることになりました。そして回天の英霊を慰め、その遺志に應える所以は彼等の至純の精神をつぐことであり、祖国回天の礎を今日に築くことにありまして、その具体的方法として我々が何をおいてもなさなければならぬことは、回天隊員殉国の至誠を示す遺品、遺文を収集保存し、次代を担う青少年に残すことであると信ずる次第であります。

幸いにして、回天碑再建以来、地元徳山市当局の熱意は年毎に増大し、昨年春、回天碑周辺を公園化すると共に、大津島を国民精神振作昂揚の青少年修練道場にしようとの計画が進められてきたのであります。このことは、回天顕彰会の趣旨と完全に一致するものであります。記念館の運営保全につき

いささかの不安もないことが確認されました。

更に又、記念碑建設予定地の大津島旧回天基地は、今春、陸上及び海上自衛隊の協力のもとに見事に整地され、土地の準備はほぼ完了したのであります。

以上のような次第でありまして、回天顕彰会と致しましては、徳山市当局の協力を得て左記計画のもとに回天記念館の建設を發起致しました。何卒日本の精神的復興のため宜しく御協力のほどお願い致します。

出光興産の協力

清水光美回天顕彰会会長と
出光興産(株)の出光佐三会長

清水光美海軍中将と出光会長は戦前からの長い交友であったが、それは紳士のつきあいであった。私が福留中将の紹介で、回天顕彰会会長就任を依頼に行ったとき、万一の場合をおもんばかり、出光氏に相談したようであった。出光氏は、回天精神を知っており、承諾をすすめたようである。出光興産が会社をあげて支援した元はここにありと思われる。出光氏の信任の厚い石田正美氏と清水さんを補佐する私が回天記念館建設でうまく行ったのもそのおかげであろう。

回天記念館建設のための募金を始めたとき回天顕彰会は無一文であった。募金の重大な武器、小冊子「回天」を準備する金どころではない。通信費さえなかった。

思えば無謀に近かった。昭和四十年の暮れ近く、私は目黒区柿の木坂の石田正美氏宅を訪ね、実情を洗いざらい説明し、ご支援を願った。すると彼は、小冊子「回天」を一万部買い上げるから、出光興産の支店、営業所、出張所、さらに関係会社全部に発送してくれと言われた。冊子は印刷会社から一部四十円で納入してくれるのを八十円で買ってもらうことにし、二万部を作成することとした。すなわち一万部は他の募金運動に利用可能となった。このとき終戦直後、第六艦隊司令長官醍醐忠重中将が、機密費の使用途につき、「この金は一円たりとも私してはならぬ」との言葉を想起していた。

私はこの石田正美氏との会談の際、この「回天記念館」建設事業は成功でき、成功させねばならぬと確信した。やがて「回天」の冊子が家が家へ届きはじめ郵送先の名簿も出光興産(株)から送られてきた。

郵送後間もなく、石田副社長は各部に通達を出し、冊子を各人に配付し、応分の寄付を集め、鳥巢宅へ送るよう

に配慮してくれた。

冊子一万部は無料で手に入り、相当の寄附金が出光関係の各所から毎日届けられてきた。

もちろん募金の前途は多難であった。そこで私は徳山へも出張し、地元の人とも相談し、山口県庁をもたずねた。しかし募金はそう簡単ではなかった。私は、長野の善光寺での募金問題につき、戦争中、海軍大臣を一時務めた野村直邦大将を自宅にたずね、相談した。すると、徳山の仕事の募金を東京でやるのは無理だ、徳山の地元が中心になってやるべきだとの意見であった。全くその通りであると痛感した。

そして清水会長、三戸副会長と相談し、実務の実行を徳山の関係者にお願いすることになった。幸いにして梅田副会長や、長井副会長の同期(海兵45期)で、防府在住の兄部勇次元海軍少将、日新製鋼徳山工場副所長に就任してきた渡辺久氏(元潜水艦長、海兵64期、元少佐、初紅葉社長原田耕作氏(海兵75期)などのご協力により、募金運動も建設工事も順調に進展した。すなわち回天記念館の建設は出光興産(株)の世話で鹿島建設(株)に決定し、設計は徳山の地元で決められた。遺書、遺文、遺品の件である。記念館が

できて、回天勇士の遺書、遺品がなくては魂のない形骸にすぎない。そこで、これまで長年に亘り協力してもらった徳山地元の毛利さんをお願いし、全国のご遺族を歴訪してもらい、可能なだけの遺品、遺文などを提供してもらおうことにした。毛利さんは大津島回天基地で勤務していた呉工廠付きであったため、回天勇士が出撃に際し、預けていった品々を相当多く自宅に保管しており、戦後長く、大津島回天碑

に関する世話をやってくれていた奇特な人物であった。ご苦労千万であったが、全国のご遺族宅を訪問して遺品の収集という大役をお願いした次第であり、毛利さんの長い間のご苦労は絶対に忘れてはならない。こうして、昭和四十三年十一月二十日、つまり回天が初めてアメリカ艦隊をウルシーで奇襲した十九年十一月二十日から二十四年後の同月同日、回天記念館が開館された。

清水会長は八十歳の高齢であったが、回天顕彰に絶大な努力を払われてきた梅田利一副会長が防府の病院に入院中であることを知り、前日、元第六艦隊参謀長佐々木半九少将(海兵46期)と私がお供をしてお見舞いした。病床に伏して涙を流す梅田副会長と清水会長とが、互いに労をねぎらい合

う感謝の握手は感動そのものであった。

記念館が完成して間もない時期、東京ではこの記念館の今後の維持、保管につき検討、長い将来のため、徳山市に寄贈することに決定され、清水会長から徳山市へ贈呈された。そして間もなく、回天顕彰会会長は清水会長から兄部さんへゆずられた。もちろん、私も責任から解放された。

その後であったと思うが、回天搭乗員だった人々によって全国回天会が結成され、現在も活発な活動が続けられている。私は回天搭乗員ではなく、もちろん回天会会員ではない。しかし回天に關係した一人の軍人として、回天に關係する会にはなるべく参加させてもらっている。

十六 回天の探索と靖國神社に展示

戦後約十年位してから、回天の実物を何とか手にしたいと関係者は色々情報を集めていた。しかし大津島、光、平生などの沖に終戦直後投棄されていた回天のほとんどは付近の漁師たちの網で引き上げられ、ひそかに解体され貴重な金属類はよい値段で換金されてしまっているらしいとの噂のみで、一基も目にすることはできなかった。しかし我々は諦められず、まず小灘利春

氏が指揮官だった八丈島の回天突撃隊が終戦後洞窟の中に回天をかくし入口を密閉して復員した話を聞き、一種の望みを託した。そして八丈島の搭乗員だった有志が海を渡り、現地をたずね、中を捜したかも知れぬの殻であった。どこの住民も聞抜けではなかった。

あとは普通の人では手が出せないと思われる深い海、豊後水道(豊予海峡)のみとなった。昭和三十年頃、大阪商船(株)に勤務していた斎藤高房氏(海兵71期)は終戦時、大分県大神の回天基地で勤務していたが、終戦直後、相当数の回天を伊予灘付近に海中投棄を指揮した本人であることを知った。私はこの附近ならば可能性があると考え、海上自衛隊の幕僚長に相談したが、これは成功しなかった。そこで思いついたのが、当時ブームであった深海探索の潜水艇であった。

読売新聞が「深海」と名づけた小型の深々度潜航可能な艇で日本近海の各所で立派な成果をあげているのを知った。そこでつてをたどり同社に接触した。すると幸いに協力を得た。

何年何月かは忘却したが、かつて海軍で潜水艦長を務めていた大場佐一氏(海兵62期)が指揮する「深海」が母船と共に内海西部へ移動し、海底潜航探索をやってくれた。しかし、海は広

い。しかも問題は海底の状況である。瀬戸内海のヘドロが豊後水道へたまってゆくのであろう。海底から数米上までヘドロが堆積し、一寸先も見えず、海底の探索は困難とのことであった。おそらくその海底に投棄された重量物は数十年の間に更に泥土の下に入ってしまったのではないかと推定された。結局この企ては失敗に終わった。こうして「回天」一型の実物はこの世にはないと諦めざるをえなかった。

ところがその頃、一つのニュースが入ってきた。それはハワイのある新聞が報じた次の記事である。「これまでハワイの陸軍関係博物館に展示されていた日本海軍の特攻兵器回天が老朽化したので廃棄処分にされる」というものでハワイの日本人からの通報であった。

これを知ったわれわれは動き出し、靖國神社宮司松平永芳氏とも相談し、何とか日本で手に入れ、靖國神社に永久保存できればと願った。そして結局アメリカ陸軍省の厚意で、永久貸与という形で靖國神社に手渡されることになった。こうして見る影もなく老朽化していた回天が太平洋をわたり日本に帰ってきた。

この頃、戦争中回天搭乗員だったかつての若人らは一丸となって「回天会

なるものを全国的に組織し、次第に強固になりつつあった。そして長野県で鉄工所を経営するかつての搭乗員が率先して回天の復元を買って出てくれ、やがて見事に復元し、靖國神社、遺品館の前にその威容をあらわした。しかしその後数年、春夏秋冬、昼夜の気温の変化や、雨、雪、風により、急速に老朽化しつつあった。

回天会の有志はこれを憂え靖國神社と相談し、館内に安置され、永久保存ができるようになった。館内を訪れる幾万、幾千万の人々に無言で語り続ける回天は正に日本の至宝であろう。



大津島・回天碑



靖國神社遊就館内展示の「回天一型改一」



大津島・回天記念館

特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の戦後の歩み

副会長 菅原 道熙

その五 陸海軍もう一体宛の特攻平和観音像

昭和29年7月に、特攻平和観音像が世田谷山観音寺に奉安され、更に特攻観音堂を別途建立することも決まっ
て、顕彰会の初期目標が達成される目途がついた。そこで次の目標として、陸海軍もう一体宛の観音像を、それぞれ縁りの深い場所に奉安しようということになった。

陸軍の一体は、知覧町（現在、南九州市知覧町）編纂の郷土誌によると、昭和30年9月28日14時に、飯野町長が奉持した観音像は、知覧飛行場跡地に到着した。そこは、鳥浜トメさんが戦後直ぐに木柱を立てて慰霊を続けてきた場所、この日のために小さな祠が用意されていた。

鳥野弘弁導師によって、奉安・開眼の法要が執り行われて、今日、年間70万人に及ぶ参詣者を集める知覧特攻平和観音堂の幕開けとなった。

知覧に観音像奉安を引き受ける意向の打診は、沖繩作戦当時第六航空軍司令官であった、世話人代表の一人であ

る菅原道大↓鳥浜トメの繋がりで行われた。トメさんは何度か世田谷山観音寺を訪れて実情を把握し、町長以下を説得した結果、町は受入れを決めた。観音像受領の時にトメさんは、娘の礼子さんを同道した。関口真大和尚によって開眼された、軽くはない観音像は、知覧までトメさん母娘によって運ばれた。

慰霊祭は、夏祭りとして7月28日に行われていたが、昭和49年5月3日、遺族の要望によって建立された、特攻勇士の像「とこしえに」の除幕式が行われた時に、観音堂には拝殿が増設され、参道その他の周辺環境も整備された。以後、慰霊祭は5月3日に変更されて現在に至っている。更に観音堂は、町有林の松と杉を使って全面改築されて、第50回慰霊祭（平成17年）以来現在の立派なお堂になっている。

併設されている特攻平和会館が、観音堂と共に、特攻の史実の伝承に果たしている役割は極めて大きい。

筆者は平成15年の初めに協会事務局に入って、観音崎に奉安されたと言われていた観音像が、所在不明であることを知った。そのことを当時住職であった太田賢照和尚に尋ねたところ、地元の合意が得られず、近江一郎氏の

遺志は実現しなかったこと、観音像は芝・増上寺の塔頭である安蓮社に預けられた、と誰かから聞いたことがあるが、確かなことは知らない、ということであった。

因みに、近江一郎氏は貿易商として身を立、戦後、及川大将の志に感銘して顕彰会の設立に多大の貢献をされ、二体目の観音像の完成を見ずして急逝された人物である。

虎ノ門地区再開発で、事務所は移転を余儀なくされ、平成20年春、現在地に移転したが、たまたまそこは、芝・増上寺に近い場所であった。

早速、増上寺本山事務所を訪れたが、そのようなことは今までに見聞したことはなく、全く判らないとの返答を得た。更に現在、安蓮社は増上寺境内の外になっ、本山との関係も薄いように思われたので、直接安蓮社を訪れた。来意を告げると、本堂に案内された。そこには、正しく神風特攻戦没者各霊の位牌に並んで特攻平和観音像が奉安されていた。

昭和30年に初めて神風忌（第10回）に出席した当協会の岩下邦雄元副会長によると、その時に既に観音像は、神風特別攻撃隊員の位牌に並んで本堂に奉安されていたという。

神風忌は、昭和21年10月25日に海軍の第一及び第二航空艦隊司令部関係者有志により、GHGの監視の目を潜って秘かに始められたものであるが（会報『特攻』第80号37頁）、その軀がなくなつた後も、関係者は、神風忌のことを公言しなかつたので、旧海軍航空関係者さえも、殆どはその存在を知らなかつたようである。

慰霊はあくまでも神風特攻戦没者に絞って、奉賛会が水中・水上特攻戦没者も包含したことは、はっきり一線を画して終始した。

思うに、海軍も、陸軍とほぼ同時期に観音崎の土地所有者との話し合いに入り、実現の見込みなしと判断された段階で、直ちに安蓮社に奉安を請願したのではなかるうか。

その六 特攻隊慰霊顕彰会から財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会へ

一時宙に浮いた観音像の奉安先が前章冒頭に記したように決着し、及川、河辺両大將は、特攻隊戦没者の慰霊供養が未永く懇ろに続けられていくためには、何らかの形で慰霊団体を結成することが必要であるとして、特攻平和観音奉賛会を立ち上げることにした。

奉賛会設立代表世話人として、両大將以下6名を選定し、特攻観音堂落慶法要時に、参詣者にその旨報告し、以後毎月18日を月例法要日として、代表世話人を中心に関係者が観音堂に集まって、法要後に会の運営について協議を重ね、昭和34年5月18日には、広く遺族、戦友、有志に呼び掛けて、奉賛会を全国的組織にすることが決められた。

奉賛会は、会則は作らず、会長以下の役職も設けず、会の運営は奉仕者の協力によって行うことを基本方針とした。年を経て代表世話人及び同世代の会員は、逐次その数を減じ、昭和40年代後半には、代表世話人は、菅原元陸軍第六航空軍司令官のみとなった。それまで続けられてきた奉仕活動が、必ずしも円滑に行われるとは限らない状態に陥りつつあった。

昭和50年代に入って、菅原代表世話人から、このままでは奉賛会は自然解散せざるを得ないという意見が出されるに至った。これを聞いて、明治30年代から大正一桁年代生まれまでの第二世代と称されるべき会員有志が立ち上がり、会の再編成に乗り出したのは、昭和53年初め頃のことであった。

再編運動の中心になったのは、陸軍

では、秋山紋次郎(陸士37期)、丸田文雄(陸士44期)、最上貞雄(陸士54期)、海軍では、寺崎隆治(海兵50期)鈴木僚五郎(海兵68期)の諸先輩であった。世話人会は、第1回が昭和55年9月、第2回が昭和56年6月に開催され、同年9月には竹田恒徳元宮殿下を会長に推戴することが決まった。会則、人事等も決められて、昭和57年6月、特攻隊慰霊顕彰会が発足した。

組織再編の動きと相前後して、会員の間からは、靖國神社で慰霊祭を実施すべきである、との意見が強く出て、昭和54年の春に、初めて陸海軍合同慰霊祭が挙行された。これを機に、毎年5月5日に行われていた年次法要は、秋分の日で開催と変更された。

特攻隊慰霊顕彰会の発足に当たって、奉賛会と顕彰会とは二身一体であることが確認された。詳しくは、会報4号(3頁)に掲載されている秋山紋次郎副会長の報告を参照されたい。

会報第1号はタブロイド判1枚で、昭和58年の年次法要終了後に発刊され、2号から現在の形になった。次第にページ数、発行回数が増えて、平成7年2月発行の22号から年4回の発行

となった。

竹田会長が平成4年5月11日に亡くなられて、瀬島龍三氏(当時伊藤忠商事顧問、陸士44期)が後を継いだ。就任に当たって、財団法人化を強く主張し、平成5年11月18日に当時の厚生省の認可を得た。

会の名称はそのまま財団法人化を申請したところ、厚生省は、既に昭和40年代の初めに財団法人太平洋戦争戦没者慰霊協会(会長瀬島龍三氏)が設立されているので、紛らわしい名称は好ましくない。また、平和祈念を強調して、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会としないと認可しないという強い対応を示したので、会員の間では極めて評判が悪かったのであるが、やむなく了承した。

聞くところによると、当時の世情から厚生省は、慰霊と顕彰という語句を続けることは、禁句とされていたようである。

平成6年は、靖國神社での合同慰霊祭は行わず、3月28日に千鳥ヶ淵戦没者墓苑で追悼式が行われた。当日は、三笠宮崇仁親王殿下の台臨を仰いで午前11時に開式した。

何故そのようなことになったのか、

会員の間からは強い抗議の声が上がったが、無宗教方式によらざるを得ない事情があった。そのことについて、財団法人化(会報18号)と千鳥ヶ淵墓苑での開催理由(会報19号)に関する、当時の最上理事長報告の全文を後ろに掲載するので、当時の状況についてのご理解を賜りたい。

以上、戦後の特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の歩みについて概説しました。

近年になって、資源の枯渇、環境の破壊、経済的閉塞感等、新たな要因が加わって、これからの世界情勢は益々複雑混沌の度を深めて行くものと思われまます。この厳しい情勢下を、我が国民が、国家と民族の誇り、その矜持を失わず、独立国家、民族として生き抜いて行くためには、古来培われてきた日本人の心を堅持することが、絶対に必要であります。

しかるに、最近の我が国では、特に政界において主導的立場にある少なからざる人々の言動からは、根源的に具すべきその心を喪失してしまつたのではないかと疑わざるを得ない雰囲気

が汲み取れます。誠に残念なことではありますが、戦後の占領軍による日本人の骨抜き政策が相当の成果を上げていると認めざるを

得ません。

明治維新は、若い草莽の士によって成し遂げられました。

戦争に生き残った年代の者は、必死になって祖国の復興に身を挺して、世界中が目を見張る経済復興を果たしました。反面、経済至上主義を瀰漫させ、今日見られるような情けない社会の風潮を招来したことに對しては、全戦没者の御霊に大変申し訳なく思っております。何とお詫びしてよいのか、言葉もありません。

この狂瀾を既倒に廻らすことは、志の高い、若い世代の皆さんの双肩にかかっています。

空に、海に、陸に、敢然と身を挺して散華された、特攻隊戦没者の御霊の御照覧を願いつつ筆を擱きます。

本堂に安置されている観音像と位牌



安蓮社入口

正面は本堂の扉、左側入った所、直角の位置に玄関（寺務所）がある。
〒105-0011 東京都港区芝公園3-1-13 TEL.03-431-5930 FAX.03-436-5378



歩道に面して門標が在る。

追悼式を何故千鳥ヶ淵墓苑で

当協会理事長 最上貞雄

財団設立を記念して去る3月28日、全国特攻隊戦没者追悼式を千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて執り行いました。

これら戦死者に対する慰霊行事は英霊が再会を誓い、今神鎮まります靖国の社頭にて行うべきが当然であります。特攻隊の慰霊祭も20年来靖國神社で執り行なって参りました。

然し今回は財団設立を記念しての追悼式です。高松宮妃殿下、三笠宮崇仁親王殿下のご台臨を仰ぎ、内閣総理大臣、関係各大臣、中曽根、竹下前総理を始め国会議員、各都道府県知事等多数の来賓をお招きし、特に国防の重責を担う自衛隊の方々にも是非参拝をして頂きたい。又NHKを始め各報道機関にも協力をお願いしました。

真に残念で憤慨に耐えないところでありますが、現状は靖國神社では出来ませ

(註) 高松宮妃殿下はお風邪のため欠席された。



安蓮社ビル（正面）

1階柱の右がお寺入口、その右側に墓地が残されている。1階はお寺が占めている。

財団法人特攻隊戦没者慰霊

平和祈念協会認可される

理事長 最上 貞雄

前会長竹田元宮様が平成4年5月11日薨去遊ばされ、新会長に瀬島龍三様をお迎えいたしました。新会長は前会長のご意志をつぎ特攻隊の慰霊顕彰事業は更に広く国民の皆様にご認識を頂き、且つ若くして国に殉じられた特攻隊員の史実を正しく後世に伝えてゆくことが極めて大事であるとの主旨より、公益法人にするよう話があり、数回の理事会を開催しこの議を審議し、厚生省と再参接渉、漸くこの11月18日付をもって財団法人が認可されました。

新財団の名称は「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」(通稱 特攻隊慰霊財団)となりました。

一、設立に当って厚生省の方針

- 1 同一のカテゴリーの財団は認可しない。
太平洋戦争戦没者慰霊協会が既に認可されているので、「特攻隊慰霊顕彰会」の名称では認可するわけにはいかない。そこで切口を変えて、平和祈念協会の名称を挿入するよう当局の要望があり、前記の名称とせざるを得ませんでした。
- 2 基本財産は原則として5億円以上。
この点も交渉の難関であった。

両者歩みより、やっと3億円の線です承、然

収 支 計 算 書

自平成5年1月1日 至平成5年10月31日

(単位：円)

収 支 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
年 会 費	7,495,000	年 会 費	149,000
慰 霊 祭	3,648,500	慰 霊 祭	2,622,038
寄 附 金	131,314,488	寄 附 金	675,445
(内基本財産)	100,000,000)		
出 版 事 業	2,571,380	出 版 事 業	2,768,067
理 事 会 費	118,000	理 事 会 費	545,898
受 取 利 息	508,270	他 事 業 費	1,049,894
		管 理 費	3,520,960
収 入 合 計	145,655,638	支 出 合 計	11,331,302
収 支 差 額			134,324,336
財団へ繰入れ額			134,324,336

も特例中の特例として当面1億円で設立を認可するが、5年以内に3億円まで増額することと云う条件で認可されました。

瀬島会長のご尽力で、有力な財界人大久保隆様が個人として1億円を寄附して下さい、やっと設立することが出来ました。

今後又皆様の絶大なご協力をお願い申し上げます。

二、財政状況

平成五年度の収支は10月31日現在別表(1)の通りで、ご寄附いただいた額は、1億3千万円を越えました。当面その中の1億円を基本財産と致しました。

別表(1)

註 支出のうち年会費及び寄附金は前年度収入の訂正分です。

三、役員、評議員、参与

寄附行為により、理事10名以内、監事2名、評議員20名以内とされました。役員名簿は別表(2)の通りです。

常任理事であった方に評議員をお願いしました。其の他の理事の方には参与として今後も今迄同様ご協力の程をお願い申し上げます。

以上設立に至るまでの概要をご報告申し、設立に多大のご協力を戴きました皆様にご心より感謝申し上げます。

別表(2)

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

役員名簿

役職名	氏 名	職 業
名誉会長	寺崎 隆治	元連合艦隊参謀
会 長	瀬島 龍三	伊藤忠商事(株)特別顧問
副会長	田中 耕一	元航空自衛隊航空幕僚副長
同	内田 一臣	元海上自衛隊海上幕僚長
同	山本 卓真	富士通(株)会長
同	石野 清治	(株)資生堂会長
名譽理事	大久保 隆	(株)大久保社主
理 事 長	最上 貞雄	特攻隊慰霊顕彰会理事長
理 事	飯田佐次郎	元三幸工業(株)取締役営業部長
同	山田 達雄	元日本通運(株)課長
監 事	岡田 輝彦	公認会計士
同	小松 利光	元航空自衛隊中部航空方面隊司令官

第42回豫科練戦没者慰霊祭

評議員 小倉 利之

平成21年10月3日(土)、財団法人「海

原会」(藤野雅之会長)主催による第42回豫科練戦没者慰霊祭が、陸上自衛隊武器学校内の雄翔園「豫科練二人像」前に、大勢の御遺族、御来賓、同窓生各位が参集し、戦没者1万8564柱の英霊をお迎えして、厳粛かつ盛大に挙行されました。

当日は朝のうち、ところどころに青空も見えていましたので、野外で実施することに決定されました。ところが、秋雨前線の影響で、間もなく雨雲が全天を覆い、「日の丸飛行隊」の慰霊飛行の実施も危ぶまれるような天気でしたが、早めに実施ということで、何とか無事に慰霊飛行だけは実施されました。やがて式典が始まり、国旗掲揚が始まる頃になると、雨が降り始め、暫くすると本降りになり、陸自隊員から傘やコートの支援を受けることになりました。しかし、参会者一同雨に怯むことなく、式典は肅々と実施されました。そして、雨は一段と激しくなり、雷鳴まで轟きました。

今回の式典には、今までとは違い、陸、海、空自衛隊が揃って参加して

れ、中でも初めて白い制服の海上自衛隊が参列してくれたことを天上の英霊が喜び、嬉し涙を流している、その雨だろうと話し合っている声が聞こえてきました。

式典は、海原会実行委員の周到な準備の下に、陸上自衛隊の親身で絶大な支援を受けて実施され、雨の中でも厳粛に執り行われました。

また、直会は、散華された英霊の皆様が、御遺族、同窓生各位と一体となり、和やかに過ごしているかのような様子に見え、穏やかに過ぎて行きました。

慰霊祭式次第

- 参列者着席
- 慰霊飛行
- 式典開始
- 開会の辞
- 国旗掲揚(国歌吹奏)
- 献 火
- 高松宮妃殿下御歌奉詠
- 阿見詩吟会
- 師範
- 佐藤昌司
- 式 辞
- 海原会会長
- 藤野雅之
- 献 花
- 来賓・遺族・各会代表
- 来賓挨拶
- 阿見町 町長
- 川田弘二
- 遺族の言葉
- 遺族代表
- 武士 保
- 若鷺の歌奉唱
- 参列者全員

- 奉納行事
- 演奏
- 陸上自衛隊
- 雄翔館参観
- 閉式の辞
- 実行委員長
- 勝田施設学校音楽隊
- 海原会副会長
- 阿保文敏
- 式典終了
- 直 会
- 司会
- 事務局長
- 羽田俊一
- 謝 辞
- 海原会会長
- 藤野雅之
- 来賓挨拶
- 武器学校校長
- 新村暢宏
- 乾 杯
- 阿見町
- 町議会議長
- 諏訪原実
- 会 食
- アトラクション
- 吹奏楽演奏
- 勝田施設学校音楽隊
- 舞踊『若鷺の歌』
- 地元婦人会有志
- 常陸陣太鼓
- 武器学校隊員有志
- フラメンコ
- 阿見町フラメンコ同好会
- 軍歌メロデー
- 歌手
- 田中シヨリ
- 閉会の挨拶
- 事務局長
- 羽田俊一

道府県内で実施するのが慣例となっており、土浦で実施される慰霊祭には、今まで海上自衛隊は参加していませんでした。しかし、豫科練は海軍であり、その慰霊祭に海上自衛隊が参加することとは、大切なことであるとの判断から、この度、千葉県の海上自衛隊下総航空基地の幹部搭乗員6名が参加することになったのであります。

参加した幹部搭乗員は、海上自衛隊航空学生出身者でした。航空学生は、甲種豫科練の制度を参考にしてつくられたもので、この式典に初めて参加した搭乗員は、感激しておりました。また、御遺族、来賓、豫科練出身者も、白服の礼装に感激しておりました。

この慰霊祭は、いつまでも続ける必要がありますが、年代が変わろうとも、若い人々に申し伝えて継続することが必要です。来年以降も是非参加していただきたいものです。

川田弘二阿見町長の来賓挨拶の中に『豫科練記念館』の話がありました。「豫科練出身者は、前途洋々たる若者が、旺盛な殉国の精神のもと、厳しい訓練を経て祖国防衛の任務に就き散華されました。皆様の御霊をお守りすると同時に、この精神を後世に伝えるため、雄翔園の近くに『阿見町豫科練記念館』を建立しました。来年2月開

館の予定であります」とのこと、非常に喜ばしいことです。

新しい記念館には、豫科練の成り立ち、教育・訓練・飛行練習等から卒業生の活躍を中心に、阿見町との関わり合いなどを展示することであり、完成されれば、是非訪問したいと思っております。

最後に「豫科練之碑」の碑文を紹介して本稿を終わりたいと思います。

「昭和12年8月14日、中国本土に孤立する我が居留民団を救助するため暗夜の荒天を衝いて敢行した渡洋爆撃にその初陣を飾って以来、豫科練を巣立った若人たちは幾多の偉勲を重ね、太平洋戦争においては名実ともに我が航空戦力の中核となり、陸上基地から或いは航空母艦から或いは潜水艦から飛び立ち相携えて無敵の空威を發揮したが、戦局利あらず敵の我が本土に迫るや、全員特別攻撃隊となって1機1艦必殺の体当たりを執行し、名をも命をも惜しまず何のためらいも無くただ救国の一念に献身し未曾有の国難に殉じて実に卒業生の八割が散華したのである。創設以来終戦まで豫科練の歴史は僅か十五年に過ぎないが、祖国の繁栄と同胞の安泰を願う幾万の少年たちが全国から志願し選ばれてここに学びよく鉄石の訓練に耐え祖国の将来に一

片の疑心をも抱かず桜花よりも更に潔く美しく散って、無限の未来を秘めた生涯を祖国防衛のために捧げてくれたという崇高な事実を銘記し、英魂の万古に安らかならんことを祈ってここに
豫科練の碑を建つ
この碑文を読む人々全てが、世界の平和と日本の平和を希求する戦没者の存在を知り、改めて認識し、慰霊を未来に受け継いでいくことを心から願う

土浦海軍航空隊 予科練之碑



ものであります。

来年もこの時期に再度集い、立派な慰霊祭を続けていきたいと思えます。

所在地 茨城県稲敷郡阿見町
陸上自衛隊武器学校内
間合せ先 東京都品川区大井六
一六―一二
大森コープピアネス

向って左は高松宮妃殿下御歌の碑

電 〇三三七六八・三三五一
財海原会

建立 昭和41年 5月27日

大阪護國神社

「特攻勇士之像」奉納除幕式
に参列して

理事長 藤田 幸生

平成21年10月24日(土) 11時より、大阪市住之江区南加賀屋の大阪護國神社において、「特攻勇士之像」の奉納除幕式が執り行われた。

主催者である「特攻勇士の像を奉納する会」代表・近畿偕行会野上五夫会長からの御招待を受けて、理事長の私が特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会を代表して参列した。

「特攻勇士之像」の奉納は、この大阪護國神社が8体目である。特別のこ

① 大阪は、この全国事業の発起の地であり、その大阪芸術大学の工藤事務局長他関係者が初めて式典に参加できたこと、

② 旧陸海軍の関連諸団体、現役陸海空自衛隊とその支援団体、日本会議等の民間団体の幅広い協力支援が得られたこと、

③ 今後の活動態勢が確立され、引き継がれたこと、
である。今後原則として、毎年10月の

第4土曜日に、陸海軍関係者合同で例祭を行うこととされた。

本建立に関する諸活動は、野上会長の熱誠により、事前、事後の計画、実行の全てにわたって所期の目的を理想的な形で実現達成できたものと思う。心から感謝申し上げたい。

当日は、穏やかな曇り空で、除幕式は、盛大、かつ厳かに執り行われた。あらゆる面で行き届いた素晴らしい式典、行事であった。

私は、前日に大阪に入り、夜はこの全国事業を発起された「日本人の心を伝える会」代表の富田和夫氏を始め、大阪芸術大学の池田実教授他の皆さんと念願の面談を果たすことができた。

式典当日は早めに行動し、護國神社に先ず一人で静かに参拝した。隣接して広い公園がある立派なお社であった。地下鉄出口に近い鳥居を潜ると、両側に陸海軍の慰霊碑が沢山建立され、奉納されていた。更に奥に進むと、御本殿に直近の、向かって右側の位置に、勇士の像の除幕式の準備が整えられていた。

定刻11時から本殿において、竣工報告祭が、続いて11時40分から碑前において、除幕式が行われた。

除幕式は、周辺の陸、海、空自衛隊部隊機関の代表、陸上自衛隊中部方面

音楽隊の参加支援を得て、御遺族始め総勢百人を超える多数の御来賓、関係者、及び地元の方々が参列して行われた。新聞社等の取材もあった。

開式の辞に続いて国歌斉唱、黙祷、除幕、碑文朗読、献花、慰霊鎮魂の演奏、会長式辞、戦友による追悼の辞、祝電披露と順次進められ、滞りなく閉式となった。

次いで13時から、本殿の左側奥にある儀式殿の広間において、直会が催された。開会の辞に続いて、野上会長挨拶、柳澤宮司挨拶、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会藤田理事長挨拶、関西水行会副会長の音頭で乾杯の後、懇親に入った。それぞれのグループで、また相互に交流して様々な話題が提供されて盛会であった。

一同、来年の再会を誓い合い、名残を惜しみつつ14時30分閉会となった。なお、本勇士の像建立奉納の経緯等は、野上会長の式辞等に全てが語られているので、それをご紹介します。

式 辞

菊花薫るここ大阪護國神社の神域に、只今除幕式によって凛々しい姿を現された特攻勇士の像の御前で、御遺族及び御来賓ご臨席のもと、「特攻勇士の像を奉納する会」を代表し、大阪

府御出身の五百十三柱の御霊に、謹んで慰霊の詞を捧げます。

思い起こしますと、過ぐる大東亜戦争は、緒戦の勝戦も米軍の圧倒的な物量の前に次第に制海権・制空権を失い、将兵の勇戦奮闘も空しく、戦局は悪化の一途を辿っておりましたが、そのさ中の昭和十九年十月、軍が起死回生の非常戦法として、航空機および船舶をもつて敵艦に体当たりする特攻攻撃を開始するや、多くの若者が愛する祖国と家族を守るため一命を投げ打って敢然と敵艦に襲い掛かり、多数の敵艦を撃沈・撃破する戦果と引き換えに、遥かな南冥の空と海に壮絶な戦死を遂げられました。

その洋々たる前途も、肉親への愛も断ち切つての、まさに鬼神をも泣かす神聖な姿に、私共は唯ただ止め得ぬ涙を以って感謝するのみでございます。

爾来六十年を経て、特攻慰霊について画期的な動きが起りました。即ち平成十七年地元大阪芸術大学の先生と若い学生達が、特攻隊に象徴される「日本人の心」を永久に伝えたいと、特攻の唄のCDの売り上げで、全国の護國神社に特攻勇士の像を順次建立するとなり、壮大な計画を開始したのが発端となり、次いでその事業を財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が引き継

いで推進され、更に大阪では大阪護国神社宮澤宮司の特攻像受け入れのご英断があり、そして実に二百七十を超え「特攻勇士の像を奉納する会」の個人および団体会員の皆様の熱心なご支援とが見事に結集されて遂に建立を実現し、ここに私共はこれを特攻戦士の御霊にお捧げすることが出来たのでございます。どうか御霊に於かれましては、是非この懐かしい故郷の護国神社の杜に、お安らぎ下さい。

私共はこの像に刻まれた碑文のように、ここ大阪護国神社に詣でられた方々が、この特攻勇士の像を目の当たりにされるとき、必ずや日本人の心を呼び起こされ、そして今日の平和と繁栄はその崇高な死の上にあることを深く悟られることを信じ、今後は「特攻勇士顕彰会」の名のもとに、引き続き毎年慰霊顕彰に力を尽くす所存でございます。皆様の変わらぬご支援をお願い申し上げます。

終わりになりましたが、今回の奉納事業に多大なご尽力を賜りました皆様を中心に御礼を申し上げますとともに、像のご胎内に謹んで収めました霊簿記載の五百十三柱の御霊が天よりご覧あつて、これからの私共を導いて下さいますようお願いして、式辞といたします。

平成二十一年十月二十四日
六十五年前、比島で海軍特攻第一陣が突入した日の前日

特攻勇士の像を奉納する会代表
近畿偕行会会長 野上 五夫

合掌

なお、事後に協会宛に届けられたお便りの中で、野上会長は現在の心境を次のように述べておられる。それをご紹介して、この稿を終わることとする。

なお、事務局長小野寺正芳氏には、大変お世話になりました。有り難うございました。

(前略)

振り返ってみますと、貴協会から初めて大阪に特攻碑建立の要請を頂いたときは、全く自信はございませんでしたが、不思議な巡り合わせで、昔の特攻仲間から、かつて特攻隊長であった小生に「お前やれ」と指名されたことを感じ、どんなことがあっても達成する決意の下にスタートした次第で、まさに走りながら考えることの多い日々でございます。

幸い終始、貴協会のご指導ご支援を頂きましたし、また関西水行会始め多くの防衛支援団体と自衛隊の予想を上回るご協力を得ることができました

が、これもきつと陰ながら英霊の御加護があったものと信じております。

建立が終わった今、私共は建立は慰霊の終わりではなく、始まりであることを肝に銘じ、今後は建立体制から永久運営体制に切り替えて、国の未来が憂えられるほど地に落ちた道義の回復のため、日本人の心の伝承に力を注ぐこととしておりますので、引き続きご支援ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

(後略)

以上



平成21年度 フィリピン慰霊巡拝旅行に 参加して

評議員 石井 光政

昨平成21年10月24日(土)から26日(月)まで2泊3日の日程で、毎年、フィリピンで行われている恒例の特攻隊戦没者慰霊行事に杉山審副会長に同行して参加しましたので報告します。

フィリピンでは、昨年は台風の当たり年で、マニラでは台風被害による死者が約600人、避難民は約8万人という状況でした。私たちが成田を出発する2日前にも、台風20号がマニラに迫っていましたので、果たして行けるのか、行っても悪天候のため慰霊行事ができるのか、また、そのような時に特攻隊の慰霊行事を行ってフィリピンの人たちの反感を買わないのか等々心配しましたが、台風は直前でUターンし、現地時間の午後3時にマニラ空港に着く時には、太陽の光が降り注いでいました。英霊が私たちを待っていて下さったのだ、心を込めて慰霊をしなければと引き締めた次第です。

マニラ空港では、大使館から防衛駐在官の高橋秀雄1等空佐の出迎えを受

け、また、本慰霊祭に参加するため、関西空港から到着の多田野弘さん(戦時中、航空機整備員としてフィリピン等各地を転戦。89歳。株タダノの名譽顧問)、多田野さんの付添看護師の川崎恵子さん、そして特攻隊に関する調査研究をしている米国人のビル・ゴードンさん(Pratt & Whitneyのシニア公認会計士)と合流しました。

ツアーの始めはモンテルパ、ここはマニラの南方に位置し、戦後日本人捕虜収容所が設置され、17名が処刑された所ですが、今でも刑務所として使われていて、その一角に平和観音像、日本人記念墓地、平和記念塔等があり、杉山副会長以下全員で線香を手向けてご冥福をお祈りしました。

その後、次の日の慰霊行事が朝7時からと早いので、クラークの近くのホテルまで移動しましたが、まあ車の混んでいること、車線も交通ルールも無いような感じのスリル溢れる運転を味わいながら、途中有料道路も利用しましたが、ホテルに着いたのは夜8時頃、本来なら2時間ほど行き着くところを4時間以上もかかりました。しかし、その間車窓からフィリピンの街を見ることができました。近代的なビルのご側にはトタン屋根の貧民窟と思われる民家が密集し、路上では物売りが車

に近寄り、水や食べ物を買っていて、貧富の格差の大きさを見た思いでした。2日目(25日)は、いよいよ法要の日、ホテルを朝6時40分に出て、平和祈念観音のあるクラークフィールド・リリーヒルに向かい、マバラカット町の観光局長ガイ・ベルヒロ氏の出迎えを受けました。

午前7時25分、65年前に神風特攻隊敷島隊の関行男大尉以下が飛び立った時刻に合わせて慰霊祭が開始されました。フィリピン空軍軍楽隊のフィリピン国歌及び君が代の演奏に続き、杉山副会長を含む参加者代表による献花が行われ、その後、真言宗の池口和尚による荘厳な読経の中、参加全員が焼香し、英霊の御霊に対し追悼の誠を捧げました。

式典では、マバラカット町の町長も式辞を述べ、また、多くの地元住民も参加し、翌日の現地日本語新聞には約200名が参列したと一面に写真入りで報道されました。

式典・法要は約2時間で終わり、その後実際に特攻隊が飛び立った西飛行場跡と東飛行場跡を訪問しました。両飛行場跡とも道路標識も「Kamikaze West Airfield」「Kamikaze East Airfield」と表示され、敷地内もしっかり整備されていて感心すると共に、

現地の人々に感謝しました。

次に、大西神社を訪問しましたが、ここは朱色の鳥居をくぐり、山道を若干登った所に大西中將の碑が建っており、「OHNISHI SHRINE」の看板も立っており、その近くには通信部隊が使用していたという洞窟があり、入口には人が住んでいるのか、何故かベッドやテーブルが置かれており、そこを管理している人の話によると、洞窟が他にも幾つかあって、宝探しをしているとのことでした。

大西神社の近くに、歴史資料館が新しく出来たというので、行ってみるとにしましたが、新しいと言っても、トタン屋根の古い建物でした。中にはフィリピン戦当時の日本軍や米軍等の写真と鉄兜や機銃等が展示されており、多田野さんは写真を見ながら「これはどういう人だ、ここに行ったことがある」などと当時を懐かしそうに振り返っておられました。また、途中の橋を通った時など「この川には米軍の機銃掃射を避けるために潜りました」などと貴重な体験談をお話ししていただきました。

次に、201空本部跡を壁越しに見学しました。ここは現在、人が住んでいるため中には入れませんが、「この建物が201空本部です」とい

う標識が壁に掛かっていました。

そして最後に、戦時中は特攻隊員と身近に接し、戦後は慰霊碑や西飛行場の記念碑等の建立に力を注いでいただき、今でも特攻隊についてご理解の深いダニエル・テイソンさん宅へ向かいました。テイソンさんと奥様が玄関先で出迎えてくださいましたが、テイソンさんは、足が不自由になってきたため、近年は慰霊祭に参加できず申し訳なく、残念であると話しておられました。家の中には「DIZON KAMIKAZE MUSEUM」があり、特攻隊の遺品や写真、零戦の模型、そして神風神社まで陳列されているのはびっくりしました。お話を伺いながら、テイソンさんの特攻隊員に対する並々ならぬ、温かい思いに胸が熱くなりました。

日本へ帰国する26日(月)には日本大使館に桂誠大使を表敬訪問し、フィリピンの国情、日本との関係及び日本への感情、中国等の周辺諸国との関係等について、貴重なお話を伺うことができました。

2泊3日の短い滞在でしたが、多くの特攻隊員が最期の地としたフィリピンを肌で感じ、慰霊を行うことができたと、そしてフィリピンの人たちが特攻隊員を崇高な使命に殉じた人たちとして尊敬し、好意を寄せてくれてい

ることを知り、今回の慰霊行事に参加できたことを感謝しております。

また、私たち現代に生きる日本人は、先の大戦で亡くなった方々の犠牲の上に今の平和な生活があるのだという思いをもつと強く持ち、感謝の心をもって先人の慰霊をすべきだとの思いを強くいたしました。

なお、テイソンさんの著書(当協会会報『特攻』第74号47頁に紹介)及びゴードンさんのウェブサイトは次のとおりですので、是非ご覧になってください。

○テイソンさんの著書

『フィリピン少年が見たカミカゼー幼い心に刻まれた優しい日本人たち』ダニエル・H・テイソン著



発行所 桜の花出版株式会社

〒206-0011

東京都多摩市関戸1-1-10

TEL 042-371-9715

定価1470円(税込み)



リリー・ヒルにおける慰霊平和祈念法要



慰霊平和祈念法要に参加の左より杉山副会長・多田野氏・山崎さん・筆者

○ビル・ゴードンさんのウェブサイト

イト

<http://w.gordon.wesleyan.edu/kami>

kaze/index.htm



マバラカット西飛行場跡の碑前で左より筆者・多田野氏・杉山副会長・ゴードン氏



テイソン氏宅にて左より筆者・杉山副会長・ゴードン氏・山崎さん・多田野氏・テイソン氏

川南護国神社例祭に奉る歌

田中 賢一

宮崎県児湯郡川南町の護国神社の例祭は、毎年11月23日に町を挙げて行われている。護国神社建立の経緯と祭典の模様については、この会報第78号(平成21年2月発行)に詳しく述べたが、特異なことだけ重ねて述べれば、

・町長が祭主となり、祭典の運営は町役場の職員が担当するが、国旗掲揚とラッパ吹奏は都城の自衛隊が行う。神楽奏上は、中学校の女生徒が行う。

・都城、えびの、国分の各自衛隊では、連隊長又は代理が、熊本第八師団司令部、福岡の西部方面総監部からも代表が、新田原の航空自衛隊からは団司令か代理が参列する。

・御祭神は、地元出身の英霊が六三四柱であるのに対し、この地に御縁のあった陸軍空挺部隊一万有余をお祀りしてある。そこで空挺同志会宮崎支部は全員が参加する。昔の戦友は殆どなく、皆自衛隊の空挺だった者である。

さて、私は、このお宮の前身である川南霊堂の建立に聊か関係があるので、今まで必ず参列していたが、歩行困難になってしまったので、次の一文を草して送ったところ、空挺同志会宮崎支

部長の玉置君が代読奏上してくれた。

○挺進部隊御祭神に捧ぐ

朝日に映ゆる日向灘
夕日は沈む 尾鈴山

天降り給ひし神々の
歩みし跡を慕いつつ

真白きバラの花模様

ああ神兵は 天下る

夏草繁げたる 唐瀬原

銃声ひびく 桃源境

大詔 拝す 南進の

歓声揚がり腕を撫す

となう 挺進殉国は

これぞ我が合言葉

マラッカ海峡雲晴て

赤道越える 大編隊

忽ち降すパレンバン

白人搾取の 大牙城

天覽 賜う 宇都宮

下総の空に五百余の

花は咲けども唯一つ

君が馬前に流れ散る

移る戦局よそに見て

雌伏練武の 二星霜

憾みは深し 小丸川

古き石ぶみ語るあり

レイテは伝う天王山

高千穂の名二千の士

大厦は既に 傾きて

一臂支うる術もなし

翼うしないし滑空隊

我遅れじと馳せ向う

憾みはつきず雲竜や

屍を曝すルソンの野

我が空挺の由来記の

棹尾を飾る 特攻隊

跡に続くを信ずると

遺して征きし義烈隊

茫茫遙か 六十年

ああ青雲に花負ひて

蒼空よりの声享けて

識して捧ぐ亡き友に

○地元出身の御祭神に捧ぐ

君逝きて茫茫たりや数十年

つどいおろがむ人庭にみつ

物ゆたか心まほろばのさと

かわらぬ心まほろばのさと

我らみな忘れぬおもひ川南

地縁ぞ深きもろ人のたま

逸 題

田中 賢一

国家百年の計を弁えざる政治家共よ。あるは党利党略私利私欲のみ。撒き餌もって民衆を釣り、政權を得たり。現下道義退廃著しきは一に教育に因る。国家百年の計とは即ち教育なり。

長岡藩は戊辰の役に敗れ藩士の窮状著しきとき、友藩より贈られし米百表を大参事小林虎三郎は売り払い、藩士の教育に当てたという。

教育の重要なこと、以て知るべし。数を増さんが為、日教組を傘下に収む、言語同断なり。

弊害は既に現れ始めたり。即ち道徳教育の教材破棄、十年毎教員免許更新制度の廃止などこれなり。

私利私欲全くなく明治維新を成し遂げし数多の志士を見習うべし。その精神は今次大戦末期の特攻隊員にあり。爪の垢煎じて飲ませ度きも烈士既になし。

靖國社頭に額突き、心を浄化すべし。



碑は語る特攻隊番外

碑は語る歴史

秋山好古顕彰碑建立

田中 賢一

「編注・習志野市大久保の商店街に昨平成21年5月17日、秋山好古大将の碑が建立されたことについては、当協会

会報『特攻』第80号（4頁）に掲載済みであるが、この度筆者から碑の建立に関連して、同地に在った騎兵旅団と秋山旅団長を始めとする同旅団の日露戦争における活躍その他の業績等を補完する玉稿が寄せられたので、一部重複する箇所もあるが、掲載させていただいた。」

◇ ◇ ◇

国史学の泰斗平泉澄先生の言「歴史は、歴史を敬愛する人に属し、その門を開き、その手を執る。之に反して、無視し軽視するものに対しては、当然その面を蓋ひ、その袂を分つ 先人の情熱、意志、努力を尊敬し、その教訓を親愛し、その志業を継承せんとする者に対して、歴史は無限の喜と力とを与へる 若し一定の公式にあてはめ、物の支配する所として把握しようとするれば、先人に声無く、歴史は影を映さ

ぬであろう」（『父祖の足跡』序文）

◇

嘗て津田沼町（現在の習志野市）大久保には騎兵第一、第二旅団の兵営があった。京成電鉄大久保駅から兵営に通ずる道路には兵隊相手の商店が軒を連ねていた。戦後は兵営跡は日大や東邦大等の学舎に変わったので、商店街は学生相手に繁盛している。

司馬遼太郎原作『坂の上の雲』が昨年11月29日からNHKスペシャル番組として放映されているが、それに因んで町興しを図ろうと、習志野市商店連合会が、大久保商店街の中央薬師寺の門前に秋山好古の顕彰碑を建てた。建立の目的は町興しにあっても史実を世に広めることは結構なこと、冒頭に掲げた平泉先生の言にも適うことと思



秋山好古大将の碑

秋山好古は明治36年騎兵第一旅団長として、この地に着任し、翌年日露戦争で出征した。私が士官候補生として

隊付したのは、ここにあった騎兵第二旅団の第十六聯隊でこの地縁を生じ、本科卒業後は2年余り騎兵第一旅団の第十四聯隊に在って、支那事変に従軍したので、秋山旅団長の後裔というべきである。私の現住所は船橋市だが、習志野市大久保から遠くない。

平成21年5月17日の除幕式に際し、私に秋山將軍の像に敬礼してくれと主催者が言うので、同じく船橋市に在住の騎兵第十三聯隊にいた山本博史さんを誘った。この人は幹部候補生出身の将校で私より4歳年長だが、まだ達者である。私は習志野の自衛隊に出向き、当日ラッパ手を出してもらい、将官に



碑に対し挙手の礼をする老兵2名

対するラッパ「海行かば」の吹奏を依頼した。無帽で挙手の礼では格好がつかないので、自衛隊の帽子を借りることにした。

除幕直後、私共の敬礼と同時にラッパは商店街に鳴り響いた。私どもの後ろには県知事以下の高官や名士が並び、將軍の像（金属板に写真を焼き込んだもの）に目礼した。町内の人も含めて200名もいたろうか。

建碑と除幕行事のことはこれまでとし、秋山旅団長の日露戦争における事績について要約して述べる。

開戦時我が軍の騎兵は、近衛を入れて13個の各師団に3個中隊の騎兵聯隊があり、そのほか第一、第二の騎兵旅団があった。旅団は4個中隊と機関砲隊で、機関砲とは後の機関銃である。戦争中に4個師団増設されたので、師団騎兵はもう4個増えた。

これに対しロシアの騎兵は、師団騎兵は我と大差はないが、恐るべきは戦略騎兵たる騎兵師団や騎兵軍団である。騎兵師団は騎兵を主兵とした諸兵連合の部隊であり、騎兵軍団は2個騎兵師団と狙撃旅団より成るもので、戦争末期には6個騎兵師団と1個騎兵軍団を満洲に繰り出していた。

秋山旅団の主な戦闘は曲家店、黒溝台、大房身の三つであるが、優勢な敵

に対抗するため、第一旅団固有の兵力だけで戦闘したのではない。曲家店では歩兵2個中隊の配属に過ぎなかったが、黒溝台では第三、第五、第六、第八、第九、第十の各師団の騎兵主力及び歩兵1個聯隊等の配属を受け秋山支隊として戦闘し、大房身では騎兵第二旅団も指揮下に入れ、騎兵団を編成して戦っている。騎兵師団を持たない我が軍のやり繰りであるが、そこには秋山將軍の優れた統率力があり、我が軍の騎兵の最高指揮官と自他ともに認めていた。

秋山將軍は大佐時代に騎兵実施学校(後の騎兵学校)長だったが、騎兵の運用について卓越した見識を持っており、騎兵將校の戦術教育を特に重視した。そのことが全騎兵將校に浸透して、極めて優勢な敵騎兵を相手に一歩も引けを取らなかった一因となっていた。

○秋山好古と豊辺新作

明治34年以来、大久保にはこのように騎兵2個旅団4個聯隊が薨を並べていた。私が中少尉の頃所属した騎兵第十四聯隊の兵営は手前から二番目だったが、私の頃は蒙疆に在って作戦中だった。

「4個聯隊の兵営が並んでおり、手前から13、14、15、16の各聯隊、更に手前の三角の敷地は陸軍病院、旅団司令部は道を隔てた向い側の中央にあった。」



日露戦争には勿論この兵営から出征した。騎兵第一旅団長は秋山好古少將、そして第十四聯隊長は豊辺新作大佐だった。

豊辺新作は日清戦争少し前に騎兵第五大隊の中隊長となった。明治維新のとき朝敵だった長岡藩出身で、余り目立たない將校だったので、もうこのへんでクビだと噂され、自分もそう思っ

ていた。ところが日清戦争で大島旅団に属し仁川に上陸し、牙山付近で目覚ましい働きをして名を上げ、とうとう大佐にまでなつて明治34年には第十四聯隊の初代聯隊長になった。

日露戦争中この人が後世にまで名を残したのは、黒溝台会戦中の沈旦堡の戦闘である。

黒溝台会戦の概要

この会戦は日露戦争中露軍が攻勢に出た唯一の作戦である。沙河対陣の末期のこと、当時我が満洲軍は右から1A(2D、12D、GD) 4A(10D、5D) 2A(3D、6D、4D)を並べ、8Dを総予備隊とし、左の開放翼には秋山支隊を配置し、警戒させていた。

秋山支隊とは、騎兵第一旅団長秋山少將の指揮下に、騎兵第三、第五、第六、第八、第九、第十各聯隊の主力、歩兵第九聯隊の主力、後備歩兵第二聯隊の1個大隊、及び工兵第八大隊の主力より成る部隊で、40キロ正面を、点在する部落を拠点として陣地占領していた。

これに対し新たに編成されたグリッペンベルグ大將率いる露軍第二軍は、西比利亞第一軍団、欧露第八、第十軍団及び集成狙撃軍団、合計10個師団の

大軍だった。同大將はクロパトキンより年長で大將になったのは同時、新たに任用されクロパトキンの下に付くのは面白くなく、この一戦で自己の名声を博そうと考えた。これに対しクロパトキン総司令官は、直轄している正面の第一軍を動かさず、傍観していた。

秋山支隊長は最も重要と判断していた沈旦堡には、豊辺大佐を長とし、騎兵2個聯隊、歩兵3個中隊、騎砲6門、機関砲(機関銃)3門、即ち旅団の全部に歩兵3個中隊を加えたもので守備させていた。如何に沈旦堡を重視していたか、それと豊辺大佐を信頼していたかを窺い知ることができる。その他拠点には配属の師団騎兵を配置し、支隊長自らは右後方の李大屯を僅かな配属歩騎兵をもって固めた。全正面の右後方に位置したのは、総軍主力との連絡を考えたのであろう。

1月25日、敵の大軍は全正面に殺到して来た。各拠点に対する敵の軽重砲火の集中は物凄く、中でも沈旦堡に対する攻撃は熾烈を極めた。総軍では予備の第八師団にこの敵の撃攘を命じ、秋山支隊を第八師団に配属した。

明くれば26日朔風凜冽飛雪紛々たる中に敵の攻撃はいよいよ急であつて、各方面とも昨日に増す苦戦を重ねた。中でも沈旦堡にあつては朝来約一個師



豊辺新作（聯隊長時代）



秋山好古（旅団長時代）

団半の包囲攻撃を受け、戦闘惨烈を極め、夕刻には南部沈且堡を敵手に委ね、敵と土壁を隔てて戦うに至った。

敵の砲弾は部落内に集中し火災を起こしたが、豊辺大佐は3日持てばどうにかなると言って、動ずる気配はなかった。秋山支隊長は李大人屯の支隊本部から集中砲火を被っている沈且堡を望み、「豊辺は越後人じゃからあしより粘り強い」と豊辺大佐に絶大の信頼を寄せていたが、その状況は3日も続いた。その時は口に出さなかったが、

後になって「沈且堡にはもう一人の日本兵もいなくなる、と何度思ったかわからない」と当時の心境を吐露している。

27日も終日悪戦苦闘の連続だった。沈且堡は26日の夕刻、第三師団の歩兵第三十三聯隊の増援を得て危機を脱したものの、敵の砲撃は依然続き火災は収まらない。一旦敵手に委ねた黒溝台は我が第八師団が攻撃するも取り返すに至らない。

支隊本部のある李大人屯にも敵は至近距離に迫り、砲弾は支隊本部の支那家屋にも注がれた。そこへ総司令部から参謀の田村守衛騎兵少佐が駆け付けた。その時秋山支隊長は穢い支那家屋の中で唯一人胡坐をかき、水筒のブランドーをちびりちびり傾けながら、地図を眺めていた。

「閣下如何で御座いますか」と田村少佐が挨拶すると、「まあ見た通り無事だ」と答えるので、「これからどうなされますか」と田村少佐が尋ねると、「どうしようもないよ」と答えるだけだった。戦後秋山好古が言うのには、「あの田村が来た時は、本当にどうにもしようがなかった。いつ敵が突入してくるかも知れん。それで俺はピストルに弾を込めておいて、もしそうなたら一発ボンとやってらうつもり

じゃった」と。

総司令部では初めこのような敵兵力の来襲とは思わず、第八師団だけで対処出来ると判断していたが、1個師団で手に負える相手ではないことを知り、正面から第五、第三、第二の各師団を抽出して差し向け、第八師団長立見中将の指揮下に臨時立見軍を編成し、この敵に対処させた。

臨時立見軍の反撃は沈且堡を軸として展開され、28日も雪の中で彼我の死闘が繰り返され、中央拠点の小台子は逆に敵に奪取され、29日を迎えた。この朝は特に寒く零下20度、敵の砲撃は熾烈を極めたが、攻勢は漸く鈍り夕方から各方面とも敵が退却を開始した。ここにおいて形勢忽ち我に有利となり、黒溝台を奪回し、会戦の幕を閉じた。

黒溝台会戦は、日露戦争中最も危険な一戦であつて、これに破れば我が満洲軍全線が左翼から崩壊したのである。それを見事に阻止したのは、第八師団や臨時立見軍各隊の奮戦もさることながら、その攻勢の支塘となった秋山支隊、就中、沈且堡を死守した豊辺支隊の功績に帰さねばならぬ。

我が国では黒溝台会戦と呼ぶが、ロシアでは沈且堡会戦と言っている。彼らが如何に沈且堡を重視していたか、

これによつてもわかる。

晩年の豊辺新作

ある人が沈且堡を守り通した秘訣を尋ねたところ、「ただ苦しいのを我慢しただけです」と答えた。その人が「閣下は苦しいのを我慢なさつたでしょうが、部下をして辛抱させるには、どうしたらよいでしょうか」と重ねて尋ねると、新作は「平素苦楽を共にするのです」と答え、それ以上は何も話さなかったという。

大尉でクビだと言われた人が聯隊長にまでなり、またもや大手柄を立てた。凱旋後も手柄話は何もせず、問われれば言葉少なに答えるだけだった。

習志野原の一隅に陸軍墓地があり、現在は市営墓地の中に入っているが、沈且堡で戦死と刻まれた墓標が多い。習志野には騎兵4個聯隊があつたのに墓地があるのはこの聯隊だけである。凱旋後豊辺聯隊長が建てたという。

その後、騎兵実施学校長、騎兵旅団長、騎兵監を歴任し、中将にまでなった。騎兵監は親任官ではないが、この人だけは特旨により親補職待遇を受けた。

大正7年退役。昭和2年没。

陸軍挺進部隊銘々伝⑥

稲本 宏少佐

田中 賢一

昭和17年6月、第一挺進団は南方から内地に帰った。挺進第三聯隊は我々の留守中に出来ていて、唐瀬原降下場の東端の仮兵舎に収まっていた。その聯隊の本部付で稲本大尉がいた。その少し前に挺進練習部の降下課程を修了した人だった。陸士51期で私の1年先輩である。

団司令部は間もなく復員し、司令部の部員だった私は挺進練習部の本部で教育訓練担当の幕僚となった。聯隊は練習部の隷下部隊なので、第三聯隊の教育主任である稲本大尉とは業務上接する機会が多かった。しかし、いつ頃だったか忘れたが、彼は航空士官学校に転出し、縁は切れた。

昭和19年10月20日、敵がレイテに上陸し、同月24日に挺身第三聯隊に動員が下令された。第二挺進団の動員のはしりであった、聯隊や飛行戦隊は戦時編制で実在するが、挺進団司令部は挺進練習部で編成しなければならぬ。動員計画の戦時命課では、挺進団長は徳永大佐、私は部員となっていた。

第三聯隊は空母に搭乗して比島に向

かうという指示を大本営から受けたので、私はその晩の汽車で佐世保に行った。空母は隼鷹で明日入港することを知り、聯隊が到着したら一泊するため重砲兵聯隊と打合せを済ませた。私は翌6日、聯隊の空母搭乗を確認し、夜の汽車で川南に戻った。団司令部の動員は下令されていたが、まだ完結はしていない。徳永団長に復命すると、稲本が戻って来たから部員を譲れと言われる。

動員で人が不足すると中央で思ったのか、航空士官学校付だった稲本少佐が挺進練習部に配属になった。彼は到着するや、田中は第一回の出勤の時司令部の部員だったから今度は自分を入れてくれと、徳永団長に食い下がったということだった。私の就く職は編制表では少佐となっており、稲本は51期で既に少佐、私は1期下で大尉、そんなこともあって私は団司令部の出發を新田原飛行場で見送った。

因みに、この時の第二挺進団司令部の主な陣容は、

団長	大佐	徳永	賢治 (33期)
部員	少佐	弘中	郁夫 (47期)
〃	少佐	稲本	宏 (51期)
〃	大尉	尾畑	耕平 (54期)
副官	中尉	青山	順 (特志)
部付	中尉	金嶋	(特志)

団司令部は11月11日マニラに到着し、折しも隼鷹で入港した第三聯隊を掌握してアンフェレスに移った。そもそも比島方面の決戦はルソン島で行い、レイテでは持久戦と捷号作戦で決まっていたのに、台湾沖航空戦の誤報により急遽レイテで決戦を行うことになり、万事齟齬が多かった。

挺進団に与えられた任務は、ブラウエン地区に挺進し脊梁山脈越しに進出する第二十六師団と提携し、東部平野に地歩を獲得するにあったが、マニラではレイテの地上の状況は全く不明だった。挺進団は第四航空軍の指揮下になっていたが、何を聞いても判らない。第十四方面軍でもレイテに送り込む部隊や補給のことで頭が一杯なのか、挺進団として作戦計画に必要な情報は与えられない。そこで稲本少佐は自分がレイテに行き状況を確かめようと、団長に具申したという。

戦後弘中さんから聞いたところによれば、徳永団長は初めは許可しなかったが、上級司令部の無策に堪え切れず、稲本少佐の派遣を決めたという。彼のことだから飛行機を出してもらい、オルモック辺りに降下することを希望したであろうが、輸送船に便乗せざるを得なかった。それが何時なのか弘中さんの記憶はない。レイテへの海上輸送

は「多号」と名付け、第一次から第九次まであった。派遣が決まっていたから第五次以降となるが、半分近くが航空攻撃で撃沈されている。何時着いたか判らないが、挺進作戦に寄与したという記録や証言はない。

ブラウエン等に対する挺進作戦は、背後のイピルに敵一個師団が上陸したので中止となり、12月8日から挺進第四聯隊のオルモック増援作戦が始まる。降下場は我が勢力圏にあるパレンシアである。8日木下大尉以下90名が降下してオルモック北方で戦闘するが、その時は稲本少佐の姿はない。次いで10日には齊田聯隊長以下84名が降下したが、その時は稲本少佐が迎えに来ていた。

何時から三十五軍司令部に来ていたのか、そして何をしていたのか、その時は話もあつたろうが、記録に残っていない。ただ軍の渡辺参謀が戦後私に語ったところでは、軍参謀の一人として働いてくれたが、ブラウエン地区に降下した部隊のことは何時も気にしていたという。稲本少佐は単独で三十五軍司令部に来ていたので、固有の部下を持っていない。そこで齊田聯隊長の了解を得て何名かの下士官兵を手元に留め置いてもらった。増援のため最後に降下した大村大尉の重火器部隊が、

軍命令によってリモン峠の第一師団に配属と決まった時、その部下を大村大尉に与えてしまった。

ところで三十五軍は、イビルから北上した敵にオルモックは奪われ、その北方地区で齊田聯隊と今堀支隊(二十六師団の独歩十二聯隊)をもって懸命に防いでいた。ところが12月16日ファトンで遂に今堀支隊の陣地が突破され、その後方にあった軍司令部が急襲された。この時稲本少佐は司令部の兵を指揮して戦い、戦死してしまつた。これも戦後渡辺利亥参謀の語つたところだが、稲本少佐のお陰で軍司令官以下は辛うじて東方の山地に遁れることが出来た。

私はレイテ慰霊行の際稲本戦死の地と思う所に立ち寄って香華を供えた。



陸軍挺進部隊秘話

— 詠人不知の歌二首 —

田中 賢一

(第一話) 昭和19年初めのころだつたと記憶するが、当時陸軍挺進練習部の管内に独身宿舎があつて、川南にある挺進部隊の将校が入つていた。私は既に所帯を持って高鍋町に住んでいたが、時々独身宿舎に遊びに行き、冷酒を酌み交わしたりした。

ある日独身宿舎を訪問すると、入口の正面に次の歌が大きく墨書して掲げてあつた。

いつ征くかいつ散るのかは

知らねども

けふのつとめに我は励まん

私は感心して誰の作かと村長(先任者を村長と呼んだ)の立石中尉に聞いた。彼はちよつと間をおいて伊藤の歌です、と答えた。伊藤とは彼の同期生で、前年演習中小丸川を渡涉しようとして殉職した伊藤成一中尉のことである。伊藤中尉の遺詠ならば既に皆知つていゝはずなのに、立石の作だなど思つたがそれ以上は詮索しなかつた。

立石中尉は陸士54期、初期から教育隊の教官をしており、19年の秋滑空歩兵聯隊の山砲中隊長となり、12月に比

島に渡りクラーク地区で戦死した。その状況は詳らかでない。

この歌を後世に伝えるため「八勇士之碑」(詳細は別稿で述べる)の金属板の説明文の中に入れておいた。

(第二話) レイテ空挺作戦に参加した挺進第三聯隊は、発進飛行場(アンフェレスに隣接する南サンフェルナンドの精糖工場を宿舎にしていた。12月8日第一次降下部隊が出て行つた後、壁に次の歌が書き残されていた。

花負ひて空うち征かん雲染めん
屍悔いなく吾ら散るなり

第二次降下部隊に入つていた衛生兵

毛利義治はこの歌を手帳に記入した。第二次降下は取り止めとなり、毛利衛生兵はルソン島で戦い生き残り、帰還後この歌を私に告げた。毛利君は既に亡い。また、第一次降下部隊には一人

の生還者もなかつた。

川南護国神社の裏庭に「空挺落下傘部隊発祥之地」の碑を建てたときこの歌を土台に刻んだ。

表題と離れるが、昭和52年に三十三

回忌だといふことで、挺進部隊の戦友と遺族が、比島方面に慰霊巡拝に行つた。私は動員下令のとき第二挺進団司令部の部員に内定していたが、故あつて残された。そのことについては別稿で述べるが、慰霊巡拝団の一員となつてレイテとルソンを巡つた。ルソン島クラーク地区では南サンフェルナンドにも行つてみたが、毛利君の記憶も曖昧で、花負ひての歌に纏わる精糖工場など、見当も付かなかつた。あれから更に30年、日本人が建てた慰霊碑は方々にあつたが、今も保全されていゝのか。



落下傘の開発・製造・使用

田中 賢一

挺進練習部創設の頃

昭和15年12月浜松飛行学校練習部が
 発足したが、その頃あったのは97式操
 縦者用と92式同乗者用の2種だった。
 勿論これらは救命用の物だった。前者
 は座褥式で操縦者が尻に付け、操縦席
 に腰掛けると座布団代わりになる。後
 者は前掛式で機内作業をする時は装帯
 から外しておき、非常の場合装帯に着
 けるようになっていた。

開傘方式は両者共同で、自動策を
 機内の何処かに掛けて飛行機から飛び
 出し、自動策が全部伸びると傘体を包
 んでいた外囊の止め金が外れ、補助傘
 が飛び出す。補助傘はコウモリ状の骨
 があり、風をはらんで接続してある主
 傘の傘頂部から主傘を引き出す。自動
 策のほか手動策もあり、空中でこれを
 引いても同じようになる。

97式には傘頂部と傘縁部を繋ぐ制限
 策という赤い数本の紐がある。制限策
 は傘布の長さより若干短く、開傘を早
 める働きをする。低高度で事故が起き
 離脱してもすぐに開傘するのが目的で
 ある。92式には木環と称する直径30セ

ンチほどの木の環がある。木環にはゴ
 ム紐が巻き付けてあり、包装するとき
 傘縁をゴムの部分に挟んだまま包装す
 る。木環は開傘すると傘縁から離れて
 落ちるが、その目的は瓢形開傘等の異
 状開傘を防止するにある。降下場では
 木環拾いという作業があった。
 人体傘はどちらも絹製だった。



補助傘



97式操縦者用落下傘の制限策



92式同乗者用落下傘の木環

練習部では年が明けてから初めて降
 下をしたが、その時は97式を使った。
 練習部長の河島中佐も副隊長格の高橋
 大尉も操縦者だったので、この傘の方
 が親しみがあつた。勿論実降下までに
 はダミーを使い何十回も開傘試験を実
 施した後だった。

97式は尻に装着するので飛出しは容
 易だったが、筒井四郎や奥山道郎の重
 量級から着地衝撃が大き過ぎると異議
 が出た。この傘は救命用で命が助かれ
 ばよいという考えで設計されていたか
 らである。

注 筒井四郎51期、パレンバン作戦
 時挺進飛行戦隊第一中隊長、作戦
 終了後プノンペン飛行場離陸時失
 速墜落殉職。
 奥山道郎53期、後に義烈空挺隊

長。

そこで92式を使ってみた。この方が
 傘体が大きく着地衝撃は少ないので、
 爾後92式を使うことにした。

救命用落下傘使用時代

練習部の第一次練習員は浜松で教育
 し、三方原爆撃場に降下したが、飛行
 学校の訓練と重なり手狭になったので
 4月に満洲の白城子に移り白城子飛行
 学校練習部となった。ここで第二次練
 習員の教育中に初めて殉職者が出た。

92式は胸掛け式なのでこのような降

下姿勢がよいとされていた。



92式の模範的降下姿勢

当時落下傘以外の装備品の検討まで
 手が廻らず、軍の学校で使っている体
 操靴を履いていた。初宿(しやけ)軍
 曹は、傘頂部と補助傘を接続してある
 長さ50センチほどの紐が、体操靴の尾
 錠に絡み付き不開傘となった。

河島部長は早速上京し、予備傘のあ
 る落下傘の製作を促進することも、
 専用の靴や帽子等の製作も手配した。

落下傘については、下士官の第三次
 練習員までは92式を使い白城子で教育
 した。9月には宮崎県の新田原に移り
 航空総監直属の陸軍挺進練習部となっ
 たが、その時から落下傘部隊用の一式
 を使うようになった。

一式傘使用の時代

この傘は背中に主傘、胸に予備傘と二つの傘で一組となっていた。主傘には7米の自動策があり、その一端の茄子環を輸送機の繫止策（アンカーケーブル）に引っ掛けて、飛行機から飛び出す。自動策の端末は主傘の傘頂部に仮縛してあるので、主傘を傘頂部から引っ張り出し、連接帯まで出ると重みで仮縛部が切断するという仕組みになっていた。仮縛は規定の麻紐で行った。なお開傘を早め、のろし状になるのを防ぐため傘頂口の吊策をカタン糸で縛った。これは開傘すれば切れるほどの強度である。



予備傘は92式同乗者用落下傘の自動策を除いたものと殆ど同じだった。

白城子の末期から新田原移転直後にかけて降下靴や降下帽が行き渡った。靴は衝撃緩和のためスポンジが入っていたが、捻挫のものになると取り除いた。降下帽は自動策で頭部を擦るこ

とがあるので、頬当てが改良された。

一式傘は予備傘があるということでは安全性は高まったが、主傘の事故は絶えなかった。当時の降下姿勢は左の写真のようなものだった。



傘が連接帯まで背中から出終わるまでの姿勢を保持していれば問題ない。その時間は約3秒だったが、姿勢が崩れると自動策や傘が体に引っ掛かる。そうすると仮縛が過早に切断してしまう。しかし予備傘を手動で引けばよいのであるが、1個中隊が降下演習をやると2件位予備傘使用が出る。訓練の際は高度500米で行うので、時間的余裕はある。

パレンバンの作戦が終わり挺進団は内地に帰り、昭和17年7月22日宇都宮で天覧演習があった。所沢飛行場を発進したのであるが、雲低く高度400位だった。しかも連続降下していると終わりはもっと低くなる。当時司令部の部員だった私も参加したが、降下順序が末尾だったので在空中時間が短いような気がした。第一聯隊の松浦軍曹は傘体に身体を引っ掛け、主傘は開かず予備傘を引いたが、完全に開く前に地面に激突し殉職した。玉座の真ん前だった。

物料傘と物料箱

物料傘は新たに開発したのではなく、支那戦場で地上補給が間に合わない時、補給用に使われていた。既にあるものは30キロ用と50キロ用だった。材質は木綿で、木綿は空気の通りが良いため頂の排気口はなかった。開傘方

式は自動策繫止だった。物料箱も重爆の爆弾倉に懸吊できるものが既に出来ていた。ペークライト製の箱で一面は全開出来た。落下傘部隊が出来てから物料箱は一号から六号まで制定され、物料傘も用途によって70キロ用、100キロ用も出来たが、余り大きいものは爆弾倉の扉が閉まらないので、試作にとどまった。

一番多く使われたものは50キロ傘を着けた一号箱だった。中には軽機1丁と小銃10丁が入っており、1個分隊が武装出来た。

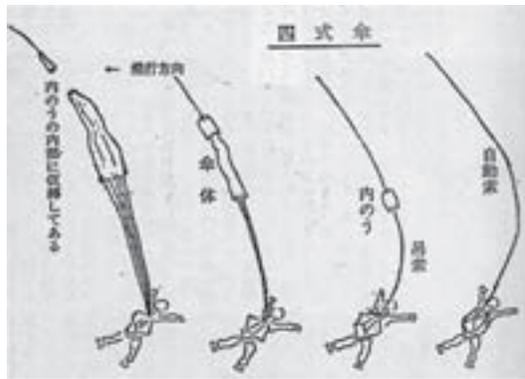


一式傘の改善策

この傘の欠陥は仮縛部の過早切断によるものだった。昭和18年の夏頃だったと記憶するが、当時私は陸軍挺進練習部の本部にあって教育訓練担当の幕僚だった。職務柄時々降下場に出て各隊の訓練を見ていた。たまたまその日は教育部の練習員の降下訓練実施中だった。ある練習員が傘体を体に絡ませ不開傘で落ちてきた。地上の助教がメガホンで予備傘予備傘と必死になつて怒鳴っている。降下者は予備傘で無事着地した。

ある確率でこのような事故は必ず起きると私は思った。傘頭部から引っ張り出そうとするからだ。畳んである傘から人体が連接帯の方から引き出せば、こんなことにはならないのにと考え、傍らにいた教官の木下礼寿中尉に話し掛けた。彼もかねてから何とかしなければと思っていた。私の考えに對し飛行機に畳んだ落下傘を固定しておく訳にもいかないしと、二人で考えた。そして一案を得た。飛行機に固定したある長さの紐で、背中から落下傘を包装したままもぎ取らせ、その中から連接帯、吊策、傘体の順に引っ張り出すという構造である。二人はこの案を持って研究部の出川航技少佐の所に行った。

ところが意外、そのような傘は既に技研で試作中で、近々実用試験の依頼が来るはずだという。気抜けしたような安心したような感じだった。木下君も出川さんも既に亡い。試作中のものは内囊式と呼んでいることもこの時知った。



内の上式開傘手順の絵

に渡した。レイトに降下した部隊は初めて四式傘を使うことになった。100%確実と思つた四式傘も、思わぬ事故が起きた。レイトに降下したある部隊の輸送機の繫止策（アンカーケーブル）が切れたという。それは内囊が背中から離れる以前に身体のごとくに引っ掛かり、自動策に強大な力が加わつたためと思われる。

そこで留守部隊である第一挺進団では、出川少佐を比島アンフェレスに差し向けた。出川少佐が帰つてから話したところによれば、アンカーケーブルは機体の取付け部分からもぎ取られていたので、茄子環は素通りしてしまつたらしい。強い力が加わつたのは自動策が身体のごとくに絡まつたためと思う。そこで自動策に結び目を沢山付けて短くして、少しでも空中姿勢が崩れるのを防止したという。またアンカーケーブルについては両端とももぎ取られることはないと思うので、両端に近い部分のワイヤーを少しほぐして鉄片を挿入し、茄子環が素通りしないようにしたという。いずれも戦場における応急処置だったと話した。この事故による降下者是不開傘だったろうと、暗然とした気持ちになった。

左の写真はレイト作戦の際の搭乗前の降下者、このように兵器等を携行し

ているので、自動策が絡むこともあり得る。勿論予備傘は携行しない。



大いなる賭

田中 賢一

「らずんば虎兇を得ず」であると伝えられている。

現在世界中に空挺部隊を持っている国は30箇国以上もある。現在は第二次大戦や朝鮮戦争のような大規模な会戦方式の戦争は考えられないので、持っている空挺部隊の用途は、紛争地や紛争の予想される地域へ迅速に兵力を注ぎ込むことになる。そうなるに現在

沖繩に在る海兵隊のように、ヘリコプターを多数装備している部隊との、區別がつかなくなる。

そんな時代に第二次大戦当時の空挺戦史を持ち出しても迂遠なような気がしないでもないが、ここに顧みたいのは空挺部隊を使う指揮官に焦点を置くのであって、現在や将来の軍事や政治を見る目に裨益するところがある。

虎穴に入らずんば虎兇を得ず

後漢の時代、班超は官命を受けて西方の膳善国に使用した。初めは膳膳国の待遇はよかったが俄かに悪くなった。それは匈奴から使節が来たからであることを見た。班超の率いる部下は36名、匈奴の使節団は遙かに多い。班超は部下を率い夜匈奴の宿舎に切り込んで匈奴を皆殺しにしてしまった。その時部下に言った言葉が「虎穴に入

らずんば虎兇を得ず」であると伝えられている。

空挺作戦は虎穴に虎兇を求めるようなものである。洋の東西幾多の空挺作戦が行われた。虎穴に入る者もさることながら、虎穴に入らしめる者も一大決心を要する。

パレンバンで功を成した我々は、戦局の焦点ビルマに移った。その兵力は挺進第一聯隊が4個中隊、第二聯隊が2個中隊（パレンバンに翌日降下した中隊と各中隊の残された者の集成中隊）計6個中隊、飛行隊は5個中隊。

昭和17年4月、我が十五軍はビルマで破竹の進撃を続けていた。イギリスのビルマ軍団も中国から南下したビルマ遠征軍も、勝ちに乗じた我が軍の敵ではなく雲南方面とインド方面に分かれて退却しつつある。この時我が第五飛行師団は、新たに指揮下に入った第一挺進団を使って敵の退路を遮断し、第十五軍の進攻作戦を更に光輝あるものにしようとした。

目標はラシオと決まった。ビルマ公路を雲南方面へ退却しつつある中国軍は約4個師団である。これに対し我が方は6個中隊の落下傘部隊をラシオに降下させ、一大殲滅戦を展開しようとした。捉えようとする虎兇は大きい。しかし過早に降下して地上進攻部隊と

の提携が遅れると、千名足らずの軽装備の我が降下部隊は、雪崩の如き敵軍に揉み潰されてしまうのではないかと飛行師団ではこれをおそれた。

なるべく降下時期を遅くし、出来れば一昼夜ほどで地上進攻部隊と提携させたい。このような考えで4月29日と決めた。これより先現地の第五十六師団に派遣されていた十五軍の竹下参謀から「今ニシテ挺進作戦ヲ行ハザレバ雑魚ハ得ベキモ大魚ハ逸セン」という電報が入ったので、挺進団では作戦時期を早めるよう意見具申したが、飛行師団の決心は変わらなかった。

幸か不幸かその日ラシオ付近は天候不良で、輸送機の大編隊は進入できず目標近くまで行き引き返した。後から判明したことが、地上進攻部隊の進出は意外に早く・・・というか、敵の退却が早過ぎたのか、予定時刻に降下しても友軍の頭上となっていた。

これは日の目を見なかった失敗例だが、使う側の苦慮したことになりなす。飛行師団長は小畑英良で、後に第三十一軍司令官となりグアム島で玉碎されたので、ラシオ空挺作戦時の心境をお尋ね出来ないが、参謀長の三好康之さんには戦後お会いした。パレンバンは固定目標だが、ラシオのように運動戦の渦中に投ずるのは難しいと言わ

れた。

次はもう一つ、自信を持って決行したが、結果は降下部隊の悲惨な結末になった事例がある。コーネリアス・ライアン著『遙かなる橋』で有名な連合軍のマーケットガーデン作戦についてである。映画名は「遠過ぎた橋」。

ノルマンディー上陸に成功した連合軍は、ドイツ本国に向かい怒濤の進撃を続けている。1944年9月、正にライン河の攻防に入ろうとしている時を掴むため、連合軍左翼正面では連合空軍による大空挺作戦が決行された。

アメリカ空挺2個師団、イギリス空挺1個師団、それにポランド空挺旅団が加わり、前掲のラシオ空挺作戦とは桁違いの規模である。

さて、その中で最も敵中深く投入される部隊は、イギリス空挺師団であつて、この師団は地上の第一線より百キロも遠方にあるアーネームの渡河点を確保し、ライン河北岸に橋頭堡を確保するのが任務だった。師団は9月17日一三三〇その先頭をもって予定通り降下したが、それから9日間苦戦の連続で、遂に潰滅したのである。

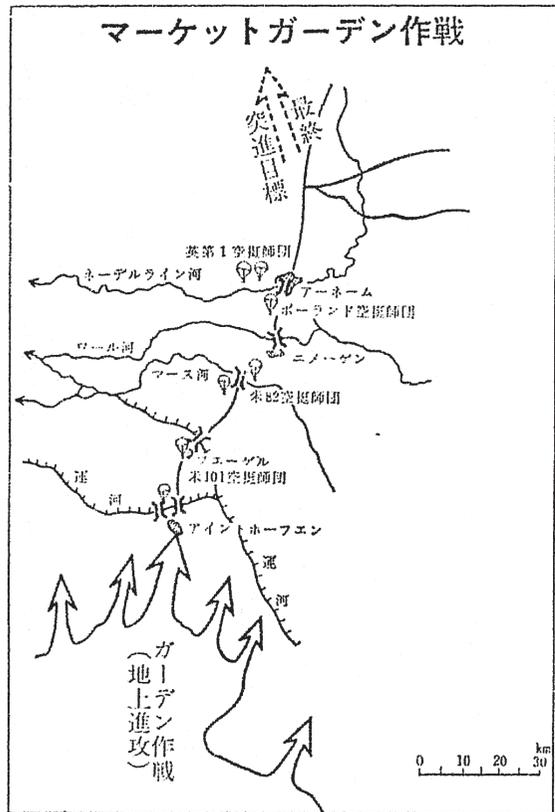
はじめ空挺師団は、奇襲の利を發揮してドイツ軍を圧迫し、アーネームの橋梁を占領したが、ドイツ軍は事の重

大きに気付くや、猛烈な反撃を開始した。ドイツ機甲部隊は未だ健在であった。多数の戦車を繰り出してイギリス空挺団を分断したため、橋梁を直接占領していた部隊は全滅してしまった。

天候の不良は空軍の支援を妨げ、後続補給に向かった輸送機は、ドイツ軍が集中配置した高射砲に、毎日数十機が撃墜されてしまう。辛うじて投下した物料も、占領地域が狭いためドイツ側に落ちるといふ有様で、状況は刻々悪化した。

アメリカの2個空挺師団は、アーネムより南の方にそれぞれ空挺堡を占領していた。地上進攻軍はこの三つの空挺堡を串刺しにするような格好で突進し、4日目には一番遠方のイギリス空挺師団と提携する計画だった。ところがドイツ軍の抵抗は極めて強く、5日目になってやっと2番目の空挺堡であるアメリカ第八十二空挺師団と提携できたが、また30キロも南方である。

ライン北岸に孤立しているイギリス空挺師団は、食無く弾薬乏しく、負傷者救護の手段もなく、グライダールのパイロットまで銃を執って戦ったが、総勢一万の大半を失った。9日目の夜、師団長以下2千名が河を渡って南岸に脱出し、友軍に収容されたが、北岸に残った者は、ドイツ軍の捕虜になった



り、オランダ人に紛れ込んだりして、空挺堡は完全に潰れてしまった。

イギリス軍総司令官モントゴメリー元帥が師団長アーカット少将に与えた手紙(日本軍の感状のようなものか)の中で、師団の健闘を口を極めて賞賛し「歳移りもし一人の男として「私はアーネムで戦った」と言える人があつたら、それは偉大な名誉であるに違いない」とまで言っているが、日本にもよくある「壮烈鬼神を哭かしむ」の類だろう。それにしても部下を捨てて脱出した師団長を褒めるとは。

最高指揮官アイゼンハワーや直接この作戦を発動したモントゴメリーが判

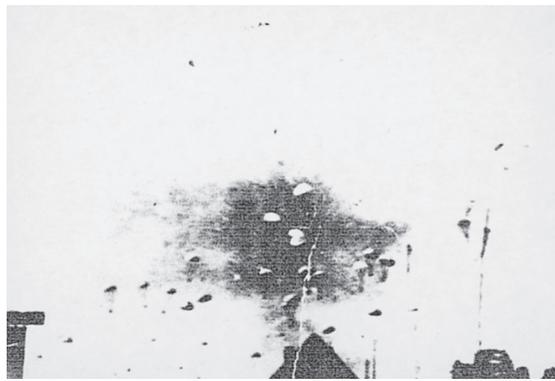


英空挺師団長アーカット少将

断を誤ったことには変わりない。空挺作戦とはこのようなものである。であるから実施を命ずる指揮官の苦衷は大きく、最終決心をする場面は、歴史劇のハイライトと言ふべきものがある。

次号で、その史実二つばかりを述べよう。

(続)



右同補給品投下、独軍地域に落ちる物が多い



アーネムに降着する英空挺師団

洋の東西に見る

古色蒼然たる特攻

田中 賢一

ブレドー旅団の襲撃

1870年(明治3年)の普仏戦争中の一場面である。開戦1箇月後の8月16日、メッツ西方のヴィオンヴィル付近で起きた戦闘である。この日プロシア第3軍団はフランス軍左翼に迫り、初めは戦鬪有利に進展したが、フランス軍が逐次増加し、その兵力は三四倍に及んだ。刻々敵に包囲され、特に第6師団は離脱もできず、累卵の危うきに至った。

騎兵第12旅団(旅団長ブレドー少将)は騎兵第5師団の部隊であり、第3軍団とは同じく第2軍に属し、この時ブレドー旅団は第3軍団長フォン・アルフェンスレーベン中将の指揮を受けていた。

軍団長は歩兵第6師団の危急を救うためには、ローマ街道沿いにある敵砲兵を沈黙させることが先決であると考え、参謀長レッツ大佐を旅団長のもとに走らせ、攻撃命令を伝えさせた。時刻は午後2時である。

騎兵第12旅団は胸甲騎兵第7聯隊、槍騎兵第16聯隊及び竜騎兵第13聯隊よ

り成り、各聯隊とも4個中隊編成だった。但しこの時竜騎兵13聯隊は、戰場各所に分散していて旅団長の手元になく、更に重騎兵兩聯隊から、それぞれ1個中隊を別の方面に偵察のため差し向けていたので、旅団長が直ちに使える兵力は6個中隊だった。歌にいう「九百の騎兵計らずも 進撃の命いまして 勇み立つこそ健気なれ」とは、この6個中隊九百騎である。

プロシア参謀本部編纂の戦史に拠れば、「フォン・ブレドー少将ハ忽チ目下ノ状況ニ於テ騎兵ハ已ムヲ得ザレバ自ラ犠牲トナルベキ覚悟ヲ以テ一意ニ猛烈ナル襲撃ヲ行ウニ非ザレバ其ノ目的成功シ難キヲ看破シ毫モ遲疑スル所ナク直ニ命令ノ実行ニ進メリ」(明治40年偕行社発行の訳文)―進めば死す」と知りつつも 友軍の急捨て難し―とはこのことである。

旅団は直ちにヴィオンヴィル村北方の凹地を、敵眼敵火を避けつつ北進し、そのまま右向きに展開して台上に出た。至近距離より激しい銃砲火を受けたが物ともせず、少佐伯爵シユメットウの率いる胸甲騎兵第7聯隊を左に、少佐フォン・デルドルレンの率いる槍騎兵16聯隊を右に、横隊に展開して敵歩兵に向かって襲撃した。

フランス軍歩兵線を蹂躪突破し放列

に殺到した。砲手を斬殺し轆馬を仆し遁走しようとする第二線の砲兵を追いローマ街道よりルゾングヴィルに向かい降下する谷を越え、3千メートルの距離を一挙に走り抜けた。

この時フランス軍側は、折しも戰場に駆け付けて来たミュラー竜騎兵旅団を正面から胸甲騎兵7聯隊を左側から、胸甲騎兵10聯隊の2個中隊を背後からブレドー旅団に差し向けた。更に



ブレドー旅団 右上に見えるのは反撃に現れた仏軍騎兵

ヴァラブレグ騎兵師団がルゾングヴィル付近から前進して来た。ミュラー騎兵旅団とは騎兵予備団第3師団の第1旅団のことで、旅団長は侯爵ミュラーで、竜騎兵2個聯隊より成る。また胸甲騎兵の2個聯隊も同師団の第2旅団の部隊である。これらの聯隊が完全に揃っておれば、ブレドー旅団当面のフランス騎兵は14個中隊になる。

ここに於いて、ブレドー旅団長は集合ラッパを吹奏させたが、長距離の襲撃に人馬とも氣息奄々、敵弾に倒れ或いは傷付く者数知れず四面全く包囲されるに至った。やむなく最後の勇を奮い、迫り来る敵と格闘しつつ、先刻蹂躪した敵歩砲兵の線を再び突破し、弾雨に追われつつ味方の陣地に帰った。フランス騎兵の追撃はなかった。

この襲撃に参加した兵力は6個中隊で800騎、損害は槍騎兵聯隊長フォン・デルドルレン少佐以下379名、馬409頭、兩聯隊残存者をもって辛うじてそれぞれ1個中隊を編成できるという惨状だった。同じ師団に属する騎兵第13旅団が駆け付け収容に任じたが、フランス騎兵は追撃しなかったのが、戦闘にはならなかった。

フランス軍の記録に拠れば、戦闘に参加した騎兵は2個師団で約3100騎だったが、その後歩兵も騎兵も停止

したので、プロシアの第3軍団は態勢を立て直すことができた。

永沼挺進隊張家窪子の乗馬戦

日露戦争沙河の対陣の時、秋山好古の企画で指揮下にあった騎兵第八聯隊長永沼中佐を長とする、2個中隊176騎の挺進隊が派遣され、敵後方の新開河の鉄道橋を破壊した。ここにその行動の全部を述べるのではなく、標題に該当する一場面を取り上げる。

明治38年2月11日紀元節の夜、鉄道橋の爆破は成功し離脱した。爆破の際作業班長小堤少尉は頭と背中に敵弾を受け負傷し、他の負傷者7名と共に馬隊の馬車に乗せられ跟随した。馬隊とは我が軍に協力している現地の武装組織である。

離脱撤退

負傷者に乗せた馬車があるので行軍が進捗せず、5里ばかり行き二再山に宿営、翌13日も同じくらい行軍し超宝湖に到着した。同夜南方約30清里(約20キロ)に敵約100騎到着という馬隊の情報を得たので、夜明けに出発し歩度を早め14日午後4時頃要陀子に到着した。

宿営を準備していると砲撃を受けた。敵との距離は4千米くらいあったが、毛の帽子をかぶり槍を携え白馬を交え敵の騎兵であることは明らかだった。

た。騎兵の戦闘はたとえ敵を撃破し得ても我が方も損害を被ることを覚悟しなければならぬ。既に8名の負傷者を馬車に乗せて連れて来ている。これ以上損害を出せば行動は益々鈍重になる。戦闘の決心は容易につかないところであるが、挺進隊長はこの際断固として攻撃するに決した。

このことについて後日永沼中佐は次のように述べている。

一 出発以来潜行のみをこととし、殊に一兩日以来敵の攻撃を避けてきた為士氣一般に沈滞せること。
二 従来大目的のため敵に対しては主として馬隊を当らしめたるも、すでに第一の目的を達したる刻下の時期に於いて、なお戦闘を避くるときは将来馬隊との協同上面白からぬ關係を生ずべきこと。

三 追撃し来る敵にして若し正当に任務を了解しあるものとせば、たとえ今日離脱するも更に追撃し来るは当然なり。先日来昼夜兼行したる挺進隊は離脱するの余力の存せざることを。若かず寧ろ死地に投じて活路を求めんとする決心は忽ち胸中に確立せり。宮内大尉に命じ背進しつづける本隊に対し左の命令を伝えしむ。云々と。

張家窪子月下の襲撃

永沼隊長は要陀子に於いて攻撃命令を下達し乗馬のまま突進した。高地に到達して見ると敵は既に退却し前方約700米の林の中に進入しつづつある。直ちに徒歩戦を命じ林の付近の敵を射撃すると、敵も撃ち返してきた。やがて夜になって目標も見えなくなった。

隊長は直ちに乗馬追撃を命じ、沼田少尉以下6騎を尖兵としその後ろに隊長、中屋中隊、浅野中隊と続いて張家窪子に向かい突進した。張家窪子の北端に到るや突如砲弾が頭上を掠め、小銃の乱射を受けた。部落は土塀に囲まれ突入できない。隊長は先頭に立つて右に迂回し、土塀に沿って南進した。

敵砲兵は土塀の内側にあつて繋駕して退却を開始し、敵騎兵50騎ばかりが続けているのが月明かりで見える。疾駆すること約千米、土塀の切れ目があつた。隊長の「左へ回れ」「襲え！」の号令で本部と中屋中隊は砲を有する敵の中へ突入、忽ち混戦乱闘となった。

名状すべからざる混戦の後敵の砲1門を奪い万歳を叫んだ。

一方浅野中隊は中屋中隊に続行していたが、砲弾が落下したので横隊に開いたとき中屋中隊が右に迂回したのを見失い、塀の低い所があつたので飛び越えて部落内に突入し、敵騎兵主力と

格闘となった。敵は200騎、我は70騎、しかも我が馬は連日の行軍に疲労甚だしく、遂に隊長以下16騎(負傷後死亡も含む)を失い頗る苦戦したが、敵も若干の死傷者を残し潰走した。

本戦闘における死傷者は次の通り。

中屋中隊 戦死2 負傷10

浅野中隊 戦死16 負傷34

この戦闘で多くの死傷者を出して戦力半減した挺進隊は、17日長林子に至り、ここで再編成し、小部隊ごとに分かれ、敵の通信線の破壊等を行い、任務を完遂した。

小堤少尉の気力

小堤少尉は新開河の橋梁爆破の際作業班長として激しい敵火を冒して爆薬を装着、この際頭と背中に敵弾を受けたが、最後まで現場に残り装薬を点検した。部下に扶けられ手馬位置まで戻つたが出血多量で乗馬できず、馬車に乗せられ部隊に跟随した。

翌々日要陀子において追尾してきた敵を攻撃すると知り、従卒に命じ自分の馬を持ってこさせ騎乗したが、出血多量だったため体力衰え騎坐が締まらず落馬しそうになる。そこで鞍に体を縛り付けさせ戦闘に加わった。浅野中隊に属し正面の土塀を飛び越え部落内に突入し、闇を透かして見ると多数の敵騎が集結している。中隊の先頭切つ

てこの敵に突入した。包帯を巻いた頭は夜目にもはっきり見え士気を奮い立たせた。この戦闘で更に4箇所の槍傷を受け約1箇月後の3月10日大蘭宮子において死亡したのである。そのときのことを及川中尉(中屋中隊の小隊長)の手記は述べている。隊長は病臥している小堤少尉に言った。「挺進隊はこれから再び鉄道破壊に出かけるが、お前の為には充分看護や護衛に手落ちがないように人員を残しておくから安心して療養し早く治るようにせよ」と。

小堤少尉は顔色も憔悴し両眼に涙をたたえて聞いていたが、いかにも残念そうに例の切り口上で幾度か途切れ途切れに「隊長殿何ですか、私共はお国の大事に生きて帰ろうなどと思っております。おそらく挺進隊の皆さんの心は同じだと思います。負傷者も病人も最後まで行動を共にすることが出来ないのを憾みこそすれ、看護や保護を望む者は一人もおりません。苟も手一本でも足一本でも働さう者は皆出かけて行って下さい。私共の看護の為に健康な者一人でも残っていたとあっては、私共は死んでも目を閉じることは出来ません。患者のことなど考える時期ではありません」

言々悲壮とはこの事だろう。時々歯ざしりをしながら伝わる涙と共にこの

断末魔の熱誠溢るる言葉には一座皆肅然襟を正して嗚咽あるのみ。隊長も亦無言嗚咽あるのみ。

小堤君はその後東南方に殷々たる砲声に胸を躍らせながら、興奮漸次熱が高まり遂に意識を失うに至りしこそ遺憾なれ。絶えず「監視兵はどうした」「早く射撃しないか」「早く出る」などと口走りながら、昏々として三月十日頃未だ各分進隊も帰らず奉天の捷報も耳にすることなく、数多くの戦友の涙の看護を受けながら幽明境を異にするに至りしことこそ遺憾なれ。

(及川虎彦著『永沼挺進隊回顧』)

永沼中佐の気迫

小堤少尉に代表される烈々たる気迫の将兵を率いた永沼中佐は、まことにその任に相応しい指揮官だった。中佐の真面目は張家窪子の反撃に見ることが出来る。目的を達成して退却すると3日、砲を有する敵に追尾され断固反撃したことは、騎兵戦闘の実相に思ひ致せば並大抵の決心ではない。広漠たる戦場で劣勢なる騎兵が2倍以上の敵騎兵に乗馬戦を挑み、敵が飽くまで戦う意志を持っていたら文字通り全滅になることは判っていた。それであれば要陀子で永沼隊長が反撃の決心を表明した時、流石の両中隊長も考え込んで黙っていたという。本部付の宮内大



永沼中佐

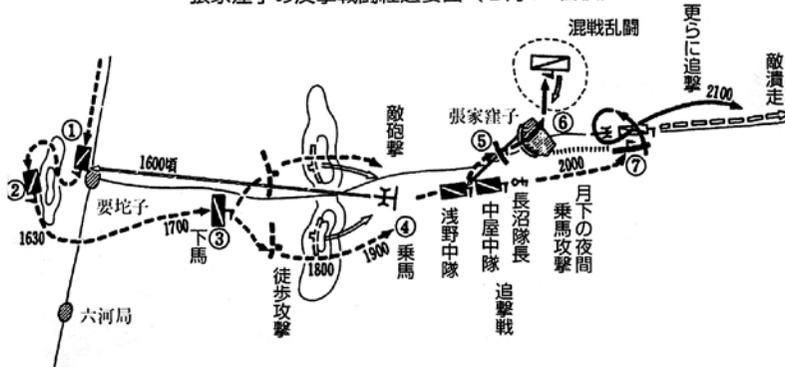


小堤少尉

尉が「やりますか」「やる」「やりますか」「やる」暫く間をおいて「本当にやりますか」「本当にやりますか」「本当にやる」とキツパリ断言したという。これによって隊長の決意は電撃の如く全將兵に伝わっていった。この月下の襲撃によって130名の内60余名の死傷者を出し戦場の主となることが出来た。

この戦闘に破れ砲まで奪われた敵の指揮官は、日本騎兵の大部隊と戦ったと報告したのであろう。それを受けたクロパトキンは新開河の橋梁が壊された以上に驚いたろう。

張家窪子の反撃戦闘経過要図 (2月14日夜)



海軍飛行機整備予備学生の会 (相模野会) に思う

鈴木 利男

〔編注・筆者は、会報『特攻』第71号(平成19年5月発行・7〜9頁)で紹介したように、昭和19年9月横浜国大建築

科を繰り上げ卒業、海軍飛行機整備予備学生として厚木航空隊に入隊、翌20年4月小松海軍航空隊予科練生教官、同年6月海軍少尉任官、九州海軍燃料廠勤務、石炭液化開発業務に従事、戦後は美術関係の画房や総合プロデューサー会社を経営され、退任後は趣味として絵画、書道に専念しておられるが、平成19年1月29日〜2月3日、日本橋・壺中居で開催された「今甦る若者決死の声」展を始め、鎮魂・慰霊の思いを筆に込めた「言葉の書画」展等を度々開催され、平成19年9月21日〜12月10日には、靖國神社遊就館特別展に出席され(会報『特攻』第73号)平成19年11月発行・31頁掲載)、同展示作品を靖國神社に奉納されている。

この度、以前に同期生会会報等に掲載された記事を参考までにと寄せられたので、その中の一部を掲載させていただきます。

戦前の映画(無法松の一生)の名脚本家伊丹万作がこう言いながら昭和21年に亡くなった。「敗戦後に俺達は皆騙されたんだと言う人は沢山いる。然し俺が騙したんだと言う奴には一度もお目に掛かったことはない。これから米軍占領下の日本も相変わらず騙され続けて行くのだろう」と。

僕達が参加した太平洋戦争争って一体何だったのか。その頃の僕達の気持ちは唯夢中でやっただけで誰に騙されている等考えたこともない。あの危急存亡の時には唯勝つことを信ずるしかなかった。この美しい緑の祖国と親愛にして尊敬すべき家族を護るために命懸けで頑張らなきゃ、と思っただけだ。

二十歳を過ぎたばかり、親離れもしていない若者にとっては、大きな国の運命を背負っているということだけが共通の志だったし、心の奥底にそういう気負いがあった。

猛訓練も、空腹も、また、娑婆つけない乾燥した空気にも、よく耐えられたものだ。

四十五年過ぎてみるとすべては幻の様だ。

走馬燈を逆廻ししてみても始まらないが、然し今の世の中になく大変な体験をしたという確信は皆持っていると思う。馬鹿な戦争をしたものだと思

人は簡単に言うが、その時はそんな生易しい状況ではない。「精神力」ってこんなに強靱なものかということも二相空のあの場所、あの時、そして佐藤隊長の行動哲学?で六百人が皆つかんだのだ。後世こんなドラマを体験できる日本人はないだろう。

平成2年5月27日近畿支部の肝入りで、松本秀一君戦死の地淡路島阿那賀で慰霊法要が行われた。景勝の地の台地に宝塚空八十二柱の墓標がある。中には予科練生十四歳というのものもある。僕は白虎隊を思い浮かべた。母恋しと慕う少年の童顔が彷彿とする。

黙々と死んで行ったこの少年の肩にも国家の運命と悲劇が重くのしかかったのだ。

単なる事故ではない。こういうことは決して風化させてはならない。何とかして語り継いで行かねばならないと思う。使命を帯びて気の毒にも散った人々を「弔う」。しかも四十五年間地元の老人会や僕達関係者がそれを続けていた。これは旧日本の人達が持っていた「供養」という美しい心そのものだ。強靱な精神力の存在を体験した僕達にとつては、人生の中での掛替えのない行為として大切にしていきたい。

我々自身昭和20年8月15日に精神の散華を遂げている。相模野会が単なる老

人クラブとしてでなく、年々絆が出来ているとすれば、その思い出や行動に對して、知らず知らずの中に追善供養しているのではなからうか。

(平成2年6月記)

◇ ◇ ◇
○『相模野花あり』(海軍予備学生時代の思い出の文集3巻)より

付記・「相模野花あり」上・中・下3冊を昭和天皇に献上したところ、陛下は早速「これは野花の本かね」と言われたという。安楽侍従次長が「いや、これは海軍予備学生の訓練時代の思い出話です」と申し上げたところ、非常に興味深げに御覧になり、珍しく陛下のお机の上に3カ月以上にわたって置かれていたという(同期生の安楽侍従次長の話)。

食即是空 空即是食

「ウイローを三個頼むぞ鈴木学生」「桜餅の軟らかいヤツで少し大き目のを頼む」「成田の米屋の羊羹知ってるだろ!あれの栗のタププリ入ったのがいいや」「葛餅のキナ粉と黒い甘い蜜食いテーナ」あっちの席、こっちの席から注文が殺到する。

今ならそれこそ腕まくりで一つ一つ包装して、ハイ毎度有り難うございませと云って忙しそうに手渡しするとこ

ろだが―実はこれが本物の美味しい菓子でないから話は面白くなる。

夜は温習時間(自習時間)が始まる。いつも僕のところにお菓子の絵を頼みに来るのである。隣にも、またいじらしい戦友達のささやかな望みなのだ。勿論、紙は戦友持ち、エンピツは僕の上等なドイツ製の黒の2B、あとは私の画才を頼りに、注文を一つ五分位でどんどん書き上げてゆく。出来上がった絵は各自の机の上に置かれ、タメ息をつきながらじつくりと、かつ、なめ回すように眺められる。中には黙って独り、生ツバをグツと口に一杯ためて、菓子の絵をにらんでいる深刻な顔、一枚の僕の絵を高くかざして、美味しそうだと絶叫する嬉しそうなお顔(まるで修道院の禁欲僧がポルノの絵を見ているのと同じことだったかも知れぬ)。

注文と言っても、僕達は全国あらゆる地方から集まった者であるから、地方独特の菓子名を言うのである。中には分からぬものも多くて困った。恥ずかしいことだが、東京生まれの僕には関西で一般的に言われる「ウイロー」という言葉が知らなかった。四区隊の福田学生や重枝生徒はウイローが好きだったとみえて毎日注文が来る。その形、味、色、軟らかさなどを聞くのだ

が、サッパリ要領を得ない。特製のウイローには黒いアンコが入っているものもあると彼等は言う。僕はテツキリ中村屋でその頃売っていた塩釜と勘違いした。そして一生懸命その粉っポイ菓子を描いたものだった。戦後何時だったか、たまたま名古屋に行った時生まれて初めてウイローなるものを見、かつ試食した。両君の求めたものはこれだったのか、と思ったがもう遅い。しかし、彼等は僕の描いた塩釜をウイローと思い込んで生ツバを飲んでいたので。申し訳なく思う。

一番難しかったのが、シュークリームである。特に三区隊の某君がお気に入り、三日に一遍位の注文がきた。上から見たところを描けとか、横から見たところ、クリームがはみ出してドロツと流れたヤツを描けたとか、様々な姿態を要求された。クリームをあんまり立体感を出して濃く描くと黒くなってアンコみたいになる。薄くソフトに立体的に描くとまるで山にたなびいた雲みたいになってしまう。シュークリームの皮がまた難しい。あの口に入れた時のフワツとした感じを出せというのだが、なかなかうまくゆかぬ。描けば描くほど固い石みたいになる。しまいに面倒くさくなって、シュークリームを焼いて黒く焦がしたと思え、

と言って絵を渡したものだ。

入隊して二カ月したら、母から三菱の色鉛筆十二色のものを送ってきた。これは新兵器だなと思った。母の送ってくれた思惑とは別に、これなら毎日菓子注文が殺到してキリキリ舞いしている僕にとって、あらゆる注文に応えられる革新的技術でもあったし、内心ホクソ笑んだ。みんなも原色溢れ、実感に満ちたものができるのでビツクリした。一段と美味しくなったという高い評価が生まれてきた。僕も有頂天になった。ところが欲には限界がないもので、色と形以外に、香り、甘さ、匂いなどを要求されるようになった。もはや僕の紙上の絵だけでは技術的に行き詰まるかも知れないと思った。仕方がないから絵を渡す時僕の口頭による説明をつけることにした。例えば、アンコでもこれは黒砂糖をこね回したコッテリアンコだと言った。この草餅は餅草の緑の匂いがブンブンして歯ごたえも実によいんだというような説明をして煙にまいたたりした。だんだん視聴覚手段でなければ人は満足しなくなるのかも知れぬ。

○私にとつての昭和二十年七月十三日(金曜日)―福岡県遠賀郡中間町、大正鉱業所にて起き

た殉職事故―

この日のことは私以外誰も関心のないことかも知れない。しかし私にとつては一生忘れられない、また私の人生観にも一つの転機と覚醒をもたらした日でもある。戦後三十数年間その日が近づくとひそかに思い出し、思い出しは人生の因縁の不思議さに打たれるのである。

二相空を昭和二十年三月に卒業した私は最初石川県的小松空(練空)に行き、予科練の分隊士として約二カ月を過ごした。その後五月下旬に九州志免の海軍第四燃料廠に転勤となった。これは北九州の有力炭礦の石炭の一部を低温乾溜してタールを採り、精製して高圧で水素添加をして航空機用ガソリンをつくるという構想があった。このための建設と運用の要員として我々同期の中から土建出身者十数名が選ばれたわけである。

柴山湾と青い日本海に囲まれた若さ溢れる予科練生と起居を共にし、毎日毎日特攻を見送ったり、基地整備に励んできた私にとつて、灰色のボタ山と雑然とした炭住街の汚れた志免の町を見た時、いささか戦意?喪失、茫然ともなったわけである。しかし、毎日のようにやって来る米國艦載機の機銃掃射や、空を見上げて歯を食いしばる博

多ッポの激しい敵愾心に同調して、次第に私の気持ちも現地状況に慣れてきた。その頃から、石炭の蒸し焼きの原理や、築炉を含めた排煙捕捉のプラント造りの技術など特訓が始まったわけである。建築出身の私には化学のことはサッパリ分らないが、とにかく早く立派なものを造ればいいんだなど自分自身に言い聞かせた。

その終わりの頃、日曹コンツェルンの中野友礼氏が三日間特別講義をしてくれた。―彼は当時海軍勅任技師。

彼は言う「ドイツは亡びた。然し、ドイツが創った技術は亡びない。カールトアイスを見よ―米ソ両国が殺到してその技術者と工場設備を奪い合っているではないか。」「日本もドイツと同様の運命をたどるにせよ、諸君は海軍という場を通じて、独自の技術だけは確立して欲しい」。

訥々として素朴な話術だったが、さすが当時の民間人の雄として説得力があり、かつ、未来展望が開けるような気がした。今でも我々十数名を相手に話をされたあの浅黒い顎の張った顔が目につく。

こんなことがあって各自配属地を決められ、私は大正鉱業（中間）、貝島炭礦（大辻）、三菱鉱業（勝田、龜山）、九州採炭（新し）等を受け持つことに

なった。各鉱業所に石炭の低温乾溜装置を二基ないし四基設置することになった。

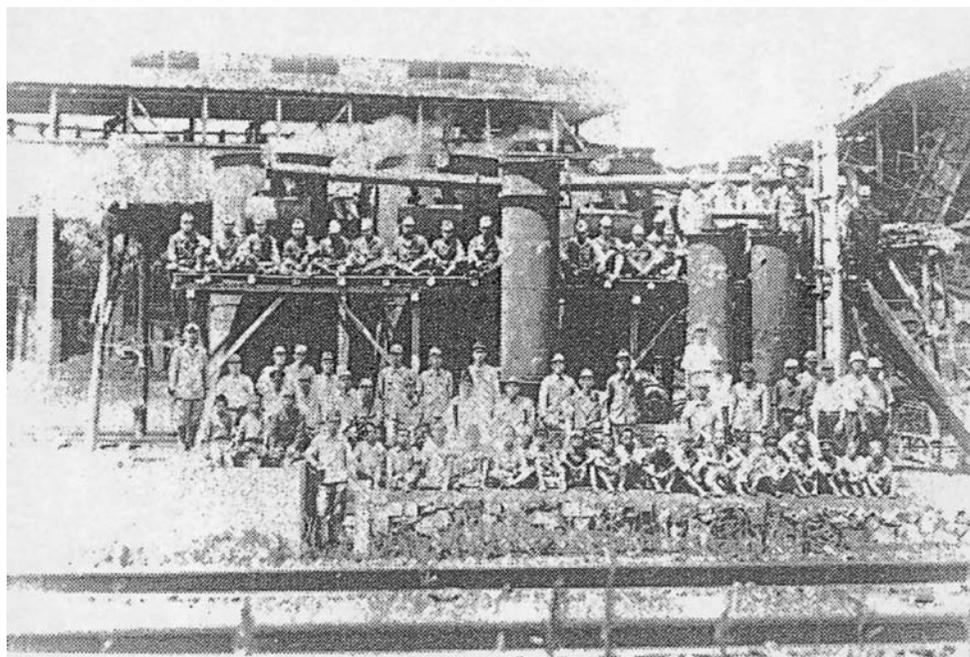
今見るような巨大なものではなかったが、それでも一基の炉は四個あり、その一個だけでも高さ6米直径3米位あったから、面積も一基500平方メートルあったと思う。何しろ七月の初めに現地調査を終え、七月中に完成、八月一日より採油の運転開始という無茶とも言える厳命だった。

言語に絶するような厳しい突貫作業だった。満でやつと二一歳になったばかりの若輩の海軍少尉の頭では全くどのように作業を進めてよいか分からない。今なら、パートの工程図表でも眺めながら予見の上に様々な手配も安心して出来るのだが、当時はただ二四時間体当たり、死ぬ気でやろうと思うしか手がなかった。手当たり次第というわけである。一番困ったのは、鉄や煉瓦やセメントの供給が皆無で、全部発送基地の小野田や八幡等に滞貨したままになっていたことだ。

ましてや熔接や大工、築炉技術者などもいないので、勤労働員署の署長に掛け合って徴用してもらったこともある。安井紋太郎という方で、若輩の言うことをよく聞いてもらい、協力していただいた。運転要員も二百名位必

要だが、本廠の方ではいづれ軍人を佐鎮から派遣するというのが間に合いそうもない。これは鞍手中学に大変お世話になった。当時四年、五年は勤労働員

不在、三年生以下しかいない。一応勉学中で、文部省の規定でも長期の勤労働員はさせないということになっていた。そこを何とかというわけで、再



昭和20年8月初旬 福岡県中間町 大正鉱業中鶴炭坑 海軍方4燃料廠管理の
石炭液化・低温乾溜装置火入式

三、再四お願いに参上し、向こうも私の真剣さと執念に根負けしたのだろうが、七月初めにOKしてくれた。今でも思い出す―西久保嘉蔵という剛気な背の高い校長だった。彼の自宅訪問も何回かやった。その門柱の表札は大きく、かつ、墨痕鮮やかに西久保嘉蔵と勇ましい字で書いてあった。その前でも今日もまた強引な頼みをしなければと思ひ、しばしば躊躇したりしていた自分のことを今でも思い出す。

本廠が何もしてくれないために、えらい苦勞をさせられた。資材も炭礦の車を運んで發送基地に行き、勝手に当方に運んだ。こんなデタラメな思いつきの作業進行だったが―戦後自分で会社を創業した時、その経験と度胸が確かに自分の自信となっていたことは間違いない。何もしてくれなかったというより、何をやるうとしてもできなかったあの敗戦時の七月の環境が、若輩の将来に一つの盲信を与えてくれたことは有り難いことだと思っている。

まあこんな訳で「手配師とは何か」という勉強を、イヤという程させられた。しかし、本心はあの白雪をいただいた白山の下、梨花繚乱と匂う澁刺とした小松空の生活がやけに懐かしかったことは事実である。

話は実はここから始まる。

当時大正鋳業兼中間鋳業所は、有名な伊藤伝右衛門(柳原白蓮の夫君)が経営者で赤銅御殿を博多と別府に造り当時博多におられた。老齢なので息子息の伊藤八郎という方が常務で会社の現場をみておられた。鋳長は高橋秀信という九大出身の方で海軍には大変協力的であった。

七月十二日には本廠の命で佐世保海軍工廠の超ベテランという一等熔接作業員として大熊年男氏が私の配下に入った。初対面でこれは仕事が速く行くなど直感した。

動作もキビキビして私の説明を実に要領よく理解してくれる。痩せているけれど健康そうで、いかにも実直らしさが私の気持ちをホッとさせた。愛煙家だったようで、ちょうど専売局から配給を受けた500本の光があつたので全部彼にやつたら、飛び上がるように喜んでいた彼の顔を思い出す。

その翌十三日(金)朝、私は宿舍の大正鋳業所を出て、貝島炭礦の担当者と打合せを終え、香月線というローカル線に乗ったのがちょうど昼頃だった。終点中間駅までタツタの十五分だ。貨車五、六輛に客車がちよつと二輛ばかりといった田舎線で、当時は食糧運搬び屋の人で超満員。特に博多湾頭で撃

沈され攔座した何隻かの輸送船は大量の満洲大豆を積んでいた。この大豆が公然と?ヤミで売られ、それを背負って行く商人がいた。もう腐敗しかかつたものもあつて、熱気とともに車内は我慢ならぬ臭気。窓を開けると陽光で焼けたボタ山の熱気、陥没地帯特有の湿気におおられて、とても涼風どころではなかった。

中間駅に着いてホッとした瞬間、―ああ今日は十三日で金曜日か、縁起悪いなあ、何か悪いことでも起きねばよいが―とつぶやいた。実は昨日私宛に父から母死すとの手紙を貰ったばかりだった。最も敬愛する母がたつた四十三歳の若さでこの世を去つた。五月三十日だという。小松空から回り回つて今頃手許に着いた。筆不精の父が精一杯その最後の模様を知らせてくれた。そして海軍に行っている私のことを口走りながら死んで逝つたことなど。

火葬もままならぬので、九段坂病院から前の千鳥ヶ淵の濠の芝の上に遺体を移し、あちこちの焼けた材木を集めて火葬をしたとも書いてあつた。私はただ泣けた。精一杯泣いた。一生のうちあの夜位泣いたことはない。そのおやじも生まれて初めて母の火葬を自分でするという羽目になったわけだが、夕方来てみたら実にうまく遺骨になつ

ていたという。癌に冒されていた母故にいつの日か最後が来るとは思っていたが、まさかこんなに早くとは思っていなかった。一昨日まではそんなこととは露知らず、毎日のように母宛に手紙を出していた。

そんな悲しくて辛い心境にあつただけに、十三日、金曜日という今日はイヤな予感がするものも当然である。

前にも述べたようにとても暑い日で風一つなかった。とても東京育ちの知る夏の暑さの比ではなかった。現場へ来てみると時間は二時頃だった。

昨日初対面の大熊氏は、築炉の囲い鉄板の脇の足場で一生懸命熔接作業をやつていた。私の顔を見ると降りてきた。カーバイトタンクをはさんで、彼と私は向き合った。彼は拳手の礼をして、私に言った。「どうもカーバイトのガスが出が悪いので困ります」「この頃大塊カーバイトといって粗悪品が多く、蒸気が出てホースがよく詰まるんです」。彼は一度タンクからホースをはずしてその中に水をふるように出した。全く私の目の前何十糧かの距離である。私も覗き込むようにして慣れた手さばきを見ていた。

彼は何気なく一度外したホースを元のノズルに差し込んだ。その瞬間である。轟音と爆風のような風圧とモウモ

ウたる白煙。私自身何のことやら慌てるだけだった。私の側に彼が—今の今まで元気でいた—仰向けに倒れている。四、五米先に工事をしていた作業員も三人程転ぶようにして倒れている。私自身はふと我に返ってみると、カーバートの白泥を頭から浴びて眼も開けられない。とにかく倒れている大熊氏を真つ先に抱き起こした。左腕が上膊部を残してやられている。右腕の脈をとるとかすかに鼓動がある。心配するとか同情するなんていうものではない。ただ反射的に「担架」「担架」と呼んだ。炭礦の病院から看護員と担架が来るのがどんなに長く感じたことか。然しやっぱり彼の生命は既に天に召されていた。炭礦の医局員の診断によると、鉄のタンクの大きな上蓋が引火爆発の瞬間彼の心臓部を直撃したものとこのう。

その上蓋は後で聞くと三十米もの高さまで飛び上がったという。厚さ二cm位で重さは三〇kg位あったと思う。腕一本位なんだ、これで命が助かるものならと念じていたが、やっぱり即死と聞かされると全身の血が引く思いがした。

その晩は炭礦の宿舍の一室をあけて貰い遺体安置所にしてお通夜をした。遺体には真新しい白い布団—炭礦の人

達の心づくし—が掛けられてあった。余りにも瞬間の出来事だったので、彼の顔は何の苦しみの表情もなかった。高橋礦長以下幹部が続々つめかけた。空襲下のため遮蔽の暗幕をめぐらした。暑い部屋の中は線香のにおいが一杯だった。私は遺体の前でつぶやいた。あんな至近距離でどうして君だけ直撃を受け、私は何でもなかったんだろう。四、五米先の人も爆風でやられたのに私は何故無事だったんだろう。運命のいたずらか、前世からの宿命なのか。昨日知った母の死、そして亡き母のところへ何故私も召されなかったのか。悲しい思いは果てしなく広がるばかりである。

そのあと後事を幹部に託して、小型トラックで八木山峠の七曲がりを超え早朝志免の本廠に行き、事故の報告をすませ、午後には炭礦に戻り、火葬の手配をすませた。

夕方遅く彼の義兄稲富氏がはるばる飯塚の山の中から駆けつけてくれた。日も沈みかかりボタ山の周りもうつすらと黒ずんできた。ボタ山の奥にある淋しい火葬場で彼は骨を拾いながら「この子は早く両親を失い、私が随分面倒をみたんです。又その子の骨を拾う運命になるとは」と涙をこらえて絶句した。私は初めての経験だが、一生

懸命成仏できるよう祈りつつ拾った。多分亡き母もこんな具合だったんだろうと思った。私と彼とは勿論一面識もなかったが、二人が共に骨を拾うというところで運命に対する不思議な共感をお互いに感じ取れた。母と大熊氏の死がダブった二重映しの画像のように私の頭の中を走る。惨劇と慟哭、そして追憶、一生懸命無常観とか靈魂不滅とか考えるが、そんなことより現実をどう解釈するか、震えたり戦^{おの}いたりする気持ちから抜けきれなかったのだと思う。

一週間後に本廠から山下少佐もみえて盛大な葬儀が行われた。その時やつと御遺族の大熊氏の奥さんと三人の子供さんに会うことができた。何も知らないあどけない幼児。一人は背負い、二人は手を引いて来られた姿を今も思い出す。

一瞬にして未亡人になられた御本人もさることながら、三人の子供達が成長期にどんな思いがするだろう。表すべきお悔やみの言葉もなかった。ただひたすら冷静さを装うだけであった。廠長からの見舞金を渡す時、自分の手がかすかに震えていた。

◇

慌ただしい事故の調査や、戦死扱いに関する手続きなどで忙殺された私で

あったが、仕事の方は予想以上に順調にはかどった。炭礦側の絶大な協力の賜物と思う。—戦後色々な体験を通じて考えさせられたが、やはり九州人の気骨と、一度信頼したら徹底的に協力するという点を特に感じた。—待望のタール油が予定通り八月一日に出た。伊藤八郎常務を迎え、簡単な火入れ式を行った。その日から一日ドラム缶三本位（一基当たり）の生産量に漕ぎ着けた。このタール油が果たしてどの程度の成果を収めることやら、私にとつては見当がつかなかった。百本位溜ったところで佐世保海軍工廠に送ることになった。

八月に入ると、日中のグラマンの地上掃射はもとより、夜間も無差別の爆弾投下や焼夷弾投下が激しくなった。

目前五〇米位のところで五〇kg爆弾に見舞われ、腹腔の腸や胃が口から飛び出すのではないかと思うような衝撃に驚いたこともある。青銀色に焼けたトゲトゲの破片が無数に散って沢山の人が死んだ。何しろグラマンは低空で来て、雲の隙間からいきなり地上攻撃をするので壕に入る暇もない。

八月になると、何とはなしに広がるデマの一つに米軍の有明湾上陸作戦などというものがあつた。伝単も国民を敵とせず、軍閥の抹殺が目的だとも書

いてあった。米軍の上陸に備えて国民総武装兵器なるものを工廠等で造り始めた。これは三つあって、一つは今から見れば噴飯物だが火繩銃である。五

cm角の角材で長さ五〇cmに鉄のパイプを針金で巻き付けたものである。殺傷距離は五〇m以内、もちろん照準などはない。それからずばり竹槍と、手榴弾も直径五cm位の鉄パイプを輪切りにしたもので、上下に蓋をつけ信管が付いていた。三発に一発位しか炸裂しないものだった。これは主として自決用にということだった。

米軍の上陸必至という本土決戦の緊迫感が一段と高まる中で、大熊サツキさんから礼状が届いた。葬儀の礼と今後立派に生き抜いて行くという決意をしたためたものであったように思う。今私の手許に当時博多で求めた人名簿なるアドレス帳がある。そこに大分県大分郡植田村下芹大熊サツキとはっきり記してある。その時の手紙から写し取ったものである。もうすっかりボロボロではあるが、このことが、やがて大熊家と三十年にわたる交際が始まるたった一つの原点だった。

それから十数年、毎年七月十三日が近づくとも必ず思い出した。私共も戦後転々としていたし、大熊一家も果たしてどこにいたることやら調べるすべもな

かった。誰も彼も自分のことで精一杯という時代であった。こんな混乱の中で私がよかったと思っていることが一つある。

それは昭和二十年の敗戦直後、前述の父も急死してしまったため、若輩の身ながらに位牌と仏壇を整えて、毎日のお勤めをしてきたことである。その毎日の祈願の一時にいつも大熊氏のことを念ずることも不思議ではなかったかも知れない。

ボロボロの人名簿の中にある大熊サツキさんの消息について、その植田村の村長さんに訊ねてみようと思ったのは多分、昭和三十五年頃だったように思う。村長さんから意外な便りがきた。大熊さん一家は元気に暮らしているというのである。しかも後家さんのまま頑張り抜いて三人の子供は立派に成長したという。村の模範家庭として表彰もされているという。私がかつたなと思つて喜んでいるうちに、当の大熊サツキさんから手紙がきた。向こうも大分驚いたらしい。戦後の頑張り抜いた健気な家庭の出来事がしたためられ、又、私共の激励に何より心の支えができた、丁重に感謝を込めて記されていた。

戦後、夫婦揃つての子供連れを見ると、何故私だけがこんな目に遭わなけ

ればならないのかと、辛い時は幾度か人に隠れて泣いたこともあると記されてあった。しかし今は、長女も嫁に行き長男と次女も学校で、もう心配は余りないということだった。

この手紙のやり取りから私共と大熊一家との付き合いが始まったわけである。

数年後次女の久子君が高校の修学旅行で東京に来ることになった。

事前に引率の先生の許可を得て、上野池之端の旅館から我が家に連れてきた。戦後初めて会ったわけだが、どこか亡き父君の面影があった。色々の話をしているうちに、私としても彼女に七月十三日のことを話しておこうと思つた。「お父さんの立派な最期を話すから、よく聞いて下さいよ」と言つて、私にとつて鮮明で、かつ大切なあの日のアクシデントの話をした。

偶然にも貴女のお父さんと前の日に一緒になり、その翌日には永遠の別れになってしまい、そしてまた偶然にも貴女と会うことになった不思議な運命の巡り合わせを話した。「貴女にとつてもたった一人のお父さんであるけれど、お父さんにとって私は、自らの生命が天に召される瞬間、その最期の時にそれを見届けた、たった一人の友人だったんですよ」と。

彼女の父の最期の事情を二時間も話をしたら、私の心の奥にある何かのわだかまりがすうっと消えるような感じだった。このことを何時の日にか遺族に伝えておきたいという私の責任感もたいなものがある。それがかも知れない。

それから一カ月程経つて久子君から手紙が来た。未だ見たこともない父のことを知つたお礼と、その感動がしたためられてあった。その中に旅行報告の弁論大会に選拔され「東京で会えた父」という主題で話をしたことが書いてあった。激しかった敗戦時の環境、その中で国の仕事に殉じた父、未だ見ぬ父への思慕の一つを満たしてくれた父のプロフィールを少女らしさで精一杯話をしたらしい。審査があつて二等に入賞した時は本当に嬉しかったとも書いてあった。

早速激励の手紙を出したことは言うまでもない。私共も久子君の結婚式や法事に幾度か大分に行つた。昨年、昭和五十二年九月には三十三回忌の法要があつた。大勢の親戚の中で私共夫婦だけが他人であるが、全く他人のようだが他人でなかった。長男紘一君が最近建てた広大な住宅に面して二〇〇坪位の庭がある。その中で一番眺めの良い所に故人の立派な墓が建てられた。

智覚浄栄信士 享年三十一歳
私が生き続ける限り、この碑銘は私の心の中に深く深く刻まれて行くことだろう。

一人一人誰にも思い出がある。ましてや戦中戦後を生き抜いて来た私共には、激動のドラマの連続だったのかも知れない。しかし思い出が単なる思い出にとどまらず、自分の歴史を創り上げて行くような強烈な思い出もある。また、その思い出によって日本人一人一人の新しい連帯を生むようなものもあるのだろう。

私のこの思い出は一体何であったのか—今私が考え行動していることそのものなのかも知れない。



○小松海軍航空隊のこと

私共のグループが二相空を卒業して小松空に配属されたのは、昭和二十年三月の末だった。引率者は高槻中尉(教官)であった。藤沢までは小田急、乗り換えて東海道線だが、生まれて初めて白シート青いビロードの二等車に乗ったことを覚えている。松井、出水、小野、石井等の諸兄と共に、多分十名位だったと思う。

北陸線大聖寺を越すと不動橋いぶりばしという難解な名の駅がある。ここから箱形の

可愛い一輛電車で終点片山津駅に着き、そこから歩いて四十分で航空隊に着く。湖岸に葦がそよぐ紫山潟と、美しい日本海にはさまれた砂丘と松林を切り開いて出来た練習航空隊である。遠望すれば皚々たる白雪を頂く白山連峰あり、眼下には桜ほころび始める湖畔の風情も豊かで、夜になると満開の梨花の香りがガールームに漂ったりして、誠に環境が良い所であった。

練習航空隊といっても、甲種飛行、偵察等の予科練習生の訓練隊で、五人程の若人と起居を共にし、教育に当たった。

ときには飛行場のある基地に行つて航空機の上に遮蔽物を置いたり、誘導路を造つて林の中に隠したりする手伝いをした。基地に行く時は楽しい。二時間がかりの長旅であるが、カッターで交替しながらのんびり漕いで行く。特に紫山潟から今江潟に入る水路はまさに一幅の南画であった。南宋詩人陸游の「山重水複水路無きかと疑えば柳暗花明また一村」を彷彿とさせる田園と水の旅情風景だった。

その今江潟の西側が飛行場である。海中に没した安宅の関が指呼の中にある、松林に囲まれ当時一式陸攻などの楽々発着出来る広大な所だった。

当時のんびりした環境とは対照的

に、沖縄特攻のための神雷攻撃隊、退避して来た豊橋空(九六陸攻)等が雑居して、しかも毎日沖縄特攻に四、五機出撃するという状況であった。一式の風防を開けて、見送る私共にくつきり日の丸の大扇子を振つて出掛けた搭乗員の顔は今も鮮烈に眼に浮かぶ。

十日位してから先任の堀少尉が食事後休んでいる私共の所にやって来た。「話があるから別室に集まれ」と言っていてつくづく呆れた。石井学生！お前は今何杯食つたと思うか」「分かります」「そうだろう！分からない程食つておる。お前が十人中最高に食つておるが十四杯だ。今日は一人一人何杯食つておるか全部調べた。最低の鈴木学生でも八杯」堀少尉の声はますます荒くなる。「お前らはブタか、野良犬か、士官の面汚しとはこのことだ」私共は肅として声なしである。

練習のガールームのキャップガンは海機出身の田村大尉だった。小柄で猫背の色の浅黒い精悍な人だった。

「今夕から五杯以上は厳禁」とやたらに語尾を強める。恐ろしいことが起きた。驚天動地の宣告である。「実はお前達の食いっぷりについて、最近従兵達の笑い話の種にされていることを知つとるかアツ。昨日はお前達のお陰で従兵は夕食にありつけなかった。帝國海軍始まって以来こんな情けない話で文句を言うのは多分無かつたらう」散々である。挙げ句に鉄拳を二発ずつ貰ってしまった。

膳めしの私共にとっては、天国のような豪華版だ。

しかも従兵が後にいて注文すればお代わり自由である。魚も新鮮、野菜も豊富、二相空の比ではない。ただ困ったことは飯茶碗が余りにも小さく上品だ。—今考えれば普通の茶碗だったのだろう—お代わりの回数の多いのに多量少気を使いながら、二相空のかたきをここで、とばかりに夢中になつて食つた。毎日毎日私共新参者だけが、いつでもも食卓にへばりついていて、従兵も私共とおひつの間を忙しく飛び回つた。

古参の少尉や中尉達は、二杯位食べるとレコードに興じたり、ブリッヂのカードを楽しんだりしていた。

しかし不思議なもので一月もしない中に、先輩諸兄と同じく二、三杯で満足するようになってしまった。二相空時代に飢餓ノイローゼのような病状が全員に蔓延していたのかも知れない。

五月中旬頃、館山砲術学校に戦訓の勉強に行っていた田村大尉一行が帰ってきた。玉碎する寸前、刻々と移り変わる戦況や敵情を余す所なく報告してくるその電文を分析、整理し、その場所、その時、その状況に応じた経験を今後の内地の作戦に活かそうというものである。

サイパン、硫黄島、沖繩(當時は激戦継続中)等のもので彼我の戦力差、我が方の攻撃法の成功例、失敗例、新兵器の使用状況等もあった。

その中で特に記憶にあるものは戦車である。サイパンではM4戦車が初めて出現した。前面装甲一八cm、時速四〇km、仰角度五五度まで登るといふ。我が方でドイツから導入した手投円錐弾や柄付円錐弾をもって攻撃しても、戦車周辺の護衛兵に狙撃されてどうにもならぬという。蛸壺も、兎に角頭を出すと撃たれるという。硫黄島ではM1戦車が初めて出現した。前面装甲二四cm、車体の長さ九mという。硫黄島では高角砲を水平にして攻撃したところやっと一台擱座したという。他の戦車砲では全く歯が立たぬということだった。一台に十数名の狙撃兵が付いていてとても近づけぬという話だ。

電信によると、飛行機はどうでもよ

武器が欲しいということだった。沖繩ではM1戦車二台に百数十名のニグロ狙撃兵が護衛していたという。更にグラマンが一機空から護衛していたという。箱形地雷や棒地雷、前述の円錐弾など、すべて近接困難のため無用の長物だというわけである。

ところが田村大尉が声をひそめて、これは軍機に属するかも知れないがと前置きして、毒ガスが対戦車に極めて有効であるという話が始まった。

時は昭和十九年に戻る。当時サイパン陥落時に、長沙付近で日本陸軍がM4戦車群に有効打撃を与えつつ進撃したことがあった。この戦術の中で特に効果を上げたのが青酸カリガスである。米軍供与のM4には米軍の白人兵が乗って操縦していたという。防毒マスクを掛けても二分ともたないで透過し殺傷できる、これには陸軍ではチビという名を付けた。球形のガラス容器に青酸カリの水溶液を詰め、ただ戦車目がけてぶつつけるわけである。灼熱の戦車の車体は溶液を忽ち気化し、拡散する。空気より軽いため数分しか持続効果はないが、呼吸した者はイチコロである。海軍では陸軍の成功例に鑑み、ピール壘に詰めて投擲するようにした。この兵器の内容は兵隊には一切教えないことにしてある。ただ黙って

戦車目がけて投げろというだけであった。海軍では相模原の工廠で作っていたが、月産二トンということであった。事実サイパン、硫黄島、沖繩ではひそかに用いられたらしい。米軍は長沙作戦の時に察知し、直ちに報復を始めたという。戦訓によると、硫黄島の壕内は米軍が岩盤にドリルで穴を開けて新

型毒ガスを注入し、皆殺しにされたという。確かに壕はすべてに繋がっているから最も効果的な武器かも知れない。噂によると、燐酸性の猛毒ガスだったという。沖繩戦で、長参謀長が那覇

の手前で最後の抵抗を試み、さすがの米軍も一時敗退動揺しそうになった時、やはり別種の毒ガスを使って日本軍に相当の被害を加えたという話もあった。

戦訓の伝達の中でこの毒ガスの無差別使用は、日本本土上陸戦にでもなった時どのようなことになるのか、私共には想像もつかなかった。特に青酸カリガスの両国の生産比較等の推定なども語られた。

戦後様々の記録や戦記物を見ても、毒ガスを戦争に使ったという記事は見られない。瀬戸内海の毒ガス島の話や満洲での石井部隊の細菌研究については、暴露されたり、紹介されたりしているが、毒ガスについては局地的な情

報として忘れ去られたのか、あるいはお互いに残虐兵器として世論を慮り秘匿しているのか詳らかではない。

当時の小松空の若い士官達の最大関心事は、米軍の本土上陸に備え、対戦車攻撃をどうするかということと、毒ガス戦法にどう対処するかにあったことは事実である。

これらの講習は、士官の中でもガンルーム士官だけに語られ、かつ、その対策研究や実地訓練も私共若い士官だけで行われた。

特にきつかったのは密閉したコンタリート部屋で直結式と間接式のマスクを付けた私共が十数名入り。催涙ガスを焚いて、誰が一番早くへたばるかという無茶な訓練を受けたことがある。五、六分もすると殆どの人が苦痛を訴えドアを叩くが、外に意地悪の先任少尉がいて中々開けてくれない。一番先に出た奴はその代わりにビンター〇〇が発食わずと脅す。やっと解放されて外に出ると涙と咳でどうにも我慢できぬ。その後三日間位皆苦しんだ。中には入院する者も出た。

伝達練習の中で今でも覚えていることの一つに、サイパンにおけるロケット攻撃の話があった。当時陸軍と違って、海軍は上陸米軍を水際で殲滅しなければ絶対守れないと主張して譲らな

かった。

米軍に制空権、制海権を握られたサ
イパンには、海軍の対艦船用の一トン
魚雷が大量に貯蔵されていた。雨樋の
お化けみたいな奴にそれを載せ四、五
km離れた米軍の上陸橋頭堡に向かって
プチ込んだ。飛距離の十分の一位の命
中誤差はあったが、爆発力が物凄く、
米軍の被害は甚大だったという。

米軍は当時ドイツのV2号がサイバ
ンに設置されたと見たらしい。慌てた
米軍の電信交錯する中に、このような
報告がキャッチされたという。

結局、予科練習生の教育をしたり、
彼らと共に飛行基地の整備作業をし
たり、また、私共自身様々な訓練―米軍

本土上陸のための―を受けたりして慌
ただしく二カ月を終えたわけだが、特
に印象的だったことが二つほどある。

四月六日、早朝第一種軍装帯剣して土
官集合の命がかかった。本吉司令から
聯合艦隊司令長官豊田副武大将の各航
空隊に宛てた電文を厳かに伝達され
たことである。

「我が国の興廢この一戦にあり」に
始まり、「各航空隊は全力を奮って沖
縄特攻を支援せよ」という意味の内容
であった。身の引き締まる思いだっ
た。あの時、あの状況で誰一人として死を
賭して国難に殉じようと思わぬ者はな
かった。幼時と青春の殆どを日本の国
難の時期に育った私共、そして緊迫し

た一つの局面では自律的 he 律的を問わ
ず、皆その方向に宿命を感じ取ったに
違いない。

四月の末、学友の国鉄に入社した吉
崎がはるばる小松空に面会に来てくれ
た。嬉しいの一語に尽きる。二人で金
沢の兼六公園に行った。池畔の小さい
茶屋で彼と、死と生のことなど色々
話は尽きなかった。

私が小松空に来てすぐ知り合った加
賀宝生流の佐野友吉さんの舞台に彼を
誘った。「私は小松空にいつまでい
るか分からないが、早速宝生の年会費を
払って会員になったよ」と言ったら彼
は「気が早いというか、君らしいよ」

と言って笑った。友吉さんの演能は「巻
絹」だった。地方にしては立派な舞台
だったが、客は二十名もいなかった。

吉崎君とは学生時代から演劇研究会
をやっていた。こんな所で軍服を着な
がら、彼と一緒に好きな能を鑑賞でき
るのは貴重なひとときだなと思った。
夜、片山津に戻り、矢田屋別館（水交
社）で夕食をとった。

別れる時、土産だと言って我が家か
ら託された品と、彼が是非読めと言っ
て世阿弥二十三部集をくれた。
その奥付に「能と温泉をいつも持っ
て歩く君」鈴木兄 吉崎呈としてあ
った。
もうその彼も先に逝ってしまった。

特集

特攻インタビュー（第1回）

陸軍航空特攻

前村 弘氏（前編）

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
特攻ライブラリー取材スタッフ

「編注・当協会では、特攻に関連する

史実とその精神を後世に伝承するた
め、特攻関係者の体験談等を取材し、
記録することを企画し、有志会員によ
り「特攻ライブラリー」を立ち上げ、

先ず、関係者のインタビュー記事を記
録することにいたしました。特攻出撃
の如何を問わず、特攻体験をされて九
死に一生を得た方、特攻出撃を待機さ
れた経験のある方等で、映像と写真を
含めたインタビュー取材を引き受けて
頂ける方がおられましたら、自薦他薦
を問わず、当協会事務局（担当大澤）
までご連絡下さい。」

前村 弘氏軍歴（略歴）

陸軍宇都宮航法学校・特別幹部候補
生第1期



陸軍飛行第六二戦隊・四式重爆撃機
「飛竜」航法士
東海沖特攻、沖縄特攻に参加

○特攻ライブラリー取材スタッフ

（五十音順）

- 及川 昌彦 世話人
- 神崎 夢現 進行・構成
- 倉形 桃代 記録
- 提橋 律子 世話人
- 須貝 智行 写真撮影
- 高橋 暢 映像撮影
- 長尾 栄治 インタビューア

◆入隊まで

前村さんは長崎のご出身で、商

業学校を卒業された後に、一度就職されていますよね？

前村…東京にある日本電気という会社でした。課長と部長が長崎まで来てくれました。2人が面接を受けて2人も入社しました。当時は戦争中でもんですから、卒業が本当ならば昭和18年の2月のはずですが、昭和17年の12月に繰り上げ卒業となりました。文部省として各学校とも戦時中だから早く卒業させて軍需工場とか兵隊に出せ、ということだったと思うんです。1月にはもう東京の日本電気に入社したんですよ。

ところが日本電気はその当時住友通信工業と名前が変わっていました、住友系になったんですね。元の日本電気はアメリカのウエスティングハウス系続だったんだけど、戦争が始まっているもんだから住友通信という名前に変わった。電話交換機や無線機を作っているのが日本電気だったんだけど、私が入ったときは、さすがに軍需工場方向探知機とか電波探知機とか作っていましたね。私もその製造ラインのところで働いていました。

その後、特幹に志願されるといふことになるのですが、そのきっかけは？

前村…日本電気に入社したものの、な

ぜか皆、入営とか召集とかで周囲の人們が兵隊に取られてゆくんですよ。我々若い者は、いつとられるか分からんというような不安や落ち着かない気持ちがありました。軍隊というところは早く行つた方が楽ができて威張れそうな空気があったもんだから（笑）、どうせ取られるんだつたら早く行こうかっていうグループの友達3〜4人で申し合わせて願書を出しました。

以前、別の特幹に行かれた方の話だと、志願するには両親の証明が必要だったという事だったんですが、長崎まで行く訳には行かず、会社の幹部の方の署名を貰って出したのですか？

前村…そうだったんでしょうかね。そのへんは私は記憶ないですね。だけど「兵隊に行くばかりが国の為じゃない。こうして軍需工場で働くのも国の為なんだ」って、工場長から怒られた記憶はありますね。

応募して、試験はあったのですか？

前村…ありましたね。体格検査・身体検査、そして学科試験がありました。いまだに記憶に残っているような試験の内容はありますか？

前村…いや、覚えていませんねえ、もう（笑）。

場所はどちらで行われたのです

か？

前村…願書を出したのは、今の信濃町から乃木坂近くにあった「第一連隊区司令部」っていうところに願書を出したと思います。そこで身体検査から学科試験、全部やったと思います。

試験をやつて、合格通知はすぐに来たのですか？

前村…1カ月くらいだったでしょうかね。合格通知に、昭和19年4月20日までに浜松の第7教育隊に出頭しろ、と書いてあるんですよ。だからいったん東京から長崎に帰って、長崎の実家から浜松まで汽車に乗って行つたわけです。そのときは当然、兵隊の入営と一緒ですから、皆に駅で万歳万歳で見送られましたね、4月20日浜松に入隊しました。

長崎にいらつしやつたご両親からは「頑張つて来い」と言われたんですか？

前村…特に…親父はどうも軍隊が好きだったみたいでね、「よく合格した」って私を褒めてくれたんじゃないでしょうか（笑）。親父はそういうところがありません。

お母様は？

前村…親不孝だったかも…（笑）。

前村…親不孝は、ご兄弟はいらつ

前村…私は男3人、女4人の7人兄弟なんです。ちょうど私は真ん中でしたから、一番甘えて一番楽しんで育つて

るんじゃないでしょうか。兄貴2人がすでに働いていたし姉も働いていました。だから、親の金を誤魔化しちゃ遊んでましたよ（笑）。

お兄様は軍隊ではなく、どちらかで働いていらつしやつたんですか？

前村…ええ、三菱造船でね。1人は三菱電機でね。そのうちの下の兄貴の方が先に軍隊に召集受けて、まもなく上の兄貴の方も召集受けて軍隊に行きました。そうしたら三菱電機に行っていた姉まで、いつの間にか北京に行つて憲兵隊か何かでしばらく働いていました。

それは事務か何かで？

前村…そうです。私は東京に就職しているし。家の中は、本当にガラんとしていたと思いますよ。妹達、私より3つ下のがいたくらいで…女学校に入つたばかりじゃないですか。

お兄様2人は陸軍に取られて

いったんですか？

前村…はい、両方とも陸軍でした。

ご健在で帰つて来られたんですか？

前村…長兄だけはフィリピンで戦死しました。2番目の兄は終戦と同時に2〜3カ月経つたら帰ってきました。

中国にいたんですよ。満州じゃなくて中国で終戦になったので無事に早く帰って来ましたよ。もちろん姉も早く帰りました。

——当時は、兵隊になるとき奉公袋とかいろんなのを持って入るっていうのがルールだったという話を聞きますが、特にそういうものもなくて国民服みたいなのを着て浜松に入営されたという感じなんですか？ 私物とかはいくらか持って行けたのでしょうか？

前村…私物はね、多少は…。でも私物はほとんど持って行かないですね。

——陸軍特別幹部候補生と言われても、我々の世代は解らない人がほとんどだと思うのですが、説明していただけますか？

前村…おそらく陸軍特別幹部候補生を創設した目的は、軍部の方では士官学校とかいろんな制度がありましたけれども、優秀な下士官を養成するという目的で出来たみたいですね。だから、入隊するときには二等兵でなく、一等兵で、星2つ（階級章）で入っているわけなんです。その代わり特別な一等兵だということに星に座金（ざかね）みたいなのが付いた。一応、募集するからには優遇してやらなきゃいかんと思ったんでしょうかね。そして兵隊に入って驚いたのは、私ら18歳のほかに15〜16歳く

らいの年下の人が一緒にいて、子供みたいのと一緒に訓練を受けたことです。だから特別幹部候補生といっても何だかピンと来なかったです。

——年齢差関係なく一緒ということでしょうか？

前村…一緒ですね。ただ、体格的に身長が少し小さいとか痩せているとかか、我々より美味しいものを食べている連中がおりましたよ（笑）。増健兵^〆って言ったつけない。いわゆる健康な兵に育てようという意味の制度があったんですね。

——兵隊では考えられないくらい羨ましいというか…。

前村…そうですね。我々普通の人間は何でもないのに、あいつらは牛乳が余計に付いている、りんごが1つ余計に付くでしょ…だから羨ましい（笑）。

——物資は乏しくなるし…食い物の恨みは恐ろしい（笑）。

前村…そうそう（笑）。増健兵であった人で元気でいるのがありますよ。こないだのテレビの特攻取材に写っていた可愛い顔した男なんかそうですよ（笑）。——特幹兵というのは、歩兵さんとか砲兵さんとかを育てるといって、最初から決

まっていたのですか？

前村…そうですね。最初から決まっています、特別幹部候補生としての科目で、操縦と整備と通信と射手も教育したんだらうと思いますね。大体そのような兵科専門の下士官を育てようとしたみたいですね。その中に航法っていうのは当初なかったんです。そのほかには船舶兵をたくさん採用したらしいです。

航法っていうのは、特別幹部候補生として応募して、その後ですね。特別幹部候補生から航法を育てたほうがいいということになって、満州の白城子にあった航法学校・操縦学校を戦争の情勢があまり芳しくないというので、

急きよ昭和19年に宇都宮へ引き上げました。宇都宮で新しく航法学校・操縦学校を開始したときに、我々150人の兵隊が初めて航法学生として入ったわけです。それまでは航法士の養成は年間20〜25人とか、その程度の人数の教育しかしていなかったんです。

——それまで陸軍航空部隊で航法と

いうのは、特に勉強もせずにはいたのですか？

前村…それまで陸軍は、山や川や海岸を地上の目印にして飛ぶ地文航法でしたが、敗戦色が濃くなってくると何の目印もない洋上を飛ぶ必要に迫られ、他の航法を勉強せざるを得なくなっ

きました。それまでは南方で、どうしても洋上での航法が必要になったときは、海軍から偵察員を呼んで派遣してもらって、飛行機は陸軍の飛行機だけ、航法は海軍の人っていうのを結構やっていましたよ。陸軍の雷撃隊とか爆撃隊なんかそうですね。海軍は航法士^〆って言わないで、偵察員^〆って称してましたね。

——浜松に入営したときの話に戻りますが、入営して最初の訓練は考えていたことと全然違った印象でしたか？

前村…浜松に入隊しましたらね、我々は中学時代に軍人として基本的なオイツチニ、オイツチニの行進だとか銃の持ち方だとか、ひと通り終わっている訳です。だから、どっちかと言ったら飛行機の整備。つなぎの作業服を着ましてね、当時の中国人みたいな作業帽を被って、飛行機のエンジンの教育をだいぶ受けました。

——それは後々の職種と関係なく全員が必ずですか？

前村…そうですね。ただし、我々の中隊は重爆のエンジン、8中隊・9中隊は軽爆のエンジンとか。それから違う中隊は機関銃の整備だとかね、そういうものをやっていましたね。

——そうすると、入隊したときに

ルートは事前に決められていたのでしょうか？

前村…決められていますね。入った教育隊でも、中隊ごとに違っているというので、ほぼ決められていましたね。

それはご自身の志願ですか？

前村…違います。
前村さんが入隊した時点で、戦闘機の空中勤務者になりたいお気持ちがありましたか？

前村…いや、それはとても予測もできませんでしたが、入隊した当時は軍隊の命令の赴くままという感じでした。3カ月の基本訓練が終わってからは、後輩の第2期生というのが入ってくるわけですね。

その際に、私が班長から信用があったのか、皆、南方や中国に持って行かれて転属になってゆくのに、私と松本と大野っていう3人だけが、次の2期生の指導候補生として残されたんですよ。残されてまた一生懸命、初年兵の訓練・指導をやっていましたけれども、ちっとも面白くないんですね(笑)。
そしたらある日、兵舎の出入口付近に空中勤務者になるための試験の告知ポスターが貼り出されていました。

◆空中勤務者試験

それは学校に？

前村…教育隊にです。ポスターを見てから班長に、これこれこういうわけ

から、空中勤務者になりたいと言ったら、すぐ簡単にOKを出してくれたみたいですね、2人が一緒に試験を受けに行くことになりました。京王線の調布に昔、

京王閣っていう遊園地があったんです。その京王閣のあった場所で空中勤務者の試験が行われたんです。人によっちゃ3日間試験を受けたとか言いますが、そんなに長く実際には受けていないと思うんだけどね。一晩泊まりくらいで受験したかもしれません。

京王閣っていうと、今の調布市の競輪場があるところですか？

前村…知らないんですけどね。いわゆる京王閣っていう遊園地だけしか覚えていないんです。戦後、行ったこともないしね。

そうすると、空中勤務者っていうのは、特別な試験みたいなものがあったんでしょうか？

前村…ありましたね。椅子に座ってクルクル回されたりね、紐があつて棒が立っていて、これを手で左と右の棒がピッタリ合うように目視して動かしてやるというような試験があったり。4桁5桁6桁位の窓から数字がパッと落ちるやつを、瞬間的に数字を記憶するというようなテストがありましたね。

上から出る数字もあったし……まあ、あれはいわゆる空中勤務者としての、あるいは航法としての特別な試験だったのかなと思います。パッと落ちてくるやつを瞬間的に捕らえるということ

は、航法には絶対必要なことですから。空中勤務者の試験ということ

は、空中勤務者の操縦とか偵察とか、その後に細かく分かれるんでしょうけども、そのときは空中勤務者ということ

で、具体的な職種とはまだ全然解らなかつたんですか？

前村…解りません。空中勤務者というのは、飛行機に乗るといっただけで、飛行機乗りということは、飛行機の操縦

ができてというふうに、最初は単純に思っていたんですけどね。それで合格して……私はちょっと目が悪いんですよ。赤緑(せきりよく)色弱っていう色盲

じゃないんですけども、色弱なんですよ。成績表を見たら全部「甲」だつていうのに、目だけが「乙」と書いてあ

る。これは駄目だなあと思ったら合格。2日目位に宇都宮に行けど。確か東京駅から浜松に戻らないで、真っ直ぐ宇都宮に行った。そして落ちた同期は、浜松に戻ったんですね。こいつはまだ元氣です。

それで宇都宮に行つて、航法の勉強にすぐ入るんですか？

前村…はい。しかも飛行機は双発の高

等練習機「高練」って言われていた一式高練……(写真をご覧になって)我々

はここに乘つて……10人位乗ったんじゃないですか？ 操縦士とか機関係以外に10人くらい乗ったと思いますよ。でもこれがエンジンの後だから、排気ガスが臭くてね、すぐ乗物酔になつてしまいましたよ。でもこれは優秀な飛行機だったらしいね。

宇都宮に行つていう段階には、もう航法士になることは決定して

いましたか？

前村…いえ、それは解りません。僕は宇都宮に行つて言われたときには、操縦士になれるとばかり思っていました。ほとんど3日か4日目くらいには、慣熟飛行ということで、すぐ飛行機に乗ったと思いますね。それで

10分か15分、宇都宮から飛び立って利根川を渡って富士山が見えてなんていうんでね、20分か30分くらいの飛行をやつて着陸。ところがそれくらいの飛行でも慣れないから、皆ゲーゲー吐く

んですよ。
それはさつき伺ったように、ガソリンの臭いとか排気ガスの臭いのせいでですか？

前村…そうだと思いますね。おそらく3回か4回ぐらいまで……だから大体

皆乗る際に「靴下持って乗れ」って言われるから。軍隊の靴下を1足持ってね、吐くとき、その靴下の中に吐くのです。あれは嫌だったですね。

——前村さんも吐いた口だったのでしょうか？

前村…やっぱり私も1回ぐらい吐きました。

——慣熟訓練で初めて飛行機に乗られたわけですか？

前村…そうです。初めて飛行機に乗りました。

——そのとき、乗客のような気持ちで黙って乗っていたのですか？

前村…そのときはお客さんみたいなもので、何もなし…ただ、「おう、あそこに富士山だ！ 利根川だ！」ってな感じだね。観光旅行みたいなもんですが、もう5分もしないうちに気持ち悪くなってきた。それも3回か4回の体験飛行で慣れたのかなあ。

——それで、最初のとときに慣熟飛行をやって、我々は航法というものを勉強する為に宇都宮に来たんだってというのが、3日目か4日目に教わって解りましてね。飛行機を正しく定時定点まで誘導するのが航法の仕事だと。久しぶりに《定時定点》っていう言葉を今思い出して言ったんですがね、当時から《定時定点》決まった時間に決まっ

た点に運ぶ》が航法の任務だというふうに教わっていました。

◆航法について

——でも、先ほどもお話があったように、当時陸軍に航法なんていうものはないし、聞いても「？」という感じでしたか？

前村…ええ、初めて航法って聞きましたね。だけどね、その前に20人か30人ずつくらい、曹長さんや軍曹・伍長の

下士官の教育を受けた人がいたんですよ。その人たちが、我々の内務班長ということでやつたけど、この人たちは航法を教えてくれるわけじゃないんです。航法を教えてくれるのは、士官学校の56期くらいの人が、それこそ白城子でみっちり訓練を受けた寺島中尉という主任教官が、非常に熱心に航法を教えてくれましたね。

——特幹1期生としての航法士、同期生は何人くらいいらっしやったのですか？

前村…150人です。150人が、ほとんど一緒に訓練を受けましてね。4カ月間…だから8月に宇都宮に入って、昭和19年12月の末には卒業、航法って言うんで…その間には、宇都宮から仙台まで行って出張訓練をやってみたり、太平洋側の金華山のところまで

訓練で飛んだりしてましたね。

——航法士の勉強っていうのは、最初は教科書開いて座学から始まるのでしょうか？

前村…そうですね。航法っていうのは、水測航法っていうのと無線航法と天測航法と、3つか4つ航法があるんですね。そのうちの推測航法と天測航法を、私たちは勉強しています。無線航法は、全然、無線機は扱っていませんね。

——例えば天測航法っていうのは、どういふものなのでしょうか？

前村…天測っていうのは、このくらいの機械で六分儀とか八分儀っていう望遠鏡みたいなやつがありましてね。昼間は太陽を使いますが、夜間は星を使います。まず星の名前を覚えなといけません。その星の名前とは、1等星、いわゆる恒星です。恒星はほとんど動かない位置にあるから基準になりま

す。よく星の名前を夜中に覚えたものです。今だに15や20の星の名前を覚えています。星にはシリウス、シエダ、ポルクス、カストル、ポラリスなどがありました。

——それらの天体を六分儀で捕まえて何時何分何秒とメモをとってね、もう一つ、これとは対照的にポラリス（北極星）を捕まえて、それと恒星がおちあ

たところが自分の位置です。それを計算して、ちよつとややこしい…。

天測の場合には天測図とか天測略歴とかっていう厚い立派な本を両方、重いのを持っていかないとなかなか出ないですよ。だから、一生懸命飛行機の上で何時何分何秒って書いたり、天測図には、この星は何月何日何時何分には、こういうような経路で移動しているって書かれた表がありましてね、それらの本を持って乗ったもんですよ。

——そういう星っていうのは飛行機の窓から覗きながら見るのでしょうか？

前村…そうですね、飛行機の窓から。重爆だと、上にも天窓がありますね。

前村…ええ。飛行機ってやつは絶えず様々な条件で上下左右に動くから、操縦士が機体をしつかり安定させるために操縦桿を握っています。操縦士に「これから測定開始、保針！」って伝えて…保針っていうのは、針を動かさなように固定してくれと頼むわけですよ。…それに操縦士が「了解」と応えてやつと測定を始めます。そのような連携を取りながらの作業です。だから、保針をいつまでも続けさせると操縦士は疲れてしましましてね、あまり長時間は駄目らしいです。

——測定は何分くらいで行え、という決め事はあったのですか？

前村…そういう決め事はなかったですけどね。やっぱり操縦士も疲れないような、依頼するにしても状況を考えて依頼しろと言われていましたね。

——前村さんの経験だと、大体10分か20分、天測で今の位置どのくらい、と計算できるものなんでしょうか？

前村…10分、20分っていうけれども、ずっと長い間の一連の作業じゃないんですよ。パッと天体を捕まえたところで、それから5分間たってからまた保針をやる、そういう測定の仕事ですからね。さほど労力をかけずに天測できたいと思うんです。

——推測航法っていうのは、また違うのでしょうか？

前村…推測航法っていうのは、爆撃照準眼鏡っていうのがいつも股のところに挟んでありまして、天板を回せばメーターが回るようになっていきます。地図を見たら川の曲がり角がこうなっていて、ここを目標に捉えてスーッと並行して流れるような飛び方をして、針路が何度何分何秒って羅針盤で出るわけですよ。

それからもう一つ、対地速度測定っていうのがあって、爆撃照準眼鏡の天板を回すと、前方の目標をつかむこと

ができる。それをつかんでまた前方の目標が流れてくるときに、何秒か遅れて流れて来た。そうすると何度の方向から何キロの風が吹いているっていうのが計算で出てくるわけですよ。

大体地球の偏西風っていうのは常時吹いているもんですからね。その辺を考慮に入れて、常識的に偏西風っていうものを覚えていかなきゃいかん。飛行機はまっすぐに飛んでいるつもりでも、すぐ風に流されてしまうので、どれだけ流されているのかを推測し針路を修正してゆきます。

——やはり洋上航法、太平洋上で、海しか見えないと測定も難しくなるのでしょうか？

前村…洋上の場合、大抵波がザブンとなったときに、白波が、泡が出るんですね。その泡が一杯あるわけですけど、ある泡をポツとひとつかみ、それから目標物として目を外さないようにして測定する。次の泡を追って、この泡と泡の間を何秒で通った、今何キロ走っているというようなことを計算するんですよ。

飛行機の羅針盤というのは、実にいい加減な測定器でして、磁石なんです。だから、カメラでも持って羅針盤の側に行くと、それだけでも針が動いて誤差が出ます。それから速度計って

いうのも、これも実にいい加減。これは速度計というより風圧計なんです。風圧だけで計測する。やはり航法的に正確な風向・風速・飛行機の数・定時定点に持つていくためには、ただ単に羅針盤と速度計だけの計測だけでは難しい現実がありましたね。

——先程、羅針盤の話が出ましたけれど、よく軍刀を持ち込んで飛行機に乗るといふ映画のシーンがあります。軍刀なんかでも反応するのですから、映画用に撮られた、やらせなんじゃないですか？

前村…全然だめ。ただ戦闘機に乗る場合には軍刀でもね、羅針盤が狂ったら狂ったまま行けるんでしょうけれど、重爆の場合には、とても軍刀なんか持ち込んでだめですね。

——じゃあ、実際に軍刀を持ち込むこともなかったのですか？

前村…なかったです。少なくとも我々はなかったです。ピストルも持たされなかった。だからね、本当に飛行機っていうのは単純っていうかいい加減。羅針盤と速度計でよく飛んでいるなあと、我々航法士から言ったら、本当に危険だなあと思っています。

——実際にそれでよく行方不明になったっていうのは、戦記とか戦史ではあるんですが、やっぱり航法ミスも

あったのでしょうか？

前村…航法ミスっていうのは結構あったんじゃないでしょうか。特に硫黄島から日本に帰ってくるときとか、サイパンからのときは、燃料が切れて墜落するっていうことが、非常に多かったと思います。

それから後の昭和19年10月に台湾沖航空戦というのがありまして、あれには海軍の爆撃隊も行ったけれども、陸軍飛行九八戦隊という雷撃隊も行って、いるんですよ。それで陸軍の場合、海軍は偵察員のような航法の専門家が乗っているから無事に帰って来られるんですが、九八戦隊の場合には、あまり航法員を乗せてなかったんです。だから行って雷撃はするものの、帰ってくる時には、ちょうど偏西風を逆風を受けて帰ってくる状態でしたからね。あと30分で台湾の航空基地に着くはずが1時間たっても着かない、というところで、燃料切れで海の中に墜落した九八戦隊がずいぶん多かったです。あれから陸軍が慌てて航法員を乗せようと、積極的にやりだしたのが昭和19年の冬、くらいかな。

◆航法士訓練

——ちょうどそのときに矢面に立たされたのが、前村さんの世代ですね。

前村…そうなんです。それに呼応して我々が航法を勉強したということですね。

——最初に実戦機に乗り込んでからキー67しか乗っていないのですか？

前村…私は双発の高等練習機とキー67、2機種しか乗っていないですね。呑龍にも97式重爆撃機にも乗ったことがないです。

——キー67の場合だと、操縦士が右側にいて副操縦士がいてというような配置ですが、前村さんの航法士はどちらの配置だったのでしょうか？

前村…正操と副操の間に機関係の席がありまして、機関係がどいてくれると階段があるんですよ。3つか4つ。その階段を下に降りたところに、手で引っ張ると前に出てくるような丸い椅子があって、それが航法席なんです。機体前方下の風防ガラスの中に座る状態になっちゃうんですよ。両足を着いていると風防ガラスから下の光景が全部見えるのが、我々航法の座席でした。

——前方が風防だけなので視界が広いということですね？

前村…そういうことなんでしようけどね。操縦士との連絡は伝声管と言って、飛行帽の付近に金属パイプが出ていますから（聞き取る方の管）、そのパイプにガチャツとはめて、口元にはこん

なパイプを持って操縦士と話をする。今は無線で電話ができるんですが、当時は金属パイプを通して会話しました。

——あれは結構聞こえるものなのでしょうか？

前村…聞こえますよ。

——配置から考えて、前方の機銃掃射は前村さんが行ったのでしょうか？

前村…はいそうです。本当は前方銃も射手がいるはずなんですが、私がこの飛行機で浜松沖に行ったときは、これが無くて前方銃があったんです。だから私は航法と射撃と両方やらなきゃいけない任務だったんです。正直なところ、射撃はやったことなかった（笑）。射撃の訓練は受けたことないんですよ。1回だけ地上で撃ってって言われてやったことあったんだけど…機関係は難しいですね。腹ばいになって機関係撃してダダダと弾が出て、銃身が全部目の前に弾がボンボン入るような…で、おっかなくなつてね、もうやめましたよ（笑）。射手はやるものじゃないって（笑）。

——簡単なものじゃないんですか？

前村…あれは簡単なものじゃないですね。

——爆撃照準するための場所は別の場所にあったのですか？

前村…（写真を見て）爆撃照準眼鏡は丁度この下にあるんです。ここにL字型に出ている、ピトー管と言いまして、速度計と風圧計はここにあったんですよ。

それは爆撃手が別にいて、その人がやるのでしょうか？ それとも前村さんが調整するのでしょうか？

前村…それは爆撃手がやるでしょ、私は航法であつて、あまりいろいろな事はしてなかったですね。ただ、誰もいないときは射手もやらなきゃいけなかったんだだけね。

——宇都宮の方の航法学生として12月くらいまでいらして、その次は当然演習の日、他の用途機に乗って実地訓練を受けられたわけですが、先ほど仰っしゃられたように金華山沖とか仙台の方に行つて訓練されたのでしょうか？

前村…機種はみんな一式高練です。一式高練は教育用の飛行機だから、爆撃照準眼鏡を4台から5台くらい並べてそれぞれやつていましたよ。

——あれも向き不向きがあるんですか？同期生でも航法士として優秀な人とかちよつとそうでない人とか…。

前村…ありますね。よくこんなのが航法に受かったもんだなあつていう同期もいますよ、酒ばっかり食らつて（笑）。だけど、やっぱりある程度、勤がない

とね。航法の場合はプラスとマイナスをよく間違える。プラスとマイナスじゃ全然逆ですからね。そういう些細なことがあると思うんですよ。

勤の悪い方の乗った飛行機についてのは、ほとんど帰つてこなかったのでしょうか？

前村…まあ、操縦士も航法の基本的なことはやっているから、そうとも言えないでしょうけれど、航法士から「次の進路、何度」って言われたら、「これ、違うんじゃないか」ということはあると思うんですよ。

——やっぱり操縦士と航法士のコンビネーションというか、息がピッタリ合うことが重要なのでしょうか？

前村…やっぱりその辺が重要だと思いますね。

◆陸軍飛行第六二戦隊への配属

——この後、昭和19年12月に卒業されて、すぐにいよいよ実戦部隊へ配属となつたのでしょうか？

前村…そうですね。ただ、私たちは12月の20日過ぎに卒業して、10人が飛行第六二戦隊と一緒に赴任しましたが、そのまま宇都宮に2〜3カ月残っていたグループもいたんです。翌年3月になってから六二戦隊に来たのがあります。ここにいる花道っていう、この間

テレビに出っていました。彼なんかは、私らより六二戦隊に来たのが3カ月も遅れている、そういう者もいたんですよ。

——前村さんは配属が決定されてすぐに？

前村…はい、すぐですね。10人の中で私が一番年上なのか成績が良かったのか、先任で号令かけて申告したりしたもんですよ。

——それで西筑波の方に赴任されたわけですね。行ったらビックリされたとか？

前村…そう、行ったら誰もいないんだ(笑)。その代わり楽でしたよ。炊事場にいれば白米の飯はたっぷりくれるしね。それこそ半分しか食えないくらい大目にくれるんですよ。酒はくれるし航空糧食はくれる。毎日毎日、将棋をやったり。あんまり暇なんで男のくせに刺繍までやりましたよ(笑)。

——そのとき飛行第六二戦隊の本部隊は南方にいて、筑波に移動中だったのですか？

前村…そうなんです。フィリピンのクラークフィールドからナムレア、スングイパタニ、アピ、サイゴン、海口を経て、台湾の嘉義に1回着陸して、福岡、福生、再び残留者の輸送に台湾へ向かう途中、經由地の上海で戦闘機に攻撃され、その間にずいぶん死んだ人

もいましたね。うちの中隊長なんかは上海の飛行場の手前で撃たれて、背中火傷をして病院に入ったっていうのもいるし、結構帰るのも大変だったみたいですよ。私らは行ったことがないから。

——前村さんは航法学校、宇都宮に入られた段階では、まだ特幹の学生扱いだったんでしょうか？

前村…そうですね。階級は、もうそのときは上等兵になっていたかな。特幹の卒業生として飛行第六二戦隊に派遣ということになったのですか？

前村…そうですね。ただその辺は、六二戦隊に入って3〜4月くらいまでは、皆一列に上等兵として階級章は座金がついていたわけですが、4月になったら、たしか兵長になったと思うんですよ。星がなくて筋一本付いて。それで、私が沖繩に行ったのが昭和20年4月17日なんだけど、兵長で行ったのか上等兵でいったのか、よく覚えていないのですね。

——候補生だったのですか？

前村…伍長になって座金がとれなければ候補生なんです。まだ一人前の下士官じゃないんです。

——学生扱いなんですか？

前村…そうですね。同期の花道と大

内というのは、昭和20年5月25日に攻撃しているのですが、この2人が行くときには伍長になって行っているんですよ。私は行かないものだから、こちらは伍長にならないんです。出撃する人間だけ伍長になっている。ということは、伍長で戦死すれば、特攻で戦死した人は少尉になる。ただ我々みたいに兵長で戦死したのは准尉にしかありません。そういう差がありましたね。彼らは特別待遇で行ったんです。だから私の機の前を飛んでいた同期の近藤と村瀬なんかは、戦死したけど少尉じゃなくて准尉になってるんじゃないのかなあ。

◆戦隊訓練開始

——飛行第六二戦隊が南方から三々五々やってきて、だんだん忙しくなっていくと思うんですが、実戦へ向けての訓練という形に変わったのでしょうか？ 経験豊富なベテランの先輩方が集まってきて、ようやく部隊としての形ができて…。

前村…そうですね。歴戦3年も4年も南方でイギリスの基地を爆撃してきた人たちが。当時はまだ特攻攻撃は始まっていないので、通常の水平飛行の爆撃です。それでも爆撃に行つて戦闘機に撃たれて、すでに相当数死んでいたわ

けですけれど。

内地に帰ってくる本当の歴戦の勇士っていうのは、数えるほどしかいませんでした。皆初々しく特別操縦見習士官だとか通信省の乗員養成所出身だとか…。うちには少年飛行兵に操縦士はいなかった。何人かはいたけど。通信には少年飛行兵が多かったです。

——各務ヶ原飛行場の機体の装備はいかがでしたでしょうか？

前村…各務ヶ原飛行場周辺を飛んで、部品が足りないのか何か分からないけれど、長野の松本の飛行場まで行ったこともありましたよ。ほとんど各務ヶ原で。ところが、キー67も標準機から「と号機」とか「さくら弾」を受領したのが、4月から5月にかけてですね。

——実は、三菱重工の名古屋で造った標準機の機体に、さくら弾を乗つけたり、と号機のように爆弾を2発積むような工作をしたりっていうのは、みんな岐阜の各務ヶ原にあった航空廠という、お役所がみんな装備したみたいだね。三菱とか川崎がやった訳じゃない、みんな航空廠がやったみたいですね。そのへんは、はっきりしたことは覚えていないんですけども、航空廠と川崎重工が川崎飛行機が三菱重工か……こういう絡みはなかったんです。

——有名な話で、名古屋の三菱の飛行機で、飛龍なら飛龍を作って、その後、各務ヶ原まで持っていくんですが、三菱の工場近くに大きな飛行場はありません。そこで陸送で持って行かないかならないんだけど、当時、列車で運ぶには大きすぎてトンネルを通れず、車で持っていくと道路状況が悪く、機体が壊れて揺れてしまうので、牛車に乗せて路上をゆっくりゆっくり運んでいったという話がありますね？

前村…そういう話、聞いていますよ。戦後になってからですが、牛車で引張ってキー67の機体を運んだって話は、よく聞きますよ。

——飛行第六二戦隊の本隊が帰り、機体を受領した頃は、今までの通常の攻撃で陸軍の爆撃法を訓練していたのでしょうか？ 海軍の洋上航法のやり方の訓練は、既にその頃から始まっていたのでしょうか？

前村…いや、3月末くらいに飛行機がだいぶ揃ったから、洋上航法訓練をやるうっていう場面はなかったですね。ほとんど離着陸の訓練が多かったです。というのには、操縦士が特操の1期、2期とかいう人たちですから、操縦に慣れない人が多かったんですね。だから、ほとんど夜間や薄暮の離着陸の訓練でしたよ。

我々航法では、航法訓練をやるというチャンスがほとんどなかったです。ただ、各務ヶ原に出張するときに自分でやったくらいです。

うちの部隊に航法をやれという主任はいいましたが、この人は飛行機にあまり乗ったことがないですね。中隊長候補の教官をやったくらいの人なんです。この人も操縦の途中で転科した人だから、航法の勉強は六二戦隊ではあまりやらなかったですね。

——離着陸の訓練のときには、前村さんには航空士として担当の飛行機や、一緒に乗ってるだけかもしれないですけど、空中勤務者割でペアが決まっています、ずっといつも一緒に乗る感じなんですか？

前村…いや、それが出撃というペアが決まってしまうんですが、出撃命令の前の段階では、ランダムに乗っていましたね。決まったペアというのは、あまりなかったと思うな。

——じゃあ、訓練のときには、相手がランダムに乗ってきたらスタートする、みたいな感じなのですか？

前村…そうなんです。ただ、航法のくせに離着陸訓練の飛行機にはしょっちゅう乗っていたんですよ。それがまた恐くてねえ（笑）。操縦の特操の少尉さん二人が訓練しているとね、俺、

着陸苦手なんだよね、お前やつてくれよ…っていう会話が絶えず訓練中に聞こえてきて、一緒に乗っている私としては恐かったですよ（笑）。

——そういえば、飛行機の前方真下の透明な風防のど真ん中にいたのでしたね。

前村…そうそう！あそこに座っていると伝声管から聞こえてくるんですよ（笑）。

——特操出の空中勤務者であるとか、士官学校出の空中勤務者であるとか、操縦がまた全然違うと思うのですが、いかがでしたでしょうか？

前村…違いますね。特操でも1期生の古いのは上手でした。

——来たばかりの操縦の方が来ると、ヒヤヒヤもんですか？

前村…そりゃそうですよ（笑）。やはりヒヤヒヤもんですよ。

——気持ちとしては、特攻隊で出撃するのと、あまり変わらなかったのでは？

前村…そうそう、いきなり機体がバウンドするしね。やっぱり恐かったですよ。

——3月になって、大分海軍航空基地の方に行かれるんですけども、それは跳飛弾爆撃の訓練ということで行かれたのでしょうか？

前村…そうです。一応名目上は跳飛弾

爆撃訓練という目的ですが、実際の訓練は跳飛弾なんているものは落とすことないんですよ。軍艦めがけて、さつと低空で行って軍艦の甲板をスーッと乗り越えて、また超低空で離脱する、でまた超低空でやる、こういうすれすれの飛行訓練を1日、午前・午後と繰り返します。

私の記憶では午前中12回、午後12回というふうに覚えているのですが、実際にはそんなに行ってないかもしれません。それほど体力が続かないと思うんですよ。ああいう飛び方をするには、本当に体力がいるんですよ。こうしたときに、よくGがかかるっていうのでしょ、たしかにその通りなんです。頭が上がらないくらいGがかかってくるんですよ。そういう訓練を1週間〜10日と何度も繰り返ししましたね。

——あれは飛行第六二戦隊の全機が行ったのではなくて、そのうちの何機かが派遣されたのですか？

前村…そうです、全機じゃないです。たしか全部で8機〜10機くらいいたのかな。そのうちの1機が、軍艦の甲板を乗り越えたのはいいけど、降りすぎて洋上に接触して飛行機が真っ二つに割れ、それに8人乗っついていて4人くらいが死んだんじゃないですか。残った4人は病院へ収容されました。その中

に1中隊の中隊長の岩本大尉がいたんです。病院へ収容後、1週間〜10日で帰ってきましたが……1ヵ月後には飛行機が墜落して、その人も死んだ。別府湾で洋上に接触したのはその1機だけでしたよ。

——海軍の飛行基地に移動して、どこで宿泊していたのでしょうか？

前村…我々が宿泊したのは、海軍の基地にあった広い体育館みたいなところに座布団をひいて、そこに寝泊りしていましたよ。

——やっぱり、陸軍の基地と海軍の基地とでは違うところがありましたか？

前村…そこは臨時の宿泊所だから正式じゃなかったです。10日〜2週間くらいいたのかなあ。1週間か10日くらい経ったら、米軍艦載機の爆撃が始まったんですよ。3月18日に爆撃くって慌てて逃げ出して、19日の朝に筑波に帰りました。

◆東海沖特攻出撃（昭和20年3月19日）

やっと筑波に帰れたなあと毛布にくるまって布団に寝ていたら、午前10時頃「空中勤務者集合、直ちにピスト前に集合」と呼び出されました。行ってみたら特攻出撃命令でしょ。

そのときの戦隊長は、有名なサイバ

ン爆撃の功績（アスリート飛行場攻撃に於いてアメリカ軍機12機炎上、全機硫黄島に無事帰還）で天皇陛下に単独拝謁を仰せつかった新海希典少佐という方なんです。この人が大分海軍航空基地で爆撃くってるときに、逃げずに椅子に座って敵機を睨みつけていたというエピソードを持った人なんです。

この人が爆撃の最中に一式高練で帰ってくるんですが、飛行場で適当なところがなくて、代々木の練兵場に着陸するんです。そこで航空本部に出頭したら、六二戦隊は特攻出撃しろという命令を受けた。新海さんはそれに強く反対して、ゴチャゴチャやっていたみたいなんです（編注・最後は「やむを得ないので自ら先頭に立ち、特攻として突入する」と主張したという）。

結局、航空本部の言いなりになって、翌日3機の特攻機を出撃させたんですよ。新海戦隊長は釈然としないまま、自分の先祖代々の墓が桜上水にあつて、そこできとが坊さんやっているというもんで、お墓参りをしたそうです。翌日立川へ行って、迎えに来いと立川まで一式高練で迎えに来させて筑波に帰って来て、19日の朝早く帰ってきた。帰ってきたらすぐ出撃命令を出したわけです。それで私が1番機の航

法ってことになりました。

新海さんは、やっぱり特攻に出すのは六二戦隊じゃ未熟だということで反対したんでしょう。そりゃそうかもしれません。とうとう新海さんも、自分も戦果確認機として行くというので、我々3機攻撃機の後ろをずつと付いてきたんですよ。

そして、帰って来なかった。

——でも重爆機で戦果確認といっても、実際には命懸けですよ。

前村…そうです。命懸けだし、確認は取れていませんが、新海さんはその飛行機に250kgの爆弾を積んでいたんじゃないかという話もあります。我々が体当たりをしたのを見て、自分も体当たりをするつもりだったのではないかと言われていますけどね。

新海さんは、自分が特攻命令を出していたにも関わらず、航空本部では六二戦隊のあの日の出撃を特攻とは認めていないんですね。だから戦死しても特攻隊の戦死者のように2階級特進にはなりません。本来なら大佐のはずなんです。

——私も調べてみましたが、この3月19日の出撃は特攻の記録としてはないですね。

前村…ええ。だけど我々は大分海軍航空基地から帰って来て、「空中勤務者

集合！」と呼び出され、慌てて飛行場

に行ったら黒板に「攻撃法ハ特攻トス」って、はつきり書いてあるんですよ。ここにある当時の写真に「攻撃法ハ特攻トス」の文字が黒板に書いてあるのが見えます。それでも特攻と認めていないんです。特攻であるかないかで遺族年金が違うし、本当に…、ご遺族の方にしてもお気の毒ですよ。

——3月19日の出撃は、前村さんとしては初陣となるのでしょうか？

前村…初陣ですね。



（次号、後編へ続く）

新刊図書紹介

○加藤 浩著

『神雷部隊始末記』

—人間爆弾「桜花」—

特攻全記録—



昭和20年4月12日第3次桜花攻撃に出撃する攻撃708飛行隊の一式陸攻

先の大戦末期、一・二トンの巨大な弾頭を装備した得意なロケット機、いわゆる人間爆弾「桜花」を主兵器として運用し、一撃必殺の特攻攻撃を主任務とした第七二一海軍航空隊、通称「神雷部隊」について、海軍航空特攻の嚆矢とされる敷島隊より20日も早い段階における、その編成から、訓練の詳細、終戦に至るまでの軌跡、その全容を、約10年にも及ぶ綿密な聞き取り調査、取材によって明らかにした海軍特攻戦史の決定版とも言える大著である。入手し得る限りの正確なデータに基づいた大量の編成表類のほか、写真・図版類600点余、カラー写真・航空機カ

ラー側面図等多数収録。「執筆に当たり、桜花開発の背景として、日本がマリアナ沖海戦に完敗した結果、特攻戦法を選択せざるを得なくなった状況に始まる戦局の大きな流れと、『生きて還らざる大威力の新兵器』搭乗員の募集に応じた方々の証言を交えて、沖縄戦から終戦に至る海軍特攻作戦の中で、戦局に翻弄された神雷部隊の方々の置かれた状況と終戦から部隊解散に至るまでの出来事を、過剰な形容詞を排して時系列にて理解し易く記述致しました。・・・関係者よりご提供頂きました未発表の写真や米軍ソースの写真等と共に、神雷部隊に関わった機体の最新考証を基にしたカ

ラー塗装図を各種図版や補足資料を加え、視覚的な情報も多く盛り込みました。また、今回各種資料を総合して桜花攻撃隊の編成表に加え、従来発表されておられませんでしたが爆戦各隊の編成表も可能な限り復元致しました。更に連日の索敵に活動致しました彩雲の偵察第一一飛行隊の編成表も盛り込みました。桜花に代表される神雷部隊の成立から終焉までを最新の資料と証言にて御理解いただけるようにまとめた一冊です。御一読頂ければ幸いに存じます」と、著者は述べている。

A5判ハードカバー・560頁(内カラー24頁)

定価 3990円(税込み)

発行 (株)学研パブリッシング

販売部 TEL03-6431-1201

〒141-8510品川区西五反田

2-11-8

○田中賢一著『私本和漢朗詠集』の頒布について



標題の書は、著者(陸士52期・評議員)が、(財)偕行社の会報「偕行」誌に35回にわたって連載したものであるから選定し、補筆・改訂して編集されたもので、標題は「愛国心、正気の歌、両国の花、秋風五丈原、雁、白雲、古城、旅、出逢そして別れ、彼我最初の歌集、同統、滅びしものは美しき哉その一、同その二、親子の情、家族の愛情、戦死者の妻の心情、出陣にあたり妻との別れ、出征した夫を思う妻の歌、死生観、隠者、酒呑み、武人の文才、武夫の心、春、夏、秋、冬、友情、故郷、七夕、正月、和漢歌人の姿」以上32項目を各1頁に、和と漢を概ね半々に纏めて解説を施した、32頁の小冊子ながら、座右に置いて折に触れ愛読・朗詠するに適した好著と思われるので、著者の以下の言葉と共に紹介する。「我が国の古典に和漢朗詠集なる書物がある。平安時代藤原公任が編じたもので、和は和歌、漢は唐の時代の詩で、同じ標題のもとに朗詠に適する詩歌を並べたものである。これに擬して私が作ってみたのが『私本和漢朗詠集』である。古典より読み易いと思う。」

頒価 500円(送料140円)

(注) 偕行社会員は、偕行社でお求め下さい。その他の会員は当協会事務局宛お申し込み下さい。

平成21年度第2回理事会・評議員会報告

事務局長

定例の平成21年度第2回理事会及び評議員会が平成21年12月9日、(財)偕行社・会議室において開催されました。

各会議において審議された主要議題は、平成22年度(平成22年1月1日～同年12月31日)の事業計画及び収支予算に関するもので、各会議において、いずれも議決、承認されました。

承認された今年度(平成22年度)の事業計画及び収支予算の内容は、ホームページにも掲載しておりますので、ご覧いただければと思います。特に、今年度の事業計画においては、従前からの懸案事項である協会の会員数の減少を防止するために「会勢拡充事業」として新たな項目が設けられ、会勢拡充事業担当者の組織化、会員の加入促進の具体策を検討し、推進することとなっております。また、多くの理事及び評議員からもホームページの充実や会員一人一人の募集努力の必要性等の意見が述べられました。

一昨年(平成20年)12月に施行されました新公益法人法等により、当協会も正式には「財団法人」から「特例民

法法人」に変わっており、平成25年11月末までに移行申請を行わなければ、解散させられることとなります。現在は準備段階ではありますが、今年度の事業計画においても、平成23年度末までに公益財団法人への認定申請をするこ

平成22年度事業計画書

一方 針

当協会は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を主たる目的として各種事業を推進するとともに、健全な運営に努め、会勢の拡充を図る。また、新公益法人制度への移行準備を図り、公益財団法人移行への体制を整備する。

二 各種実施事業

1 慰霊事業

- ア 春に靖國神社において合同慰霊祭を、及び9月23日に世田谷山観音寺において年次法要を実施する。
- イ 国内外において他の慰霊団体等が実施する戦没者関連の慰霊祭等に参加又は協力する。

2 広報事業

- ア 貴重な歴史的資料として、機関誌・会報「特攻」を発行する。これには、特攻隊戦没者等の関連記事及び特攻関係生存者の証言記事

等を掲載し、会員及び会員以外の希望者に頒布する。

- イ ホームページ上で、会報「特攻」の内容、関連情報及び当協会の運営状況等を情報公開するとともに、会勢の拡充に反映させる。

3 出版事業

- ア 特攻隊戦没者等に関する図書、資料等を作成・刊行し、会員及び会員以外の希望者に頒布又は紹介する。

イ 特攻隊戦没者等に関する史実の調査及び研究資料等の収集を実施し、さらにまた、特攻隊関係者から体験談等を直接聴取し、記録を残す。

4 特攻勇士の像建立事業

- 全国各地の護國神社等へ「特攻勇士の像」を奉納する事業を継続する。

5 会勢拡充事業

- 会員の高齢化及び世代交代等による会員数減少防止のため、新たに会勢拡充事業担当者等を組織し、継続的な会員加入促進のための具体策を検討し、この事業を推進する。

三 主要検討事項

- 新公益法人制度の施行に伴い、新定款等の作成及び新組織体制への検討、整備を行い、平成23年度末までに公益財団法人への認定申請準備を推進する。

事務局からの報告等

寄附者御芳名(敬称略)

(平成21年10月1日～12月31日)

(単位千円)

- 一〇 佐藤 孝一 五 尼子 和世
 - 二 松浦登士郎 二 難波 寿邦
 - 二 堤 彦男 一上久保順一朗
- 御芳志誠に有り難うございました。

新入会員名簿(敬称略)

(平成21年10月1日～12月31日)

- | | | |
|------|--------|-------|
| 北海道 | 中川 聖 | 安藤 利夫 |
| 宮城県 | 佐藤 孝一 | |
| 千葉県 | 金澤 達也 | 笹倉 裕之 |
| 東京都 | 梅田 俊幸 | 萩野 茂雄 |
| | 並木 聖児 | 野口 剛 |
| | 山盛 愛子 | |
| | 北御門 幸子 | 村岡 和恵 |
| 神奈川県 | 磯島 元 | 若宮 正子 |
| | 新井 絵梨 | |
| | 古賀 智 | |
| 岐阜県 | 西尾 信慶 | |
| 岐阜県 | 吉田 裕和 | |
| 兵庫県 | 樺島 義隆 | |
| 長崎県 | 下村 康玄 | |
| 宮城県 | | |

会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

- 北海道 新保 宣彦(21・7・23)
- 宮城県 飯澤 耕作(21・3・17)

群馬県	深井	正昭	(21・11・12)
埼玉県	深堀	道義	(21・6・12)
東京都	浜田	泰臣	(20・11・5)
	梁川	英典	(21・11・7)
	辺見	重孝	(21・12・1)
	田島	幸男	(20・8・11)
	小倉	猛夫	(21・8・6)
	大塩	澄夫	(21・9・18)
	長野	茂門	(21・)
神奈川県	玉置	忠三	(21・9・21)
	並木	竹彦	(20・8・13)
	伊藤	正康	(21・6・11)
	深川	巖	(21・12・17)
	平野	晃	(21・12・27)
	岩宮	満	(21・12・28)
石川県	野村	浩三	(21・)
滋賀県	梅本	順三	(21・1・26)
岡山県	吉住	泰明	(21・9・8)
愛媛県	久松	定成	(20・4・3)
福岡県	川崎	栄一	(21・3・28)

会報「特攻」第80号及び第81号の正誤表並びに第81号の補完

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(訂正箇所)

第80号

21頁 4段目前から3行目

誤「円深き」 正「縁深き」
 35頁 2段目後ろから2行目
 誤「昭和16年」 正「昭和17年」
 37頁 2段目前から8行目
 誤「岡謹平」 正「寺岡謹平」
 第81号
 43頁 4段目前から11行目
 誤「3年間」 正「4年間」
 (補完箇所)
 なお、会員重松源吉氏(陸士56期・福岡市在住)より第81号掲載の「靖國百人一首」のうち、26頁1段目後ろから2行目の「この果てに君ある如(ごと)く思はれて春の渚にしばしたたずむ」の詠者は「丹野きみ子」氏、2段目前から6行目の「こ(そ)の骨は拾う(ふ)すべなしシツタン河の砂一握を骨とするてふ」の詠者は「大饗蓮華」氏、同8行目の「行きずりの人の面影にかよへればせつなきまでに君よみがへる」の詠者は「門屋礼子」氏、同12行目の「妻となり君に仕え(へ)し我の日の短かりしよ今に思へば」の詠者は「勝野はるみ」氏、同21行目及び4段目前から23行目の「かくばかりみにくき国となりたれば捧げし人のただに惜しまる」の詠者は「安藤てる子」氏であるとのご指摘がありましたので補完させていただきます。ご指摘有り難うございました。

当協会会員ご入会のご案内

当協会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊をお祀りして慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私たちは、彼らからその精神を学び、現在の日本の現況や自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動が続けております。ご賛同の方のご入会をお願い申し上げます。

○協会の沿革

昭和27年5月設立
 平成5年11月財団法人認可
 初代会長 竹田 恒徳 元宮様
 二代会長 瀬島 龍三 氏
 現会長 山本 卓真 氏

- 協会の主な事業
- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
- ・講演会等の開催
- ・機関誌等の発刊その他

○年会費

・一般会員 3000円
 ・学生会員 1000円
 〒105-0014 東京都港区芝2-5-19 TAビル4階
 (財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局
 電話 03-5730-1101
 FAX 03-5730-1101

「ご投稿について」のお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願ひします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願ひします。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協会事務局宛とさせていただきます。

記

〒105-0014 東京都港区芝2-5-19 TAビル4階
 (財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局
 電話 03-5730-1101
 FAX 03-5730-1101